

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

真剣であなたに恋い慕い

### 【作者名】

じぼーず

### 【あらすじ】

主人公岬越寺時雨こうえつじしぐれはASE外部顧問でありアーカム考古学研究部門に所属する柔術家で接骨院を経営する特A級達人「哲学する柔術家」岬越寺秋雨こうえつじあきさめの息子である。幼い頃から武術や芸術の英才教育を受けていた時雨は学校などの日常や戦場などの非日常の中で様々な人々と出会い、その人々との絆はやがて大きな力となっていく。

## プロローグ

「もう勘弁してくれ!!」

「フウ…また始まつた、我が息子ながら情けない。いつたい何が嫌なんだい?相手が銃を持っていた事かね?」

「そ」はもういい!槍や刀持ち出してくる達人にくらべりゃドッチボールと変わんないし」

「じゃあHALO<sup>高高度降下低高度開傘</sup>降下で潜入した事かい?」

「それも違う!どっちかといふと百廿さんのおかげで軍用機とは思えないほど快適だったし」

「ではいつたい何が不満なのだね?」

「なんで親子揃つて南の島で時限爆弾の解体なんてやらされなきゃなんねーんだ!!」

「…人体に比べれば簡単な構造だ、それに父親との共同作業だなんて感慨深いだろ?」

「夏休みの工作やつてんじゃねーんだぞ!」

「ほら、こつちはもう終わつたぞ。喋つてる間にも手は止めない」

「ムツキイイ~~~~~!!」

「と、言つわけで。今回のテロリスト施設の占領は完了したよ、  
田舌鳥

「すまなかつたな秋雨、急に呼び出したりして」

「かまわんよ、息子にとつてはいい経験になつた

「流石はお前の息子と言つた所か？」

「まだまだ褒められる段階ではないよ、そっちの悟君と違つてね。今  
回の輸送機の操縦は彼がやつていたのだらう？」

「えつ？ あれつて悟が運転してたのか！」

「うん、でも田舌鳥さんが副操縦士を務めてくれてたんだけどね」

「気付いていたか秋雨、だがうちの悟もまだまだ。そっちの援護に  
向かう際に何発か対空砲火を受けちまつたしな、お互い後進の育成  
には苦労するな」

「まつたぐ。」

「……いや、中学生で軍用輸送機が操縦できるまつが凄ことと思つや、語  
時雨

「……いや、中学生で軍用輸送機が操縦できるまつが凄ことと思つや、語

「未熟者同士キズの舐めあいはその辺にしておけ、そろそろ基地に到着だ」

「依頼料はいつも通りの口座に頼む」

「わかつた、また何かあつたら頼むぞ。外部顧問どもの」

「気が向いたらね」

「じゃあな、時雨」

「おひ、次は銃弾が飛び交わない所で仕事がしたいもんだな悟」

「はは、RPGに比べればマシだ」

「… お前も相当病んでるな」

「こんな危険な田にあつても俺は稼がなきゃいかん、家には欠食児童達が待つてゐしな」

「さて、それでは先に帰つてなさい。時雨」

「まだどうか行くのかよ、親父」

「なに、やつきの墓地で少し氣になるものを見つけてね」

「程ほどにな、亞巳達も心配…してゐかもな。心のビックで」

「ふ、娘達に悲しい思いはさせなこれ。では行つてくる」

「あいよー、新聞沙汰は勘弁なー」

「そんなへマはせんよ」

そうして親父と別れた後は家に帰るだけだ、家族が待つ愛しの我が家へ。

「それじゃあ田舌島さん、また」

「ああ、ウチに就職したけりやいつでも連絡入れる。お前なら大歓迎だ。」

「そん時は医者として登録してくださいね」

「任せや、お前みたいなヤツしか行けない現場なんて山ほどある。」

「…頑張れ、時雨」

「お前にやう言わると不<sup>安</sup>じょ<sup>う</sup>がねーよ」

Jの不況の最中に内定が一つも与えられたなんて嬉しい限りだ（泣）

俺の名前は岬越寺時雨、いじく普通の中学生3年生だ。

今日の出来事？なに、元気でもちつてる裏社会見学つてヤシセ。

## 『岬越寺邸の人々』

「ただいまー！」

「び」その暗殺一家の家の門のようにクソ重たい門を開けて中に入る。明らかに木製なんだが鉄より重い気がする、きっと陽気のせいだな。

「おつかれり～～～!! しーちゃんお土産は？ お土産は？」

いま俺に抱きついてきたのは岬越寺小雪いりつせつじこゆき。

俺が保護して家に引き取ることになった明るく元気な女の子だ。

保護した当初は家庭内暴力の為憔悴しきっており身体中にも痣が多数あつた、情緒不安定な所も見て取れたが今では家族達と暮らすようになつて心の底から笑えるようになったみたいだ。

俺の力の一端が解放された切欠でもあつたため小雪との出会いは信じもしない神様に感謝している。

ちなみに小雪の母親は親父曰く「一度と日本の土は踏めない」としておいた「だそつだ、少なくとも生きてはいるんだから。誰の影響かかなりブツツ飛んだ一画面を見せるが皿巻の家族である（妹

と言つと嫌がる）

「あ～、しーちゃんお帰りなさい… ヽヽヽヽ」

起用に立ちながら寝るという特技を披露してくれてるのは板垣辰子、俺の同級生の妹で現在居候中の小学生である。三度の飯より寝るのが大好きといつ健康優良児でスクスク育っている、将来が楽しみだ。

亜巳曰く「キレたら一番手がつけられない」らしい、親父がいい先生がいるから今度紹介するとか言っていたがどんな人がくるんだろう？せめて人間の範疇に収まつていて欲しい。

「おっ帰りイーぐれ兄、なんか美味しい土産はあんのかよ…」

この口の悪いツインテールは板垣天使、自分の名前を嫌つていて天と呼ばないとすぐに怒り出す短気な女の子だ。悪くはない名前と思つてるのは俺だけか？

食い意地が張つていて一度調子に乗つてオカズを一品掠め取つたら泣き出して亜巳に説教されるは親父に投げ飛ばされまくるわでエライ目にあつた。しかし俺のおやつは笑顔でかつ攫つていく、俺にどうしろと？

「兄貴！暴れてきたんだろ？話聞かせてくれ！」

こいつは数少ない岬越寺邸の男家族の板垣竜兵、どうやら極度のブラコンのようでよく一緒に風呂に入ろうとしたり布団に潜り込もうとしてくるが全て直前で他の家族に阻止される。偶にはいいんじゃないか？と言つと家族の視線が痛くなるのはきっと氣のせいなんだろう、…多分。

「あれ、亜巳はどうした？」

「里口ねえなり部屋にこもんじやねーの？それよりぐれ兄イお土産  
！」

「わーかつたつての、ほり陽軒のシユーマイ。大量に買つてきたか  
ら晩飯のおかずにするぞ、辰子冷蔵庫に入れといて」

「…………ふあ～い、わかつたよ～…」

「じーちゃん、マシコマロモ～？」

「もううご置つて来てるよ、ただし晩飯の後に食つただぞ」

「は～こ～！じーちゃんも一緒に食べよひむ～」

「あ～よ～」

わつ言つてお土産を渡して俺は里口の部屋に向かつ、あの鶴の顔  
を見るのが楽しみだ。

パンパン

「はこねが～」

6畳の最低限の家具しかない殺風景な部屋が里口の部屋だ。

「なんだい、本当に帰つてきたんだね。」

「あつたつめーだ、日本の中学生が爆弾解体失敗して爆死とかもはや  
ギヤグだしな」

「!?……そんなヤバイ話だったのかい」

「べつに、こつもの事だ。親父の持つてくる話は映画で見れば楽し  
いが実際にせらひされたとなると想像を絶するからな、もつ壊れた」

「フン…」

「約束、覚えてるよな」

「……」

「俺が金を稼げたら一緒に高校に行く、お前が言い出したんだぞ？」

「……こよ

「ん？」

「そんな危ない橋を渡るなんて聞いてないよって言つたのぞ…」

「慣れてるつづただろ」

「馬鹿にするんじゃないよ！あんたが命をかけて稼いできた金でのほ  
ほんと遊んでるって言つのかい！確かに私はあなたの世話にはなつ  
てるけど、中学を卒業すればそれでも働けるだろ！」

「学校に行くぞとは言つたけど遊びに行くぞとは言つてねーよ、少な  
くともあそこは勉強する所だぞ？」

板垣 亜巳、小学校からの付き合いで俺の幼馴染。中学3年生だ。

なぜこの岬越寺邸に板垣兄弟がいるのか、その切欠は俺と亜巳に  
あつた。

親が子供を捨てる、倫理的に考えればあつてはならぬことだが今の時代ではありふれた話の一つだ。

とこつかこの川神市には子供の事を蔑ろにする親が驚くほどに多い、母親から虐待を受けていた小雪もさうだが違う小学校には母親の浮気癖で娘がインバイといじめられてた事例もあつたそうだ。（どうやらそちらも解決はしたらしいが）

親にどんな理由があつたかは知らないが捨てられたほうにとつてはたまたものではない、ましてや一番上が中学生の女の子の4人兄弟だ。路頭に迷うのは時間の問題だつただろう、

そんな時夜の親不幸通りで亜口がうるおつこていのといづ悪い噂を耳にした。曰く「身体を売つてこいりしこ」と。

## 『君が好きだと呟きたい』

服装は派手だがあの後ろ姿は何年も見てきた、見間違えるはずはない。

「夜にこんな所を出歩いて、何をしているんだい？お嬢ちゃん」

「見てわからないかい？」こんな時間に女が一人立ってるんだ、やつてる事なんて薬が身体どこかを売るくらいしかないだろ？」

「へ～最近いい女をこの辺りで見かけるってのは聞いてたがこんなに上玉だつたとは、お兄さん驚きたな。今まで何人の客をとった？」

「そんな事が気になるのかい？いい歳して小さい男だね、でも安心しない。どうつもこいつも腑抜けばかりでね、この2～3日声はかけて来るが実際買おうとなると一の足を踏んじまうようだね。なかなか上手くいかないのさ、おかげであんたが今私を買つならもれなく初めてを買い上げる事ができるよ、もちろん高くつくけどね」

後ろから見ていたあいつの姿が少し震えていた、馬鹿なヤツだ。そんなに怖いのなら誰かに助けを求めればいいのに、そんな事も出来ないくらいに追い詰められていたんだ。本当に大馬鹿野郎だ、そんな事にも気がつけなかつた俺は。

「残念ながら俺はまだ20代だ、いい歳した男なんて言われると傷ついちまう。そういうのは二十路越えたおじさん共にいつてやれ。そしてそれ以上に残念なのは…お前さんみたいな美人を買いたいのは俺じゃない。お前さんの後ろにいるヤツや」

だから、今俺はここにいる。自分の馬鹿さ加減に腹を立てながら、あいつの馬鹿さ加減を呪き治す為に。

ロン毛で髭面の男が顎で後ろをむいた、こんなヤツをパシリにするような奴ならどんな下卑た男だろうと思い後ろを振り返った。少なくともこんな事に人を使うような奴だ、金は持ってるんだろう。うまくいけばこの客だけで結構な額が稼げるかもしれない。ガキを相手に小銭を稼いだってしうがない、狙いは金を持ってる豚だ。

親に捨てられたとき、最初に思った事は「ああ、やつぱりな」といったアッサリしたものだった。私はガサツで自分でも思うほど高慢に育つちまつたし竜は暴れても暴れても暴れたりないといったガキで辰子にしても普段はああだが一度暴れだと竜以上に手がつけられない、最後の希望と「天使」と名づけた天でさえ最近の暴れっぴは竜や辰を髪髪とさせるモノがあった。

そうして見切りをつけたのだろう、つい先日置手紙すら残さずあいつらは家を出て行つた。

正直そんなクズ共のことよりも妹たちのことと頭がいっぱいだつた。たとえ義務教育だつと学校に行くには金がかかる、いや生きていくには金がかかる。でもあいつらに金を稼がせるなんて事ができる訳がない。

なら自分が稼ぐしかない、長女である子達の姉である私が。

幸運だったのは私が同年代より大人びてスタイルが良かつた事だ  
らう、「しなりやしさ」の値が付けられるはずだ。一度関係をもつて  
弱みでも握つてやればいくらでもやすつてやればいい、そう考えてい  
た。

そつやつて考えていれば自分の身体を売るという現実からも自分  
を誤魔化せる、そんな風に考えていた。

あの馬鹿が今まで見せたこともないような真剣な顔で立つている  
姿を見るまでは。

「ありがとうございます、宇佐美さん。ナンパの手伝いなんてお願ひ  
しちゃって」

「なーに、代行業の初仕事がいい女に声かけるつてのも悪くないス  
タートだ」

「いい仕事だと思いますよ、頑張つてくださいね」

「お前もな……人払いはしておいた、ドジは踏むなよ」

「…とひくにドジ踏んでるから」こんな所に突っ立ってるんですよ

「……違ひねえ」

そうして髭面の男は去つて行った、でもそんなことは気にもならなかつた。

「…」こんな所で何してんだい

「そりや二ひうちの台詞だ、辰子達が心配してつぞ」

「大丈夫で、遅くなるとは伝えてあるよ

「俺は聞いてないけどな」

「あんたに言つ必要があつたのかい？そりゃ知らなかつたよ、すまないねえ」

「…なんで一言相談しなかつた」

「あんたに相談すりや解決できたつてかい？すまないねえ、そいつも知らなかつたよ」

「お前一人で抱え込める問題でもなかつただろう」

「…知つた口を聞くんじゃないよ！」

そこからはもう自分の感情が止まらなかつた、一度飛び出しちまつた感情を止める術を私は知らなかつた。

「あんたなんかに何がわかるって言うんだい！ あたし達は捨てられた  
まったくだよ…」「!!のようにねー親のことなんて氣にも止めちゃ  
ないが辰達は別だ、あたし達が生きていくには金が必要なんだよ！ 盆  
洗い？ 新聞配達？ その程度で稼げる額なんてしれたもんさ、そんなも  
んで家族四人が生きていける訳ないだろうー！ だつたら売るしかない  
じゃないか、皆やつてる事やー！ 奇麗事だけじゃ世の中生きていけない  
んだよ！」

みつとも無い姿を晒している事は解っていた、涙でグショグショで  
メイクも落ちちまつっていた。でも見られたくない辰だけには、あたしが汚れちまうな  
は、知られたくない辰だけには、あたしが汚れちまうな  
んで事は。

コイツとの付き合いは長かった、あたしが小学校の頃からの付き合  
いで何の因果か小学校から中学までずっと同じクラスメイトだった。  
腐れ縁つていうのかねえ、長っここと顔付き合わせてるもんだから喧嘩  
もしたし一緒に遊ぶ事もあった。ガラの悪いうちの兄弟たちともい  
つの間にか仲良くなっちまつて辰があいつの背中にのつちまうと  
3秒で寝るようになったのには驚きだった。

気が付いたらあいつがいた、親よりも一緒にいた時間は長かったん  
じやないだろうか？

だから当然だ、あたしの中にあいつがいたのは。おせつかいで面倒  
見がよくて兄弟が下に3人もいるあたしなんかよりずっと大人びて  
るあいつが、あたしの大事なもんの中にあいつがいたのは極々当たり  
前のことだった。

でも

こんな顔をしたあいつを見たことは今まで一度もなかつた。

なんであんたはそんな苦しそうな顔をしてるんだい？

~~~~~

「自分の馬鹿さ加減に腹が立つ」

?

「お前がそこまで追い詰められてるのにも気付かずに拳銃の黒てにはそんな顔させちまつた」

二〇一

「確かに俺はまだガキさ、でもな…男なんだよ」

「は？」

「好きな女を泣かしてただ見てるだけなんてできやしねえ」

」  
：  
つ  
！？  
」

「お前、自分を売るためにここにいたんだよな。」

「……そうだよ」

「だったら俺が買つてやるー。」

「はあ!?」

「だから俺がお前達兄弟を頂くつて言つてんだー。」

「何を言つて出すんかいあんたは、大体なんでの子達まで出でてくれるんだい!?」

「だつて俺、あいつらも好きだからなー。」

「……なんだつて?」

「だから買つたる? お前も好きだしお前の家族も好きなんだー! そんな好きなやつらが路頭に迷つなんて考えたくもねえ、だから俺がお前たちを買つてやる。大人しく俺んどこに来い、西口ー。」

「……あんたねえ」

「ん? まだなんかあんのか? そつちは売るつもつこつちは買つともり、文句ねーだろ?」

してやつたりといつた風に笑うコイツの笑顔にはやつさまでの苦しさなんて微塵も無かつた。

こつもあたしたちと居る時あの笑顔、そんな笑顔ができるコイツが憎たらしくて悔しくてそしてたまらなく好きだつた。

なんでこんな奴に惚れちまつたんだろ？ねえ、まあいいや今はとりあえず。

「そこまで言つたからこなはりやんと責任とつてもいいわよ、ただその前に

」

「ん？」

「女の気持ちを弄んだ罰はしつかり受けなー！」

「あべし!!」

あたしの事を好きだと言つてくれたのは嬉しかった、でも家族も好きだと言つてくれたのはもつと嬉しかった。だってあたしも自分の家族が大好きだから、それこそ自分の身体を売つてでも養おうと思つほどに。

でもあたしだけじゃなかつた、あの子達を好きなのは自分一人じゃなかつたんだ。

自分一人で悩んでいたのが馬鹿みたいに思えて、それにあいつが好きだつて言つてくれて舞い上がつてた自分が馬鹿みたいで…恥ずかしくなつてぶん殴つちまつたけどあたしは悪くないよねえ？

「殺し文句にしちゃ最悪の部類だつたからなあ。それにしても、しちゃうねえなあこつせ……」

ダメ中年候補のつぶやきは、珍しく静まり返つた親不孝通りに消えていった。

## 『かくも偉大な父親』

本当に大変だったのは家に帰つてからだった。

一度亜巳の家により辰子、竜兵、天使を迎えた。  
詳しいことは省いてこれから俺の家と一緒に生活することを説明  
すると皆思ひのほか喜んでくれた。

「まじかよぐれ兄イー キヤツホイー これから毎晩ぐれ兄イの飯が食え  
るゼ! ディ!!」

と元気よくはしゃぐ姿はとても可愛いが… 家事は当番制にするか  
らなー。

「つわあ～こ……」これからは～しーちゃんと～… 一緒に～いつでもお  
昼寝…… ～～～～～

流石に夜も遅いから辰子の正常起動は無理か、つづーかこんな遅く  
に起きて来れた事が奇跡だな。

「これから一緒に暮らすんだ、兄貴つて呼ばせてもらひばー。」

そう言って元気よく腰に向かつてタックルしていく竜兵、コイツの  
スキンシップは相変わらず強烈だな。

「… 本当にこーんだね?」

そう言って少し不安げな表情でこいつを見つめる亜巳の頭を乱暴  
に撫でる、まつたくこいつは…

「良いも悪いもお前に拒否権は無いつてーの、お前はこれから俺の家で家族揃つて暮らす。これは最優先事項だ！」

「でもあなたの家にはもう雪がいるだろ？ 秋雨のおじ様にはなんて嘘つかれ！」

「それは……なんて嘘つかれ！」

「ハア… 考えるだけしか忘れてたね？」

「まあ何とかする！ 例え親父が何と云っても…」

「いいよ～」

「…あ、いいの？」

「畠山くん達が家で暮らす、とこうつ事だよね？」

「あ… はこねりです」

「うそ、こころ」

現在岬超寺邸にて家族会議中。と言つても雪はとつくお眠の時間だし連れてきた天や竜兵達もはしゃぎ疲れて眠つてしまつた、辰子に至つては来る途中に俺の背中で熟睡しちまつてたしな。

という訳で俺と畠山は包み隠さず口までの経緯を親父に話していた

「じゃあこれで問題は全て解決だな」

「うふ、うふこと待ちなよ時雨ー！」

「ん？なんか問題でもあつたか？」

「ううじゃなくて…秋雨のおじ様、本当に私たちがここでお世話になつていいんですか？その私達は見ての通り何も持つていませんし持ち合わせもあつません」

「そんな事は子供のキミが『ほら』無ことは理由でなく、家族が増えたんだ歓迎しなれど拒む」とはない。しかし田口くん…」

「はい？」

「早まつた」としたね

「つ！？」

「親父ー」

「時雨は黙つていなさい」

「……ッ！？」

「田口くん、キミは大切な家族を養つ為に己が身体を売り物にしてしまつた…やつだね？」

「…ハイ」

「確かにキミの行いはある一面から見れば尊い事だろう、だが違う一面から見ればそれは最も愚かな行いだ。」

「でもッ！」

「もしもその事が君の兄弟に知れたらどうするつもりだったのかね？」

「それは…」

「親もいなく親代わりの姉も留守にしがちで育つた子供たち、何が間違いで何が正しいのかも判断する事すら難しいだろう。そこで姉が自分達の為に身体を売つて稼いでいる、さあ姉思いの妹達はいつたいどういった考えに行き着き行動するだろうか？」

亞巳の身体が驚愕に震えていた、亞巳自身そこまでは考えていなかつたんだろう。

だがそれは大いにありえる可能性の一つだった。

「私は…私は…」

「もちろんこの家に来た以上そんな事はさせない、私のプライドにかけてね。だがやはり彼女達に対しての君の影響は絶大だ、私や時雨が白だと教えるよりも君が黒だという事のほうが簡単だろう。

だから君はもう早まっちゃいけない。安心しなさい、私は留守にしがちだがこの家には時雨も雪もいる。君達は新たな家族を得たんだ何でも相談しなさい、いつでも相談に乗る。何故ならそれが家族だからだ。」

そう言つて親父は肩を震わせて泣いている亞巳をそつと抱きしめた。

「…今だけ…今だけ泣かしてくだけ。」

「ああ、いいとも」

俺が言いたかった事も親父が全部言いやがった、でもこれで良かつたんだるつ。

流石にまだまだガキな俺を相手に同じ年の亞巳が甘えるなんてのは無理がある話だ。でもな親父、いつかその役田は俺がいただくぜ。雪や辰子達の分もな！

「何を考えてるのかは解らんがいつか刺されや？ 息子よ。」

「本当に解つてねーのかよ」

「とにかく、亞巳くんが泣き疲れて眠ってしまったよつだ。空き部屋に布団を下して寝かせてあげなさい。」

「おつよ」

そうじつて亞巳を抱きかかえて部屋を出る、無意識のなかぎゅつと服を握る亞巳の寝顔が可愛くてドキつとしてしまった。

「これがオウルの言つていたギャップ萌えつてやつか…堪らんな。」

そうして俺たち家族の新しい生活が始まった、驚いた事に亞巳と辰子が意外にも家庭的で家事をそつなくこなしていた。

あの立つたまま眠れる辰子が料理の手伝いをすると言つて来たときは軽く身の危険を感じたものだ、しかし包丁も使えるようだし鍋を

見させた時は決して眠らなかつた。

亜巳は料理は作れなかつたが掃除や洗濯をして「お母さん」と言つたところだつた。

親父が家を空けることもしばしばあつたが以前よりは断然空ける日数が減つた、雪は新しい家族も大歓迎だつたし天も竜兵も暴れることは暴れるが俺や親父が相手をしてやると直ぐに大人しくなるし手がかかるなんて思いもしなかつた。

そうして新しい生活が始まつて1年が過ぎて俺や亜巳が中学3年になつたころ、亜巳が馬鹿な事を言い出しあつた。

「あたしは高校には行かないよ」

ハイ、馬鹿決定。

『甲斐性なしと呼ばないで！』

「こきなつづいたんだね？ 田口」

「おじ様、中学出たらあたし働きます

「なんで急にそんな話になるんだよ」

「急にじやなによ、前から考えてた事をね

「ではその考えを聞かせてもらおうかな

「今、家の家計は少し厳しいんじゃないですか？ おじ様が家を空けるのも私達がここに来る前より遙かに少なくなってるみたいですし。それに診療所の方も葵紋病院があるおかげでめっきり患者も減りました……失礼ですがお仕事の方が減ってきてるんじゃないですか？」

(おい、一ート疑惑かけられてんぞ)

(むう、一家団欒を楽しむ事を優先してきたがこれら心配を掛けてしまつたか)

「ですからあたしが働いて少しでも『あ～田口、少し待ってくれるかな  
？』…ハイ」

(甲斐性なしの烙印押される前にやり込めないとな、親父)

(黙つていなさい)

「ウオッホン、亜口には言つていなかつたけど私の職業は世間一般で  
言つといひの自由業といった所でね、仕事が入るのはマチマチなのが  
が一回の仕事で結構稼げるのだよ」

「ハア…」

「そして君達が来てからとこつもの家の過ごす事が樂しくなつてしまつてね、必要最低限の仕事以外ははとらすにこたんだ。」

「つ！？…ありがとう、いざります」

「あー泣かない泣かない、とにかく亜口にそんな事を心配させていた  
事は本当にすまなかつた。そうだね今後は皆が大学に行けるように  
少し貯蓄を増やしておこつかな」

「そんな、おじ様！そこまでして「ただく訳には

「それは言つこなしだよ亜口」

「そつだぜ、亜口。俺達はとっくに家族なんだぜ？そんな水臭い事言  
うなよ。」

「…あんたねえ」

「え、俺？」

「1年前のあの日、あんたはあたしに言つたよねえ…「俺がお前を買つ

てやるー」って、なのに稼いでくるのはおじ様ってのは話が違うんじゃないかい?」

「ううう!」

(エリカの甲斐性なしの烙印は既に押されていたようだな、息子よ)

(いふせーーー)

「流石に中学生のあんたに稼いで来いなんて言つのが無茶な事くらい  
はわかつわかつてこねど、でもねーこじこじ以上あたしだって力になりた  
このせ!」

「お前は十分力になつてゐよ、家に母親がいないのにやつてこけるの  
はお前が姉であり母親であつてくれたからだのつ!」

「だからそれにもつと力を入れたこのせ、毎に働きに出つや夕方には  
帰つて来れる。ナツナツや家の用事も今以上に片付けられる」

(主婦がコイツは)

(中学生が言つ事ではないねえ)

「あのなあ、用凸。それつて今やらなければいけない」とでもないだ  
んだつーか中学3年生が主婦みたいな事言つてビーすんだ?」

「いい機会さね、義務教育が終われば後はどうともなるぞ。」

「お前なあ、いい加減にしろよー。」

「なんだい、やひつてのかい!」

そうして一人が立ち上がりた瞬間

「二人とも落ち着きなさい」

「えつ？」

二人は正座をせられていた、空中で一回転した後にお互いの場所を入れ替えて。

「さて、亜巳の言い分を私なりに捉えさせてもらつたが『時雨が自分達を買つと言つたが時雨には甲斐性がない、だからおじ様にお世話になつている私は学校に行かず働いてこの家を少しでも支えたい』つと」

「誰が甲斐性無しだ！」

「大体そんな感じです。」

「オイイイ!!」

「じゃあ解決策は簡単だ、時雨が甲斐性なしを脱却して君達の学費を稼いでくれればいい。そつすれば…」

「ハ？いや、だからそれは中学生のこいつには到底無理な話で…」

「だな、親父」

「時雨!?」

「百舌に電話をかけてみるか、何か手ごろな案件があるかもしない。」

あそこにはいつも忙しいしね

「おじ様？」

「田口…」

「あ～もう、いったい何をする気なんだい!?」

「賭けをしやーか？」

「賭け？」

「そう、俺がいまから出稼ぎに行って来る。もしお前と今後学校に行けるような金を稼いで来れたらお前は一切文句を言わずに俺と一緒に学校に行く」

「…もし稼げなかつたら？」

「その時はお前が働く事に一切文句は言わないしお前と一緒に働きに出て行く」

「なつ…あんたは学校に行きやいいだら…」

「俺が稼げなくてお前が学校行けないのに俺が行けるか、とにかく賭けに乗るのか?乗らないのか?」

「……好きにしな」

そう言って田口は部屋を出て行った。その田口に入れ替わるようひ田口さんにて電話をしていた親父が帰ってきた。

「亜美は気が動転していて気づかなかつたみたいだが、ただ単に一緒に居たいだけつてのが丸解りだつたよ？」

「うわせやー」

「さて、百舌に連絡がついたよ。仕事は2つ程あるが…」

「なんか問題でもあつたのか？」

「ああ、今まで私がASEから依頼を受けてお前を連れて行く際にはお前を見習いとして扱っていた為にお前に對しての依頼料金は発生していなかつた。だがこれからはそれではまずかうつ？」

「… ASEに所属しろうことか？」

「まあ直ぐことは言わん、だがお前の歳で稼いでいる人間はお前の周りにもいるだう？・ソレこそ悟君はすでにASEドライバーとして活躍している」

「嫌とは言つてねえよ、でも今は… 家族と一緒にいる時間を優先してえ」

「ああ、私も同じ考えだ。まあ ASEの仕事は断らうと思えばいつでも任意で拒否できるから雁字搦めに縛られる訳ではないけどね」

「じゃあ今後は？」

「一応私と似たような外部関係者の扱いにしてもらつたよ、ASEエンジニアントほど優先して仕事は来ないがそれでもほちほちと連絡は入れてくれるそつだ。さすがに一度の依頼で全員分の学費や生活費が稼げる訳では無いからね、百舌もその辺りは理解してくれている

「あ

「西岳さんは頭が上がり難いな」

「ふむ、それでは……」「親父」ん?」

「ありがと……な

「ふつ、親としては当然の勤めや」

「くつ、じゃあ依頼に行きますか!」

「ああ、そうだね。それでは時雨」

「ん?」

「南の島でトロリスト退治と雪の山でトロリスト退治、どちらがいいかね?」

## 『雨と雪が混じる時』

あの日の出来事は良く覚えているよ。

なんせあの日は初めてあの娘と出合った日だからね。

息子が一皮剥けた日? そんな事は覚えていないね。

一々覚えていたらキリが無い。

その日は珍しく天気予報が外れて昼過ぎから激しい雨が降つてい  
た。

「ふむ、カオス理論天気予報より1時間早く降り始めたか…何か胸騒  
ぎがある」

そう、天気予報が外れるなんてのは特に珍しい事ではない。げじま  
ゆお天気キャスターの話など話半分程度で聞き流すものだ。

珍しいのは岬越寺式カオス理論（やうばん使用）にわずかなズレが生じた事である。

「大抵」ついてズレが生じた場合は何かしらのイレギュラーが存在するものなのだが、それも極近くで」

そう考えながらも趣味と実益を兼ねた地蔵作りに取り組んでいると表の門が豪快に開け放たれる音がした。

「親父ー！いるか？急患だ！！」

（珍しいな、怒氣5・焦燥3・悲しみ2…か）

そうして息子の怒鳴り声から精神状況を読み取ると息子が待つ自宅の離れにある自身の診療所へと急いだ。

「親父ー！この子だ、見てやつてくれ！」

するとそこには息子の学生服に包まれた白髪の少女が弱りきった姿で抱きかかえられていた。

「（アルビノ？それにあの手形は…）そここの診察台の上に寝かせるんだ、お湯を持って来なさい」

息子に指示を出すと急いで制服を脱がし少女の上着を脱がした、するといよいよ…

「親父ー！これでいいか？…つ！？その癌は」

「どうやら息子には少しショックな場面だったらしい。多少なりとも荒事に巻き込んだり修羅場は潜らせてはいるが日常生活の中で、ましてやこんな小さな女の子がこの有様では中学校に入ったばかりの息子には少し酷だったか。

「最近のガキは加減つてもんを知らねえのか!? 女の子をこんなにまで痛めつけて挙句道路に放り出すなんて…」

「確かに最近の子供にそういう傾向が見られるのは確かだが、何でもかんでも子供のせいにするのはよくないな」

私は少女を触診しながら息子を落ち着かせるように呟つた、「どうやら読みは正しかったようだ。」

「どうやら内臓がかなり弱っているようだ、おまけに栄養失調の兆候も見られる。そして…首の辺りを見てみなさい」

「首を絞めた跡、でも子供の手にしては大きい?」

「成人男性の手に比べれば指の跡が細すぎる… ところは」

「嘘だろ…自分の娘だろ!？」

「嘘か本当かを議論している暇は無い、我々に出来る事はこの命を紡ぐ事だけだ」

息子はそれ以上言葉を発しなかった。ただ己の本能のままに力を振るう輩は沢山見せてはきたがまさか自分の守るべきものを一方的に虐待するという存在を目の当たりにして動搖しているのか…

(整体を施して体の歪みは直せるが…剣星を呼んで漢方を処方しても

（うらやま）

衰弱しきった少女を触診しながらそんな事を考へていた時だつた。息子がいた後ろの方から吹き出すふくよつに暖かい気がこの部屋を満たしていった。

「…………『めとな、俺は何もわからないけどキララと懸くない。キララと向も間違つちがいにな』。」

ゆつくり語りかけようとした息子は少女に近づいた。私の横を通り過ぎる時、体中の細胞が活性化するのが感じて取れた。

（「なま、まさか…!?）

横になつている少女の手を握り頭を撫でる、ゆつくり慈しむようだ。

「もう大丈夫だ、キララもつ頑張らなくていい。ゆつくりあつのまま生きていけばいいんだよ。」

息子の氣が少女の身体を包み込む、その氣の量は見ていて冷や汗が出るほどだつた。

その氣が少女の身体に少しずつ染み込んでいくと少女は弱弱しく目を開き口を開いた。

「… ゆつ泣いてもここなの？」

「ここよ、こゝりでも泣いてくれ」

「ゆつ黙つても怒らない？」

「怒りなんてしないさ」

「……一緒に笑つてくれる？」

「……ああ、これからは一緒に笑おう」

「……ふええええええええん」

今まで押さえ込んでいた感情を吐き出すように泣き続ける少女を抱きしめ、息子は静かに泣いていた。頭を撫で、背中を摩り文字通り泣く子をあやしていた。

それからどれだけの時間が経つだろう、泣き声が静かな吐息に変わると部屋中に満ちていた気が一人に集まり、そして四散した。

「おつと」

さつきまで蚊帳の外にいた私だが流石に氣を失い床に倒れそうなかせてようやく一息つく。

確認してみると少女の身体から発が消え、弱っていたはずの内臓も正常になつているようだ血色も良い。あとは歪んでいる骨を後で整体してあげれば彼女の体調は万全になるだらう。

息子のほうはどうやら氣の急激な消耗で眠ってしまったたらしい。氣の初めての発露でろくにコントロールも出来ていなかつたようだし、気が少女の怪我を治したのは火事場の馬鹿力のようなものか。とにかく

「心のケアも上手くいったようだ」

息子の腕の中で眠る少女は今まで閉じ込めていた物をさらけ出す

ようこに満面の笑みで眠っていた。

「しかし、まさか龍掌りゅうじょうとは…」

私のカオス理論のズレはこの少女かそれとも息子の異能なのか…どちらにしろ

「ここからは大人の仕事だな」

私は知り合いの単身赴任中のサラリーマンと神の腕を持つ老人に電話を掛けることにした。

この日我が家に娘がやってきた。

そして息子が異能の力を解放した。

一人がこの先どのような道を歩むのか

それをそろばんを弾いて予想するのは簡単だが…

野暮な真似はよそう、自分の子供がどんな成長を遂げるのか。

それをワクワクしながら見守るのは親の特権だからだ。

気がつけば雨は上がっていた。

## 『世界不思議発見（タイ編）』

「と、雪で私たちは今タイに来ておつま～っす」

「おつま～っす」

「はっはっは、仲がいいなあ一人とも」

俺たち親子と小雪の衝撃の出会いが過ぎて早3日、俺と小雪は親父の指示の元サラリーマンの高槻のおじさん連れられてタイまでやってきました。

というか本当は俺だけの予定だったんだが小雪が頑なに俺から離れるのを拒んだために一緒に連れてきた次第だ。まあ本音を言えば俺も一緒にいたかった訳だが…

「えへへへへ～」

「ん、どうした小雪？」

「ん～ん、なんでもないよ～」

まあとにかく小雪が「機嫌でよかつた、俺は下手糞な操縦の飛行機のおかげで軽くブルー入ってるけどな！」

「さて、なんそり来るはずだが…」

「あれ？おじさんが案内してくれるんじゃなかつたの？」

「いや、私はまた日本にとんぼ返りしてもう一仕事しなくちゃいけなくてね、『』からはまた違う人が目的地まで案内してくれるよ」

高槻のおじさんは親父の知り合いで曰く「単身赴任中のサラリーマン」だそうだ、世界中を飛び回つてこむといひから察するにかなり人使いの荒い会社なんだろう。

「知らない人に案内してもらわなきゃいけないんですか？」

俺には少し不安があつた。今回タイに来た目的は俺が3日前に目覚めてしまった力「龍掌」のコントロールを勉強する為だ。

親父の話によると人が持ちえる異能の一つだそうで簡単に言うと氣で身体の傷を癒すものだとか。それだけ聞くと別に問題ないんじゃね？と思つたが力の性質上下手こいたら人を傷つける恐れもあるために実際にその力を持つ人に教わつてきなさいとの事。

実際俺の力が発動した時、直ぐ近くにいたのが親父じゃなければグロテスクな映像が広がつていたかもという話。小雪に悪影響が無かつたのが奇跡だとか。

それを聞いて俺はここに来る決意をした。俺は小雪を護りたいんだ、傷つけたい訳じゃない。それにもしこの力をマスターすれば今後俺の近くで怪我に悩む人たちがいればこの力で救う事も出来るはずだ。

さてここまで話せば解ると思うが俺のこの力は完璧に異端だ、親父にはバレると色々とやっかいな事になるそうなのであまり口外すべきではないと言いつけられている。

だから知らない人と一緒つていうのは…

「安心しなさい、これから来る人は気を扱わせれば世界で3本の指に入る人物で人間性も一部を除けば尊敬に足る人物だ。それは私や秋雨も保証するよ」

「凄い人なんですね…尊敬に足らない一部つてのが気になりますけど」

「すばらしい〜」

「そこまで褒められると思ひませんね」

と俺と雪の直ぐ後ろから若い男の声が掛かった、……気配はまったく無かった。

「おまえ子供にいらぬ警戒を」とるのは関心しないな

「お久しぶりです風、この子達ですね秋雨の言っていた子供は」

高槻のおじさんと長髪で剣聖のおっちゃんが着てたような服を着ている人が話をしている。

俺も少なくとも親父に鍛えられてるが口口まで気配に気づかなかつた事は…いや、結構あつたか。高槻のおじさんとか香坂のじい様とか。

「ふむ、私に気づいてからは即座に彼女を護れるように位置取り相手の対応に備えるように構える…先が楽しみですね」

「俺の名前は岬越寺時雨、あなたは？」

「口口は失礼しました、私の名前は臘と申します。これから君たちをドクターの今まで案内させていただく者です」

「僕の名前は…岬越寺、岬越寺小雪だよ！」

「「」れは「」れは「」ト寧に、まつほつ貴女も中々…」

「やめておきたまえ驕、またから聞いていれば即逮捕モノだ」

高槻のおじやべが體子を押さえてヤレシヒサヒツル、もしかして「マイシの問題のある一部つて?」

「もし変な事を連想してこるのはいいが心を。私は強者と戦つ事を」「が修行としてこまして、先が楽しみな相手を見ると…」

「そこまでだ、驕。とにかく時雨、雨せりこれから小雪ちやんと驕と一緒にドクターの下に向かいなれ」

「うん、驕さんも氣の使い手らしくナビそのドクターツて人が教えてくれるの?」

「ええ、君のそれに關しては流石にドクターでなければ手ほどきができないから。ですがそれ以外なら私も多少手ほどきを授けましょ」

「ひ

ヤバイな…柔術を教える時の親父と同じ田舎をじてやがる。

「それでは私はやうやく時雨、それと小雪ちやん

「な~に~?」

「初めての旅行だ、お兄ちゃんと一緒に楽しみなさい。そして…安心して帰ってきなさい」

「うん、わかった!」

もう雪ひいておじさんはずっと港に戻つていつた。今回の「J」とでおじさんには色々お世話になつちやつたからにつかは恩返ししないとな。

「わへ、それではもう少し向かいますか。少し遠いのですが旅の疲れは大丈夫ですか?」

「だいじょーぶい！」

「せっかくで吹っ飛びました」

「よろしい、では行きましょう」

わざわざして俺たちはタイの郊外に向かつて出発した。

それにしてもせっかくジロジロ見られてるが日本人の子供が珍しいのか白髪の小雪が珍しいのか、それともこのくそ暑いなかキッチリとカンフースーツを着こなしている臘さんが珍しいのか…

## 『鶴丘達との出会い』

バスに揺られることが数時間をしてまたそこから一時間ほど歩いてやつとついた村は川神市なんて政令指定都市からやつてきた俺にとつや村といつよりもジャングルといつた所だった。

「あの～、俺たちがお世話になる人って「ドクター」なんですよね？」  
んなとこに医者なんてこるんすか？」

「わ～い、ジャングルぐるぐる～～

「ええ居ますよ、といつても元々この村は無医村でここに越してきて勝手に住み着いたドクターが診療所を開いていとつた形ですが」

「……免許持つてるんですか？」

「必要なのはスキルです、その辺の医者なんかより何倍も腕が立つのは確かですよ？」

そんな話をしながら村の中を歩いていると一つの小屋に列が出来ているのが見えてきた。

「あれは？」

「あそこがこれからお世話になるドクターの診療所ですよ」

「おお～家よりボロッち～～

「いや小雪、人の家を悪く言つちゃめーでしょ」

「うるせーい」

しかし俺も口に出さないだけで結構不安だ、衛生面とか大丈夫か？  
というか家よりつて事は家も多少なりともボロいと思つてゐるとい  
うことか妹よ…。そんな事を考へていると建物から男の叫びが聞こ  
えてきた。

「なんだ!?」

俺は人垣を分け声のする部屋に飛び込むと信じられないものを見た。

人の手が身体に刺さっている…………？

「つ!? おいじ・」 「お待ちなさい」 !? 脣さん!

そう言って田の前で横になつてゐる男性の身体に腕を突き刺して  
この白髪の爺さんに飛び掛かつとする俺を龍さんが制した。

「田に焼き付けておきなさい、コレがあなたの辿り着くべき道の一  
つです」

そんな俺たちのやり取りなど気にも留めていないのか爺さんは少し手を抉ると無造作に手を引き抜いた、……血が出ていない? というか傷口すらないぞ!?

「ただの盲腸だ、やつをと帰つて2～3時間休むがいい

「おお、わつ全然痛くありません。ありがとうございます!」

わう言つてわつとまで身体に腕を突っ込まれて悲鳴を上げていた  
男性は元氣に帰つていった、…ダメだ理解が追いつかない。

「お久しぶりです、ドクター」

「なんじゃ、やかましいと思つたらお前が臍。ん?それにその子供は  
?」

「はい、秋雨から連絡がありました…」

「あ、雪越寺時雨です!」

「ほほつ、連絡は受けとるよ。お前さんが龍掌を発動させたところ  
は」

「あの、やつのは一体?」

「あれはお前さんにはまだちと早い、まずは龍掌をある程度使えるよ  
うになつてからでねなことの!」

「ところは、あれって俺にも出来るよつない」となんですか!?

「まあ直ぐことは言わんがの、大体お主氣をまとめて扱えんのじやう  
ひやう!」

「う…、ハイ三日前に初めて使つたばかりで氣がついたら倒れてまし  
た」

「まあ、わざわざわざわざ、なんの修行もしてりゃヤツがこきなり全力で開放したり誰だつてやうな」

「ハイ…」

「阿呆、落ち込んでどうする。今後はそういうとおりにワシが手ほどきを授けてやうひとつこりんじや、おまけに臍までついてきておる。はつせり言つて気を学ぶのにこれ以上の環境なぞあつやせんぞ？」

「もうこいつ爺さんはつむいでいる俺の頭にその右手を置いた、暖かいこと感じたのは決して気の力なんかじやなかつたと思つ。

「お主には氣のイロハをワシと臍でマジチリ呑き込んでいく、時間の問題は氣にしなくていいと秋雨も言つてしまつたからお主は何<sup>はばか</sup>憚る事無く氣を口々で学んでゆけ」

「期待していますよ、時雨」

「はい…よろしくお願ひします、ドクター・臍さん…」

「お前さんのよつな子供にドクターなんて呼ばれても堅つ苦しいだけじやな、これがひまワシのことよ師匠と呼べ」

「私の事も臍と呼び捨てで結構ですよ

「ハイ…」

あの手に入れた力に最初は戸惑いそして恐怖した、でもこの力が誰かの為に使えるなら…俺は、やつてみせる。

「 そ う い え ば 、 秋 雨 の 奴 は 子 供 が 一 人 来 る と 言 つ て お つ た が も う 一 人 は ど こ じ ゃ ？ 」

一  
あ

ヤベエエエすっかり忘れてた！この部屋に飛び込んだ時に外に置いて来ちまつた！こんな異国之地で一人っきりにしてしまうなんて！？

「那樣的問題，我沒有！」

「アバババババババ！」

我が妹が2mを超えるであろう巨人と追いかけっこをしていました……虎にまたがつて。

「小雪いいくしーたる @ふあ y%い !!!」

「ぬおぬお、あれがお主の妹か。元気じやの~」

「ほう、あの彼はもしゃ…」

二人の言葉が頭に入つてこない。なんであの娘虎に乗つてんの？つづーか敏捷な虎を余裕で追つかけてるるのでつかい人何？つづーかあんな動きしてる虎を乗りこなしてる我が妹は流石だと思わ

「やるのをやえなー！」

「ドクター、いい感じに時雨が錆乱しているようなので説明を頂きた  
このですが」

「ほほ、そうじやの。おーい！アパチャイ！嬢ちゃん、遊んどりで  
いつくへ来なセー！」

「わかつたぬ、じじこ」

「うわーい、ねえねえしーちゃん見てみて猫さんだよー」

「いや、ソレ絶対猫じやないからー虎だから！」

「えーどこかひひひ見ても猫さんだよ？ねえメーオ」

「ガウウ」

「猫は『ガウウ』なんて鳴きませんー！こんな巨体が路地裏にいたらや  
れ【ハ】パーシクになるでしょーがー！」

「ハハハ、時雨。虎はれつととして猫科の動物じや、嬢ちゃんは間  
違つておひごだ」

「そつですよ、時雨。第一虎に怯えすぎです、これとなれば虎の一回や  
一回びつと並ぶ事はないでしょー」

「メーオはアバチャイが昔拾つた猫よー、大切に育てたから他の子よ  
いつちよつぴり大きくなつたよー」

あるえー？もしかして間違つてゐのつて俺だけ？タイでは虎つて

ペジト扱いなの？ 猫 虎（肉食獣）でファイナルアンサー？

「そ、そつなんですか。まあそつですね…、家の地蔵だつて陽氣のせいで大きくなる事もあつます」

「じーちゃんも撫でてみる？ いいよね、メーお？」

「が、うう～」

野郎、ちよつと可愛こじやねーか。しかもこれは…

「おお…思つたよつ肌触りがいいな、もひどピカピカしつむかと思つた」

撫でてみると想いのほか気持ちよかつた、じつや ロイシと眞寝とかした日こいやたまんねーなオイ

「わい、時雨も落ち着いたといふでも始めようかの。ワシの名前はパー・カッ普・ラム”ティ、周りからばドクターと呼ばれておるが…まあ好きに呼べ

「じやあ、じ~じでい~い？」

「おお~おお、かまわんかまわん」

やつこつて笑顔で小雪の頭を撫でる師匠は何処にでもいる孫好きのおじいさんに見えた。

「じやあ次は僕の番ね、僕の名前は岬越寺小雪です！」

「元気がいいね~」

「うむ、今日からよひこへの

「ようじくお願ひしますね、小雪」

「次は俺ですね、俺の名前は岬越寺時空です。ここは歸匠と朧月修行をつけてもらひました、改めてよひこへお願ひします！」

「ええ、ビシビシ扱いていきままで覚悟しておこしてくださいね」

「おー・シグレは修行に来たね、じゃあアパチャイムエタイ教えてあげるよ～」

「よさんかアパチャイ、せつかくの弟子を壊されてはかなわん

」「ドクター、やはり彼は

「うむ……じゃあ次はお主じや、アパチャイ」

「わかつたよ～じじい、アパチャイはアパチャイ・ホパチャイよ～。よろしくね、シグレ、ゴコキ、オボロ」

「わ～い、よひこへアパチャイ」

「よひこへです、アパチャイさん」

「よひこへお願ひします、アパチャイくん。それでは最後に私の名前は朧と申します、以後よひこへお願ひしますね」

「オボロよひこへ～」

「アパパパパ、ボロボロよ~」

「一いら小雪、それにアチャイさんも人の名前をからかつかめーで  
しょ」

「かまいませんよ、小雪はまだ子供ですから」

(え、じゃあアチャイさんばじつなつちやうの?)

「それじゃあ揃ったといひで飯にするかの、お主らも長旅で腹がすい  
とするだ。修行は明日からにするから今日はまたふく食つて明日に  
備えてやすみなさい」

「は~い」

「今日は食つて食つて食いまくるよ~」

「お主とメーオは腹六部で抑えんか! いつたい誰がエンゲル係数を上  
げると思つとるごじやー!」

そういうてアチャイさんの頭を師匠がガツンと殴つた、すぐア  
チャイさん隙なんて微塵もなかつたのに無造作に一発入れたぞ。

「わ~い! ははははははん、しーちゃん、アチャイ行こう~」

「あー、俺はちょっと師匠と朧と話があるから先に行つてくれ」

「うん、わかつた~。しーちゃんも早く来てね、アチャイ行こう~」

「アパパパパ」

そうして小雪とアパチャイさんは師匠の家に入つて行つた、この場に残つたのは俺と師匠と朧だけだ。

「師匠、アパチャイさんつてもしかして…朧もなんか知つてるの？」

「ほう、気付いておつたか。実はアパチャイはある若さで「裏ムエタイ界の死神」と言つられておつての、実力は今はお主の親父にも勝らすともいづれは…と言つたところかの。」

「やはり彼が噂の死神でしたか、一度手合わせをしてみたいものです」

「やめておけ朧、あやつはその生い立ち上手加減が出来ん。試合ではすまんぞ？」

「…大丈夫なんですか？」

「裏だの死神だの良い印象の単語が一つもないんだが…でもある人は

「お主も氣付いておるのじゃろ？確かにあやつは死神等と呼ばれてはおるがソレは生きる為には仕方が無かつた事じや、この国ではそつやつて稼ぐ事しか出来ない人間が多いのじゃよ。しかしあやつが死神となるのは戦う時だけじや、相手を倒さなければ自分が死ぬという裏ムエタイ界で勝ち続けたあやつの闘争本能は並ではない、じやがその優しさは遺伝子レベルに達しておる。それに気がついたから溺愛している妹を任せたのじやねつ？」

「そう、最初に見た時に驚いたのは体捌きもそれ」とながら一緒に遊んでいた小雪の笑顔だった。

小雪とは会つてから3日しか経つていないがアイツがあそこまで楽しそうに笑つて遊んでいるのは初めて見た。小雪はその生い立ち

上、悪意には敏感になつてるので俺や親父みたいに小雪にたいしてまったく悪意の無い人間は問題ないが少しでもそういうたものを抱えている人間に会うと露骨に反応が変わってしまう。ASEビルに寄つた時に何人かのスタッフに反応してしまつた為に親父が百舌さんに忠告をしていて、まさかとは思つが…な。

つまり小雪があそこまで懐いたアパチャイさんだ、俺が信じない訳にはいかない。

「はい、とても優しさつに思えました。」

「これからここの間はあなたは修行漬けになつてもらいますのでその間小雪の相手には調度いいんではないですか？」

「やつじゅの、戦う際はリミッターが外れてしまつが子供や動物と遊ぶときはなんの問題もないからの」

「本当は俺が見てやりたいんですけど…」

「お井のよつな若い奴にありがちじゅがアレもコレもと欲を出すと何度も手に入らんぞ？まずは田の前の問題を片付けてそれから次の問題を解決せい。一人でやれることなんてのは限られてある、誰かに任せられるうちは任せてしまえばいいんじゅ」

「そんなもんですか？」

「「そんなもの（じゅ）（ですよ）」」

一人に言われて少し肩の荷が下りた気がした。

俺は心のどこかで小雪を守つてやれるのは俺しかいないと思つて

いたのかもしれない。

でも俺の周りには親父や高槻のおじさん、それにハサウェイの厨子や

アパチャイさんもいる。

こんなにも小雪（あいづ）は暗に護りられてる、なら小雪の傍にいる俺の役目は小雪（あいづ）を楽しむ事なんだろ？、きっとそれが小雪の幸せに繋がるんだと想つ。

「さて、それじゃあ飯にするか。あんまり遅いとアパチャイの奴がつるそこでの」

「そうみたいですね」

待ちかねたのか小雪がブンスカ類を膨らませながら俺たちを迎えた、それだけなりとも可愛らしさのだが虎にまたがつてての時点で台無しだ。

でもこいつた生活が小雪にはこれから必要なんだ、家族と暮らして友達と遊ぶ。そういうた日常を作る為にも俺はここで頑張つてみせる！

こつして俺のタイでの修行が始まるつとしていた、俺にとつても小雪（あいづ）といつてもここでの生活は掛け替えの無い物となるだろ？。

「そうですか、アパチャイくん。ボロボロですか、ボロボロ…ね

何も聞こえてないよ、ホントだよ？」

## 『「仮」について学ぼう』（強制的に）

皆で楽しい食事が終わった後に小雪にこれから事を説明した。  
俺が自分の間修行漬けになり、小雪の相手が中々出来ないと話すと  
泣き出してしまったがお風呂と食事と寝る時は片時も離れないと約  
束し修行の間はアパチャイさんが全力で遊び相手をしてくれるとい  
う条件でなんとか手打ちとなつた。

異国之地で心細いかもしれないがアパチャイさんがいれば大丈夫  
…だらり。

そんなこんなで慌しかった初日が終わりついに修行が始まった。

「さて、まずは気についての勉強じゃ。本能で発動させて3流、身体で  
覚えて2流、頭で理解してやつと1流といったところかの」

「はい、よろしくお願ひします。早速なんですが結局氣つてなんな  
んですか？」

「氣とは万物に宿るエネルギーの事ですね、地球上に生きる全てのモ  
ノに宿っています」

「全てって事は植物や動物にも？」

「はい、その通りです。いい考えですね、普通なら人間や動物くらいま  
でしか考えが及ばないものです」

「いや、なんかうちに置いてある地蔵とか門とか時々怖いくらい存在  
感があるもんで」

「なるほど、秋雨程の者が作り出す物なら氣も籠り易くなるじゃろう。材料が秋雨の選らんだけや木なら尚の事じゃな」

「（家の門つて親父が作ったのかよ…）人が作った物にも氣が宿る事が？」

「つむ、かなりの才能が必要じゃがの。世にある名作などはやうにいつた才気ある者達が作り出したものじや。見る者が見ればその作品に宿った氣を見ることができるじやねつ」

「さて、気につけの考察は簡単にこの程度でいいでしょう。今後専門的な知識については隨時教えてこります。」

「やうじゅの、龍掌を教えるにしてもまずは基礎の氣の操作から始めんとどうじゆめうもないわい」

「わかりました」

「では、こあますよ」

「は？」

ズンと朧のじぶしが俺の鳩尾に綺麗に入ったと思つと

「グガア…ガツ！」

体中の痛みから膝をつき四つんばいになる。体中の細胞から何かが吹き出している、「コレが氣か。あの時は無意識だったからわからなかつたがコレは…」

「今あなたの鳩尾に私の氣を少し流して強制的に氣を放出させてします。や、コントロールしないと死に至りますよ？」

あれ？何この超スパルタ、まともに声も出ないから助けも求められないんですが。

「身体から吹き出している氣をまずは身体に纏わり付かせるイメージじゃ」

師匠の言葉をからうじで聞き取り、身体から蒸氣の様に噴出してくる氣を身体に纏わり付かせる。ダメだ、この体勢じゃ集中できない。

「ギ、ガツガツ…」

口から漏れる声は相変わらずだが無理やり立ち上がり自然体となつた事でだいぶ楽になつた…かも。

眼を瞑りどうやら起點となつてている水月に意識を置き身体中に纏わり付かせていく。下から脚、股間、腰、腹、胸、喉、眉間、頂点の順に絞り上げるイメージ。

「ほう…」

「…流石ですね、物事の本質をしつかり把握している」

感心の声が聞こえるが今はそれどころじゃない。放出が止まり気が身体に留まっているからか痛みは徐々に引いているが腹の底がまだ熱い、緊張の糸を切ると留めている分一気に爆発しそうだ。

「もうすぐ私の氣の影響がなくなる筈です、そうしたら水月に力を込め今纏っている氣をそこへ収めてください」

「やつきの氣を纏うのと同じ要領じや、大事なのはイメージ。集中せ  
いよ」

確かに、やつきまで腹の底にあつた熱さが引いてきている。だとな  
たらそれは臍の氣だつたのだろう、後はその熱が引いた所に一気に圧  
縮すればいいのか。集中…集中…

心を細くせよ 川は板を破壊できぬ 水滴のみが板に穴を穿つ

「なんと?!」

「……」

頭の中で紙でこよりを作るよう集中力を細くしていく。  
すると身体にあつた熱が冷め、代わりに水月に暖かいモノが残つ  
た。「これが氣か。

「これで氣の発現は完了です、しかしまさかココまでのモノとはい  
もしませんでしたよ」

「大したもんじや、最初はその身体の創りに驚いたもんじやが今はそ  
の精神力に感心してしまつたわ」

「そのへんは親父と高槻のおじさんにくちこみられたもんで、といふか  
この方法ヤバくないっすか? 鮎こりんな事やつてんの?」

「いや、大体の達人は修行の間に血と氣をコントロールしていくも  
んじやからな。今回は時間ももつたいなかつたし無理やり叩き起  
した」

「殺す氣ですか!! 一歩間違えてたら俺バーンーってなつてましたよ!! バーンーって!!」

「大丈夫じゃ、その時は世界最高峰の氣法師の臍もおむし医者としてワシもおむ。最悪のケースだけは免れたじやうつて」

「最悪の一歩手前くらには予想してたつて事ですか!?」

「まあまあ上手くいったんですからいいではありますんか、それでは次にまいりましょ」

「展開はえーよ! 僕さつき氣を発動させたばっかりだよ!?

「おやおや、修行を始めてまだ1時間も経つませんよ?」

「内容があんまりにも濃過ぎて時間の経過が…

「鉄は熱いうちに打てといつじやひ、ほかで臍と身体を動かして來い」

「筋トレ的な?」

「知っていますか時雨、昔の武術家は筋トレの必要が無いほど組み手をやつたそつです。その方がより実戦に必要な筋肉が付くとか」

「そのやり方、弟子が100人いても一人残るかどうかって親父が言つてたぞ!」

そんな抗議の声も聞いてもらえず俺は売り飛ばされる子牛ようしく臍に表に連れて行かれた、笑顔だが眼が笑つてねーよ臍。

「ココキ～これがソーク・クラブよ～!!

「わ～いぐるぐる～！」

向こうの方から小雪達が仲良く遊んでいる声が聞こえてきた、俺も  
あっちへ行きたい……タイ語わかんねーけどこっちで流行ってる遊  
びかな?

# 『Training days!』

## 修行2日目

昨日は酷い目にあつた、その後外で朧と組み手をしたわけだがここで初めて朧の名前の由来がわかつた。

タネは解らないが動きが特殊過ぎて実態がつかめない、動きも恐らく早い訳ではないんだろうが目が錯覚を起こして実体を掴めない。うちの親父の「柳葉搖らし」と発想は似てるがアプローチはまったく別物だ。あつちは相手の死角に入つて姿を消すのが目的だがこっちはあるて敵の視覚に入る事で間合いを外して虚を付こいつとしてくる、どつちにしる厭らしい事には変わりなかつた。

そう判断して何とか最初の攻防を凌いでしまつたからだろう、朧がハードルを上げてしまい今日は一日にして気を用いた戦闘に入ると言ひ出した。

結果は散々。向こうに打ち込まれるとこっちの体内の気が狂いこちらが打ち込むと向こうは氣で防御しこちらの気が通らない…理不尽の一言につきる、ダメだ早く何とかしないと。

向こうの方からアパチャイさんと小雪の遊んでいる声が聞こえてくる…

「ティーカオは元気よく飛ぶよー!」「うわーい、彗ちゃん」平和だなあ

## 修行5日目

龍の気を狂わせるのがあまりにも理不尽なので師匠に相談、どうや  
らあんな事が出来るのは世界で龍くらいなもんらしい対処法と言つ  
対処法は無いそうだ。

え、最初から詰んでたの？とあっけに取られてソレを防ぐ手  
段として今のところ龍掌くらいしかないらしい。

ここで初めて龍掌について説明を受けた訳だが確かにコレは危険  
な力だった。

龍掌とは相手の体細胞に氣で干渉する事が出来る異能、相手のキズ  
を癒す場合は細部分裂を促し自然治癒力を高めて治す。

しかしソレが行き過ぎると今度は害にしかならない、よつは空氣で  
満ちてる風船に更に空氣を入れて破裂させるようなもんだ。

さらに相手の気を操作する事により身体機能に異常をきたす事が  
出来る、龍が俺に対してやつてくるのがコレだ。狂わされるとその部  
位に鈍い痛みが走ったり感覚が無くなったり下手に胸などに打ち込  
まれると息が出来なくなったりする。

大体は攻撃を食らった後にその部位の気を正常に戻すように意識  
をして体の中から気を操作して治す、もちろん戦いながらになるので  
その分隙ができてしまう。

最初のほうは一箇所に1分程掛かっていたので一発打ち込まれた  
ら後は倒れるまで打たれ続け凄惨なものだつたが最近はコツを掴ん  
だので一箇所5秒ほどで治せるようになつてた。その事を話すと師  
匠も龍も呆れたような顔をしていたが…

しかし今日龍掌を教えてもらつたので次回からは違う！明日から  
は攻撃を食らつてから治すのではなくそもそも攻撃を龍掌で流すよ  
うにすればいいんだ！

そんな荒んだ修行を送っている俺に遠くから聞こえる小雪達の遊び声が平和な気持ちを『与えてくれた…

「プログラムは基本中の基本よ~、『J』からカウ・ロイなんかに繋げるよ~」「おお~す」「こす」「~」

…ダンスでもやつてんのかな?

### 修行9日目

龍掌で防げばいい、そう思っていた時期が俺にもありました。

なんなのあの人?!こつちは龍掌の字の「J」とく両手でしか相手の気を操作することができないのにあつちは肘打ちから果ては蹴りですら氣の操作を行つてくるんですか?!追いつかねーよ~

最近何故かアパチャイさんや小雪のほうに付しきつ切りの師匠に話してみると「龍だからしじょうがない」とか言われた、師匠が諦めてるとかどんなチート?

さすがに龍も手以外の四肢による操作は難しいところで技の裁き方を教わった、中国拳法がベースのようでの動きは八卦掌独特的動きだそうだ。

親父に柔術を教わり始めた時に「良い物はどんどん取り入れて行きなさい、この岬越寺流柔術はそうして進化してきた」とも行つてたし中国拳法を教わることはマイナスにはならないだろう。

特にあの足運びは柳葉揺らしに通じる所がある、いい所はガンガン盗んでいくぜ!

その夜小雪が「ね~ね~みてみてしーちゃん、タン・ガード・ムエイ~」と言つて笑顔で肩をくめるような動きをしていた、可愛い

じゃねーかタイのダンス。

#### 修行14日目

今日は武術の修行はお休みでようやくコントロールできるようになってきた龍掌で師匠の診療所のお手伝いをした。

龍もしくは師匠の見ている所限定での龍掌での他人への治療行為の許可が下りたのだ、親父仕込の整体も出来るのでそちらもサービスでやっておく。

龍掌で相手の気の流れをコントロールしてすり傷程度の傷を治したり手術を待っている人の痛みを和らげたりと結構忙しい。龍の方も忙しく腰痛や体の節々の痛みを訴える老人達の気の流れを正している。

そして奥ではドクターが今日も神靈医術で患者の手術を行つていいる、ドクターは龍掌が出来ればアレも出来るみたいな事を言つていたが氣を習い始めてアレがそんな容易な事ではないと今ならわかる。相手の気と同調させて自分の手を相手の体内に侵入させる、同調が甘ければそのまま体を突き破つてしまつだらうじ逆に行き過ぎれば細胞レベルで同化してしまふかもしけない。

戦つている相手の気を乱すなんて大雑把なものとは文字通りレベルが違う、俺がアレを出来るよつになるには後何年かかるだらう…：「そつやつて相手の傷を治し痛みを和らげる、それだけでも大したものですよ時雨」

「龍…」

「あなたはまだ若い、若すぎると言つても過言ではありません。学んで行くのはこれからですよ」

「…あつがとい」

「いつして驕と会話しながら氣による治療を行つてると奥からわざの患者が出てきた。

「先生、妻を助けて頂いて本当にありがとうございます!」

「今度からはもう少し早く来るようこの、後ちよつと遅れていたらさすがにワシでも無理じゃつたらつて。金の心配なんせんでええ、元手もかかっておりそしの」

「あつがといります先生、このお礼は必ず!」

「そんなもんは後回しでええ、まずは嫁さんと生まれてくる子供を大事にしてやうんか」

「はいー」

「那さんは患者だつた奥さんをおぶつて帰つていつた、…いいなあ」「うううう。

「師匠…」

「ん、どうした時雨?」

「実はさ、俺…医者になりたいつて思つてゐるんだ

「ほい…」

「親父から柔術を習つ時に、人を壊すも治すも自由自在だ」といつてそれで俺は治す方に 관심があつたんだと想つて

「確かに整体の腕は中々のレベルですね」

「小雪を助けた時に発動したこの龍掌や氣も、もちろん戦いの中で役に立つけどそれ以上に今みたいに人を癒すことには役に立つてる。俺はこうして授かってきた力を誰かを護るために使い、癒すために使いたいんだ。」

（ワシはその考えに行き着くまで大分回り道をしてしまったが、この子は…）

「だからこれからも俺をガンガン鍛えていいてくれ、もっと多くの人を護れるために、もっと多くの人を癒せるために…」

「その道は恐らく険しい物になりますが…」

「承知の上だ！」

「フフフ、楽しみですよ時雨。今後あなたがどう育ちどう強くなるのか

「そりゃの、やっと後継者が見つかったのじゃ。老い先短いワシに出来る事なら惜しむものは何もないぞ」

ああ、ここに来て本当に良かつた。俺はこの口改めて自分の夢の指針を定めた。

あれ以来、龍は武術だけでなく人体や自然の中の氣の流れとか氣が人体に及ぼす影響などを教えてくれるようになり、師匠からは医療の心得を教わった。

これらは将来に役立つ知識なので俺も出来る限り頭に詰め込んでゆく。もちろん体術のほうもアレからさらに磨きをかけていつていふ、まあ連敗記録は更新中だが。

しかし凄いと思ったのは地球そのものも氣を宿しているということだった。龍脈という氣の巡る道がありそこには莫大なエネルギーを秘めているとか、スケールがでか過ぎて中々想像がつかなかつた。他にも氣の操作のコツや龍掌のコントロール等もみつちり教わる、以前と比べると身体の氣の流れが円滑になつてゐるような気がした。

そういえば最近アパチャイさんと外で遊んでいるのか生傷が絶えない我が妹は見ていてなんだか微笑ましい、もちろん俺が龍掌で治してやるがこれくらいお転婆なのが調度いいんぢゃないかな？

元気に遊んでいるせいか重心が以前と比べて半端無い程安定しているように見える、我が妹も成長しとのですよ！

#### 修行29日目

短かつたよつて長かつたココでの修行も今日で一先ずの終わりを迎えた。日本に帰る事となつた。

相変わらず龍には勝てなかつたが一応の及第点はもらひ師匠に一人での龍掌の使用も許可された。アパチャイさんはあまり一緒にいられなかつたけど小雪の面倒を見てくれていた事には感謝の念が耐えないとお返しをしなきやな。

そんな事を食後のまつたりした時間に考えていると

「それでは最後に小雪の仕上がり具合を見てみましょつか」

と臍がのたまつた、は？

「臍、小雪の仕上がつ具合って何の？ダンスの？」

「何を言つてゐるですか時間、もちろんムエタイですよ」

……ナシテスト？

「ビツコツ事ですか師匠？アパチャイさん？」

「いや、それがじゃな……ビツセーリアパチャイがムエタイの修行をして  
いた所を見て興味を持ったからです。ワシリガお主の修行を付  
けてる間小雪もアパチャイにムエタイを教わっていました」

「……俺の気が確かなら初日でアラッターがどういひで危なつて話  
じやあつませんでした？」

「うむ、それがビツセーリ相手は小さな女の子といつて奇跡的にリ  
ミッターが作用したようぢや、相手がお主なら間違になく手加減なん  
て出来やせんかったじやない？」

「アパチャイにつけば手加減したよー山みつも深く、海より  
も高へー。」

「わーといつか小雪も結構危ない橋渡つてたつて事かよー

「じゃあ一時期小雪の生傷が絶えなかつたのつて…

「ああ、あつやアパチャイの仕業じやあない。試合で出来た傷じや」

「うふつ!? もつ試合までした事あるんですか!」

「うむ、昨日はつこにお前をると同年代の男のチャンピオンを倒してしもつての。ホッホッホ、スカウトを断るのに苦労したわい」

「師匠! それにアパチャイさん! なんて事をせてんですか、そんな危険な場所に小雪を…」

言葉を続けようとした俺の袖がグイッと引かれた、そこには今まで黙つて話を聞いていた小雪が両目に涙をたっぷり溜め今にも泣き出しそうな顔でじつむを見ていた。

「ひつぐ…しー、ちやん。ぼく…ムエタイやつむや…ひつぐ…いけなつ…かつた?」

「そんなことないわ、小雪! お兄ちゃん小雪が強くなってくれてとっても嬉しいな!!」

泣き顔で一発KOされてしましました。

俺だつて小雪の歳くらいにはもう親父からバリバリ柔術を教わつていたから別に女の子が格闘技をするのに抵抗があるわけじゃない。でもムエタイ始めて1ヶ月も経つていらない幼い小雪が本場のムエタイの試合に出るなんて流石に斜め上を行き過ぎてる、心配する俺の気持ちも解つて欲しい。

「ところがチャンピオン倒しちゃったのか」

「うん…アパチャイに比べたら遅いんだもん！」

「アパパパパ、最近の試合の質落ちてるよ～。アパチャイ、アレくら  
いの時はあれよりもっともつと速かったよ～」

さつき泣いたカラスがじこへやー、田の端に涙を浮べながらも満面  
の笑みで言い切ってくれました。

「ごめんね、チャンピオンさん。比べる相手が間違ってるよね、でも  
多分セコンドのアパチャイさんにも勝利の要因があったと思う、主に  
威圧感的な何かで。

「しかし小雪はいいものを持つてはこますがまだ身体ができるい  
ません、ココから先はひとつ鍛えてこつた方がいいでしょうね」

「だな、親父にも相談してみるか」

「アパチャイ、もつともつとココキにムエタイ教えてあげたいけどじ  
じいがダメだつて言つね～」

「当たり前じゃ、第一お主パスポートも持つとりやせんじゃろ。小雪  
の身体が本格的な修行に耐えられるようになるまではお預けじや

「「コキ～、アパチャイいつぱいお祈りするからこいつぱい育  
つよ～。そしたらアパチャイムエタイ教えこべよ～」

「うん、わかった！アパチャイから教えてもらひた」と、忘れないよう  
「あつとムエタイがんばる～」

小雪とアパチャイさんが抱き合つてゐ、ムエタイを教わつたつてイレギュラーはあつたけど小雪には大切な友達が出来たみたいだ。それだけでも「」に来て本当によかつたと思える。

「もちろんあなたも頑張つてくださいね、時雨」

「そりじゃぞ、次あつた時にまつたく成長しとらんかつたら拳骨じやすまんからな」

「わかつてますよ、師匠、臘。小雪、家に帰つたら一緒に修行頑張ろうな！」

「うん!!」

こうして俺たちのタイでの修行は終わつた。

次の日、空港に皆で見送りに来てくれた訳だが当たり前になつてしまっていたメークの存在がやつぱり都市部では受け入れてもらえず大騒ぎになつたのは…また別のお話。

先の約束通り、小雪がいっぽいいっぽい育つて俺の理性をガリガリ削つてくれるようになるのはまだ先の話。

## 『Time of study.』

「と云つわけでお勉強のお時間です。」

「いきなり何なんだい？」

「いや、金があつても頭が無けりゃ学校には入れんよ？亜巳」

「んなこた一解つてるよ、でもなんであんたが家庭教師なんだい？」

「俺の成績を知つててそういうのつかないか、亜巳ちゃんは？」

「ツチーつまんないねえ」

あれからやつと高校行きを納得した亜巳には一つ問題があつた、そ  
う成績である。

元々素行が悪く更に以前流れてしまつた噂のせいで亜巳の内申点  
はもはやストップ安だ。ならば別のところで補えばいい、そう入試の  
点数だ。例え内申点が100を切つていっても入試で400点以上  
とつてしまえば普通の高校にはいけるだろう。ちなみに俺達が目指  
す高校は私立川神学園という高校でかなり面白い校風で決して成績  
の敷居が高いわけでもなく家からも近い、ここなら高校生活も退屈せ  
ずにするそうだ。

さて、そこで冒頭につながる訳だが私立で自由な校風で人気といつ  
ことで何気に倍率も高くやはり成績が低くては話にならない。

「ところでお勉強会はつじまるよ~」

「わ～い」

「おべんきょ～… ズズズズズ」

「兄貴、俺保健体育で解らない」ところ「パシィンー」ガツ!!

「キメー」といつてんじやねーよ竜!」

「天使、定規はやめなさい。目なんて狙つたら失明しちゃうでしょーが」

「……なんでこの子達と一緒になんだい」

小学校低学年位の子供たちと一緒になつて高校受験に備える中学生、確かにシユールではあるな。

「ついでだよ、ついで。天も竜も勉強中は集中力が散漫になりがちだからな」

「だつてべんきょーなんてつまんねーよ、ぐれ兄イ」

「小学2年生でその言葉が出るとは…教師は何をやつてんだか」

「俺も天に同感だぜ、この作者は何を考えていますか?なんて知った  
「ひつかねーよ」

「算数は好きだよ～、数字見てたらね～なんだか気持ちよくなつて  
ぐつすり眠れるんだよ～」

ダメだこの子達…早く何とかしないと

「小雪はどうだ？勉強嫌いか？」

「ん~とね~、あんまり好きじゃないけど、レーちゃんがお勉強がんばってるから~僕もがんば~って思つよ」

なにこの子!?超可愛いんですけど!!

「小雪~お前はいい子だなあ~！」

そう言つて隣に座つていた小雪を抱き上げて猫つかわいがりをしてやる、小雪は気持ちよさそうでその笑顔がまたきやわゆい。やっぱリアレだね、男は背中で語らなくっちゃね！

その背中に無数の視線が突き刺さつた、…いや大丈夫だ背中の耐久力は正面のおよそ2倍、逝ける!?

「わっさと勉強始めるよ!!」

「ユツキーする~い、私も私も~」

「兄貴~俺も兄氣を見習つて勉強するぜ!だからその膝の上の特等席で勉強させ~「ガスッ!」  
「ブウウウ!!」

「ぐれ兄イ~うちもこれから宿題ちゃんとやるから見ててくれイ!」

む~、どうやら何かしらに火がついたみたいだ。しかし天使、国語辞典は止めなさい。何気に広辞苑より投擲に向いてそれなりに威力があるからね。

さて、俺に関して言えば勉強にはそれなりに力を入れていたりする。

師匠みたいに医者になるにはやはり医大を出なくてはならない、専門的な知識は親父がそばにいるので実地で学ぶ事が出来るがやはり受験大国ニーツポン、医大に入るには入学試験は避けては通れない。師匠みたいに無免許でモグリというのも出来なくはないが活動の範囲はどうしても狭くなる、それにASEに所属する事を考えるとやはり医師免許はとつておかなくてはならない。

おかげで学年トップをキープするモチベーションがしつかり持続している訳だ。

「じゃあ早速始めようか、鉄は熱いうちに打て。解らないといひはガンガン聞いてくれ、俺に出来る範囲で細かく説明していこうかと思う。」

「はい」

「わかったよ」

始まつてみれば静かなモノで少し心配していたが眞面目に取り組んでくれていた。

武術で培つた集中力はこんな所でも力を發揮する、芸は身を助けるつてやつだな。

ちなみに小雪はアパチャイさんとの約束をしつかりまもりムエタイを続けている。

亞巳は俺が医者になりたいという事を話してから何故か剣星のおつちゃんから針と灸と漢方を教わり始め、そのついでに中国武術を習い始めた。

辰と竜は以前親父が言つていた情操教育の一環で逆鬼の一いちやんから空手を教わり始めた。

一人あぶれてしまい拗ねていた天はたまたま遊びに来ていた香坂

のじーさまに気に入られ、また天も武器を使って戦うのがカッケエ！  
と言に出し香坂流を習い始めている。

気が付けば家は一家で柔術・ムエタイ・空手・中国拳法・武具術と  
一家族多国籍軍と化してしまった。  
まあ俺としても皆で一緒に切磋琢磨出来ると言うのは嬉しい限り  
だ。

なんか知らんが親父が「女の子としてのボディーラインを保つたま  
ま武人の身体を造り上げる、か。難しいが…それがいい」とか言い出  
してそろばんを弾いてた、大丈夫かな？

高校生になつて忙しい毎日が訪れるだらうけど、こんな家族団らん  
は大切にしないといけないよなあ。

「((こーちゃん))(兄貴ー)(ぐれ兄イー)(時雨ー)」( )教え((へー))  
((トヘルー))(なー)」

「はいはい、いつぺんに言つなよ~」

本当に忙しそうだった、だが…それがいひつてか。

「兄貴、この「あなたのパートナーは一人でも…」て絵なんだが、明らかに男同士で線が繋がってるんだ。これについて兄貴はどう」「ドゴン！」「ブフウウ！」

ああ！俺の家庭の医学が！？

## 『彼と彼女達の事情』

長女の場合

あたしが中国武術を習い始めたきっかけ？ついでさ、ついで。

時雨から「将来は医者になりたい」とか聞いてね、世話になりっぱなしも癪だしなんかできないかね~っとおじ様に軽く相談してみたのさ。すると「今時雨は整体を学んでいるから別のアプローチで力バーしてみるかね？」と針や灸や漢方に詳しい先生を紹介してくれた訳だが…

「お願いする時は」のポーズでお願いしてみるといいね！」

とんでもH口親父だったわけさ。

名前は馬劍星ばけんせい、中国の方ではいくつか道場を開いてるらしくおじ様曰く「あらゆる中国拳法の達人」らしいけどあたしにとっちゃただのエロ親父さ。

確かに漢方の知識は半端じゃないし針の腕だって針一本で患者に麻酔を掛けるほどだ、武術に関してもあるおじ様とタメを貼るほどの達人だった。だけどソレをマイナスまでいかなくともプログラマイゼロくらいに持つてくへらこのH口親父だ。

馬師父(物を教わる身としては最低限こう呼んでる)はおじ様と一緒にで相手を治すだけでなく壊す事にも長けていて、どうせならということで武術も教えてくれている。

まあ小雪もムエタイをやってるらしきからね、時雨の傍にいると厄介ごとも多いし最低限自分で自分の身くらいは守らなことね。

べ、別に朝早くから時雨と一緒に小雪が楽しそうに鍛錬してたのが羨ましかった訳じゃないんだ、勘違いするんじゃないよ！

しつかし時雨や小雪みたいに子供の頃から武術をやつてゐるのと比べるといづれしても劣つてしまつたんじゃないかい?と師父に聞いてみると

「毎日ちやんこへりこの年齢だと関係ないね。秋雨ビンもつこむし、おこげやんに任せるとこだい」

とか言つてたね、弟子の意思とか才能の有無はとつあえず関係ないみたいだ。

さすがにあたしも女だから筋骨隆々つてのは避けたいと思つてたんだがおじ様が組んだメニューを消化している現在は見た目上はあんまり変化がない、馬師父の内功も効いてこるのかこの間のスポーツテストではえらい数字を出しちまつて危うく部活動なんかに誘われるところだったよ。

もちろん武術メインになつちゃ本末転倒だから漢方も針もしつかり勉強している、時雨の家庭教師もあつて頭に詰め込む事は山ほどあるが…こんな生活も悪くなことわぬ。

ちなみに馬師父の盗撮は全て時雨が撃退してくれてゐる、その時によく雨にはチラつと見られちやひんだけど口へりこのは撃退料つて事で。そいつ、しょつかないのや。

### 次女と次男の場合

~~~~~

辰ねえが寝けまつたか、しょつかねえから俺達が空手を始めたきっ

かけつてのを教えてやるよ。

俺は見ての通りだが、実は隣で立って寝てる辰ねえも一人揃つて暴れ癖つてのがあつたのさ。

クラスのウジウジしてるように奴らと一緒にいたら、この気が滅入つちまう、だから昔はその辺で好き勝手暴れたもんだ。辰ねえも滅多な事じゃあ暴れなかつたがその分一度暴れだと俺以上に手が付けられなかつた。

しかしそれも亜巳姉えが兄貴を家に連れて來た時までだつた。

第一印象は最悪だつた、亜巳姉えが男を連れてきたのも氣に入らなかつたがそれ以上にうちのクラスにもいそうなヒヨロツとした身体が気に入らなかつた。だからムカついて殴りかかつた時にブン投げられたのは衝撃的だつた。俺の身体にはなんの力も掛かつてなかつたと思う、だから音もなく部屋の床に落とされた事に理解が追いつかなかつた。

「なるほど、元気な弟だな」

そう言つて俺を困つたような笑顔で覗き込む兄貴の顔が俺の脳裏に焼きついた。

それから兄貴はよく家にきて遊ぶよつになつた、辰ねえも兄貴と一緒に遊ぶのが楽しいらしくあのやんちゃな天までもが懐いてた。兄貴は強くて優しくて俺の憧れになるのにそう時間は掛からなかつた。

そんな兄貴の背中に一步でも近づきたい、そう思つて俺にも武術を教えてくれ！と頼んだんだが「柔術はお前には向いてないし俺が人に教えるにはまだ早いんだ、すまんな竜」と言つて頭を撫でられた。

そんな時に俺たちのじょーそーきょーいくとかいう事のために秋雨のおじきが呼んだ先生と出合つた。

「俺は弟子は取らねー主義だ!!!」

第一印象は最高だった。兄貴の時とは違った顔に残るデケー傷や分厚い胸板、俺の身体より太い一の腕がその強さを物語ついていたからだ。

名前は逆鬼至緒、空手家でその道では「喧嘩100段」なんて呼ばれているらしくあまりにも強すぎて試合にも出れないそうだ。

だけどそんなの関係ねえ！こじに強さを形にしたようなのがいるんだ、兄貴に鍛えて貰えねーならこのおっさんに教えて貰えればいいんだ！そう思い俺は胸の内を師匠に打ち明けた。

「俺は兄貴の背中に追いつきてーんだ、でも今のままじゃ追いつくどころか背負われちまってる。それじゃあいけねーんだ！俺は背中に乗せてもらいたいんじゃない、その背中を預けてもらひてーんだ！」

「時雨の背中を、か。あいつは俺から見ても中々の腕だ。あいつの背中を預負ひなんてのは厳しい道のりになんざ、ガキンちょ

「どんなに厳しい道でもだー！俺の兄貴に対する想いはそんなに軽くはないねえ！それに俺の名前は竜兵だ、ガキンちょなんてなよしちい呼び方すんじやねーよー！」

「フ…ハッハッハ！ そうだな今日び犬猫にも名前があるんだ、そつか竜兵か。いい名前じゃねえか、気に入つた！ だつたら竜兵、俺にその時雨に対する想いつてのを見せて見やがれ！」

「わたしも～」

「ん？ なんだ嬢ちゃん、起きあつたのか？」

「わたしも～しーちゃんの事すきだよ～、竜に負けないくらいにね～」

「負けないぜー辰ねえ！」

「へっ面白れえ、だつたら一人纏めて面倒みてやるぜー！」

そうして俺と辰ねえの武術に身をおく生活は始まつた。師匠の言うとおり決して楽な道じやあなかつたがこの道が兄貴の背中に繫がつてゐるなら必ず追いついてやる！待つてろよ、兄貴！

待つててね～、しーちゃん。私も…コツキーみたいに～…がんばるから…ZZZZZZ。

### 三女の場合

うちが香坂流を始めた理由？そりゃもちろんカッkehからさ！

あれは皆が武道を始めてうちが一人でゲームで遊んでる時だつた。ぶつちやけつまんなかつたぜ、みんな一緒に鍛えているのにうちだけ仲間外れつてのが。でも格闘技つてのがんまり合つてないつてのはうちにも解つてた。

だつて皆素手なんだぜ？ゲームでいやみーんな武道家、だれか一人くらい剣士や戦士はいねーのかよーでも秋雨のとーちゃんが時々やつてくる槍や日本刀持つたやつをポンポン投げてるのを見てたらなんか一気に萎えちまつた、武器装備しても強くなーじゃんつて。

そんな事考えてた時だつた、いきなり後ろからじーちゃんに声をかけられたのは。

「なんじやお主、こんな所で一人で遊んで。ヨリヒョウ、暇ひつたらわ  
しと遊ばんか？」

後ろをみると和服を着て眼帯をしたじじいが座っていた。

「んだあじじこ？ ヒーちやんの知り合いか？」

「ほつほつほ、ホウジヤ番坂と言つての。あやつが席を外してしまつ  
て暇ひつたから遊び粗手を探しておつたのじや」

「ふ~べつにいけど、ゲームできんのか？」

「むう、流石にフタノハはわからんの?」

「フタノハハジヤねーよ、サターンだよサターン。まあでもゲーム出  
来ないんなり向して遊ぶ気なんだよじじこ」

「やうじやの、じやあ的当てもして遊ぶかの？」

「的当て？ なんだそりや」

「まあおぬしの様な若者に言わせてみれば「だーつ」みたいなもんかの  
？」

「おお、マジかよ~じじいダーツできんの!?

「ほつほつほ、まあ付いてきてみ」

やうじでじーちゃんに連れられて庭に行くとじーちゃんが木で  
きたボールみたいなのを持つてきた。

「それが的？つづーか刺さんのかよ？」

「まあまあ見ておれ」

そう言つて、じじいがボールを投げると

カツカカカツカカカカツ!!

「スッゲエエエエエ!!!」

なんとじじいが投げた木の棒が空中で全部刺さりました！？

「ほれ、ウニージヤ」

「すげえぜ！じじい！どうやったんだ!?」

「ほつほつほ、なーに香坂流にしてみればこの程度お安いもんじや」

「香坂流？それも武術なのか？」

「武術と言つよりは武器術じゃな。秋雨たちのように素手ではなく剣や槍、他にも今みたいな手裏剣の類も使う」

「武器使つて強くなれんのか？」

「ん？おおそつか、お主は秋雨の戦いをよく見ておるのだったの。アレはワシが武器相手に戦つ術を教えてやつたのよ、故に武器が決して弱い訳ではない」

「マジで？じゃあうちにも教えてくれ！」

「なんじや嬢ちゃん、香坂流を習いたいのか？」

「だつて、ウチ武道とかあんまりガラじやねーし。それに武器使つて戦つてカッケンじやん！」

「ふむ、嬢ちゃん名前は？」

「名前…え、エシジエル天使」

「ほつ、ハイカラでかわいい名前じやの」

「へ？ 变な名前じやないか？」

「何を言つてゐ、ワシはハイカラでいいと思つぞ？」

「そ、そつか？ へへへ…」

「わて、天使よ。香坂流を鬻つのは並大抵の事ではあつやせんぞ、覚悟ははこいか？」

「おうよー」それでウチが強くなつたらぐれ兄いも驚くぜー。」

「ふふ、じつせなり時雨より強くなつてみるかの？」

ウチがぐれ兄いより強く？ おもしれえ！

「これからロロシクなーじーちゃん！」

ウチもこつか西口ねえみたいに、ウチの名前を可愛こいつと言つてへたぐれ兄いの横に立つてみてーんだー！

こうして彼と彼女達はそれぞれの道を歩み始める、その道は幾度も交わりそして一つの場所へと続していく事になる。

## 『川神学園入学』

春！それは別れの季節でもあり出会いの季節でもあるー」ということで・・・

「ピッカピカの、一年生！」

「高校生になつてまで言ひつ事かい？」

俺たちも晴れて川神学園に入学しました！いやー受験勉強は大変だつたが合格発表の時に嬉しさのあまりに亜巳が抱きついてくれた事でチャラつて感じだな、もちろんその後吹っ飛ばされたけどな！

「で、あたしたちのクラスはココでいいのかい？」

「ああ F組で合つてるで、さあ入るわ」

ちなみにクラス分けについてはS組からF組まであり成績上位者はS組、問題児はF組と結構特色があり俺は入試のテストでトップだったのでS組に入らないかと電話があつたが断つた。多分 A S E の仕事とかで中々出席出来ないかもしれないし亜巳とクラスが分かれれるのも嫌だつたしな。

クラスに入つてみるとまあ騒がしい、まだ担任が来ていないのでクラスの中に諫める人間も居ないようで…まあこんなもんか。

「後ろの方が開いてるし、あそこに座つてるか

「そうだね」

横にダルそうに眠っている男子生徒がいるがまあ構わないだろう、つづーかこの五月蠅い中よく寝てられるな。とこうか入学初日で寝てるって大丈夫かコイツ?

そんな事を考えているとその男の後ろの席に座っていた金髪の女の子が声をかけてきた。

「始めてまして、私は染井芳乃。そめいよしの今日から1年間よろしくね」

その雰囲気はいかにもお嬢様といった感じで問題児が集められると言つて組には似つかわしくない雰囲気だった。どうやらそう思つてるのは俺だけではないみたいで周りで騒いでいた男子も染井のことを見ていた…ガスッ「あだつ！」

「何デレ、レしてんだい、この馬鹿が。連れがすまないね、あたしの名前は板垣亜紀。で、こっちが岬越寺時雨ってんだ。よろしくね」

「岬越寺…珍しい名前ですね？」

「そう? 確かにあんまり聞かないけどね、これからよろしく」

そう言つて手を差し出すと彼女は少しためらいながら手を握つてきた、なんか周りの視線が痛いがまあ気にはなんないな。それより気になるのが今握つているこの手だ、俺の気が確かにこの手の感触は…ガタン…

「あつぶねえ～!! 入学早々遅刻するハメになるかと思つたぜ…」

そう言つて慌しく入ってきた男子生徒…あいつは!?

「おー」「あ、あんた…」「へ?」

「ん？ お、 おまえは……」

そう言つてお嬢様然としていた染井は随分と驚いているようだ…  
俺の手を握りっぱなしで、おかげで亜巳の視線で射殺されそうだ。そ  
んな事考えている間に一人はヒートアップしていった。

「人のこと散々ガキ扱いしといてテーマも同じ高校生じゃねーか！そ  
れも同じ年！」

「関係ないでしょ！ キャリアからいえば私の方が全然上なのよ！ 私が  
いなかつたらダメダメだったじゃない！」

あれ？ さつきのお嬢様どこにつけたの？ つづーか手が万力のように  
締め上げられてるんですが！？

「少しば敬つてほしいもんだわ！」

「うるせー！ てめーみたいな日頃の行いが悪い奴には天罰が下れ！」

「いや、 優！ なんかしんないけどその天罰俺に落ちちゃってるから！  
染井さん手を離して！ 手も視線も痛いです！」

「あれ？ お前時雨じゃねーか!? なんでこんなところに居るんだ？」

やつと手を離してくれた染井さんの顔に更なる衝撃が走っている、  
いや驚いたのはこっちなんですけどね？

「あんた達知り合いなの？ 道理で握手した時に変な違和感があつた訳  
ね」

「いや、こっちも驚いたよ。そっちが地なんだね、染井さん」

「あ…」

あれだけ騒いでいたクラスメイト達が静かに、そして興味心身にこちらを見ていた。

「ンンッ…歸るからよろしくお願ひします」

「今更猫被つても遅いと思ひナビねえ」

里口の弦きが余計に物悲しさを際立てる、しかし流石に騒ぎであったのだろう。さつままで眠っていた男子生徒のほうから起きた氣配がした。

「うう…悪いけどもう少し静かにしてくれ… 昨日は夜遅くまでバイトして疲れてるんだ」

そんな勤労少年が頭を上げるとそこには見知った顔があった

「悟!?」

「あれ、時雨どうしたんだこんな所で？」

「またあんたの知り合いかい？」

「ああ、コイツは…」

教室に入つてからとこつものあまりの展開に頭がついていかずとりあえず説明しようと思ったが時間をかなり食つてしまつていたようだ、やる気の無いような男の声が響いてきた。

「おら～お前ら席に着け～、入学早々廊下まで聞こえるよくな声で騒  
め立てるやつーさんを困らせるんじゃねーぞガキども」

「あ、あんたは!?」

「宇佐美さん!? なんでこんな所に?」

「あん? お前ら…」

ホント高校生活は退屈しないで済みそうだわ。

~~~~~

衝撃の入学式から数時間後俺達6人は駅前のファミレスに来てい  
た、 そう教師も入れて6人である。

「しつかし驚いたな、まさか宇佐美さんが学校の先生だなんて」

「代行業の依頼だよ、今年は少し特殊な生徒を迎えるからって学長に  
言われてな。蓋を開けてみればまさか裏に関わってる人間がこんな  
にいるとは… 断りやよかつたかな」

「ちよつと… あたしをこんなのと一緒にしないでよ…」

「そりゃ… うちの台詞だ! : ん? つづーか先生、俺たちの事知つてん  
のか?」

「ああ、言つただろ? 俺の本業は教師じゃなくて代行業、情報が命の世  
界だ。裏でお前たちの事知らなきやただのモグリだな、『スプリガン』

に『遺跡あらし』？

「やつべー… そんな『シラ割れ』でんのかよ、俺？」

「まあ流石に学校の人間で知っているのは学長と川神院で師範代やってるつー先生くらいだらう、お前達の情報はそれくらいアングラって事だからまあ学生生活は安心していいぞ」

「有名人は辛いな、優」

「つるべー」

「しつかし驚いたのはそっちね、まさか『デスマシン』なんて異名を持つASEドライバーがこんな冴えない奴だったなんて」

「うう… なんか扱いが酷い、でも『デスマシン』って？」

「ああ、そりゃ百舌鳥<sup>もず</sup>さんの事だな。あの人口は戦争でブイブイいわせてたつて話だから」

「あの百舌鳥さんがかい？ 今の落ち着きよつからは考えられないねえ」

「なんだお前ら、ASEのトップとも知り合いなのか？」

「ええ、俺最近ASEに仮登録しまして。その関係で時々百舌鳥さんがつけて遊びに来るんですよ」

「羨ましい」って、そういう人脈は大事にしちけよ？ ノネなんてのは金じや買えんからな」

「狡すつからいわね、そんな事よりお腹減つたわ何か注文しましょ  
よ」

入学式は昼までそのまま直接来たもんだから確かに腹は減つて  
いた。

「じゃあ俺はしじうが焼き定食、亜巴は？」

「あたしはマラソンチでいいよ」

「俺は焼肉定食」飯大盛！あとラーメン一汁」

「どんだけ食べんのよあんたは、私はハンバーグセットをパンで。」

「俺は……水でいいや」

「は？ どうした悟、腹減つてないのか？」

「あ、ああ… そうなん」「ググウ~~~~~」……」

「はあ… しょうがねーな。ねーちゃん俺おでん定食でコイツにマラン  
チ頼む」

「かしこまつましたー」

「い、いいんですか、先生!?」

「大人が腹空かしてゐ子供の前で飯パクつく訳にもいかねーだろ、つ  
つーがなんで ASE の ハージョントが金持つてねーんだよ

「そ、うよ、あそここの依頼料つて馬鹿高いんでしょ？」

「ん~他の人達の事はよくわからないな、俺は高校入って一人暮らしを始めるつて事で田中鳥さんから直接依頼料貰つてになつたんだけど昨日の依頼料はまだ貰つてないんだよね。とにかく先生、ありがとうございます!」

「もひ~言つてくれれば私が奢つたのに(モヒすればあのASEニアライバーとコネが...)」

「あんたも結構狡すっからいねえ、染井。顔に出てるよ」

「何よ~しそうがないじゃない、フリーなんていくら人脈が有つたつて足りないんだから!」

「その人脈駆使して結果があれじゃ~なあ...イダッ!」

「あんたはいい加減黙つてなさい」

「こいつら何気に息合つてるよな?そんな事を考えていると注文したメニューがやつてきた、この時期におでん置いてる店つていつたい?」

「ほら、お前ら暴れてないでさつと食え。それに悟、お前これから一人暮らしで大変だろ?し何かあつたらすぐに言えよ?晩飯くらいなら出してやつから」

「本当にいいのか!?時雨!?

「まあ男の手料理なんかでよけれりやーな」

そう言つて俺たちは食事を食べ始めた、コイツ軽く泣き入つてゐるけ

どちらも「飯食わせてんですか、西田鷗さん？」そんなこんなで食事をした俺たちはクラスの雰囲気はあーだとか学園長がどーだとこう先ほどの生臭い話とは一転して学生らしこな話を終始楽しんだ。

「うわーまあでしたー！宇佐美先生ー！」

「ああ、『レベラ』ならかまわねーよ。また暇な時に仕事の話でも聞かせてくれ」

「じゃあ俺は帰るわ、仕事から直接学校いったから今日から住むマンションの確認もまだしてねーし」

「俺達もそろそろ帰るか、小雪達も家に帰ってるだろー」

「そりだねえ、じゃあね染井」「芳乃よ」「ん？」

「芳乃でいいわ、あなたのガラじゃないでしょ？」

「ふん、歸つてくれるんじゃない芳乃。あたしも西口でいいよ

「OK西口、また明日学校でね」

「ああ」

染井芳乃…なんて男前なおっくわウウウ!!

「あまい女の子に対して失礼な事は考えないよっこね、時雨君」

そう言って今度こそ芳乃は帰つていった、道に置いてある「コンクリック面掛けたなげるか普通？」

「あまい女子に対する失礼な事は考えないよっこね、時雨君」

「進歩しねえなあお前も、じゃあ俺もそりそろ帰るわ。くれぐれも面倒事は起こすなよ～」

「そよつね、宇佐美先生！いやあいい人だな先生は。じゃあ俺もそろそろ帰るよ當時、はやく田中島やんて依頼料貰わなきゃ晩飯が…」

そう言つて俺と田口を残して皆が帰つていった。

「あんたが言つてた通り退屈しないですみそりだね、高校生活つてやつも」

「いや、既に俺の予想の斜め上遡つちやつてるんだけどな」

あのメンツが揃つて川神学園で静かな学園生活が送れるなんて微塵も思えない…どうか爆撃だけはされませんよー！」

## 『登場人物紹介 & 設定』

岬越寺 時雨  
こうえつじ しぐれ

|     |                        |
|-----|------------------------|
| 身長  | 175センチ                 |
| 血液型 | A B型                   |
| 誕生日 | 6月13日 ふたご座             |
| 一人称 | 俺                      |
| あだな | しーちゃん                  |
| 武器  | 素手（岬越寺流柔術、中国武術、龍掌）     |
| 職業  | 川神学園1 F在籍 ASE仮契約 実家住まい |

|        |                    |
|--------|--------------------|
| 好きな食べ物 | ピーマン以外ならわりとなんでも    |
| 好きな飲み物 | コカ・コーラ             |
| 趣味     | 読書（雑誌から古文書まで何でも読む） |
| 特技     | 整体・気による治療          |
| 大切なもの  | 家族 仲間              |
| 苦手なもの  | 初見の達人              |
| 尊敬する人  | 父親 臓 ドクター          |

本作品の主人公、外見は「史上最强の弟子」の主人公を少し成長させて落ち着かせた感じ（若いころの秋雨に似ている）

困っている人を放つておけない性格で基本お人よし。

幼少の頃より秋雨に柔術を教わっており腕前は現時点で準達人級（秋雨達は特A級達人）更に臓やドクターから氣と中国武術も教わつておりそちらの腕前も準達人級。また肉体は秋雨により全身を白色でも赤色でもない桃色の筋肉に改造されている。

ただしその力をあまり見せびらかせないためクラスメイトにはあ

まり知られていない。学力は学年トップだったがS組には入らず素行の悪いと言われるF組に在籍している。

家では子供の頃から料理当番をしており腕はおかんクラス、しかし板垣兄弟を家に迎えて以降辰子が料理にピーマンを入れるようになり一度亜巳達に説教を受けながら泣く泣く食べた事がある。（秋雨は事前に逃亡）

家族の生活費や学費を稼ぐためにASEに仮契約をしている、頻度は少ないが重要度（危険度）の高い仕事に派遣される事が多く紛争地帯に送られることも多いが本人は怪我をして困っている人を治療して助けられる為あまり嫌がっていない。またこういった案件は依頼料が高い。

父親の秋雨が美術品や骨董品に造詣が深いために昔からそいつた本物を見抜く目は確かに物の良し悪しは知名度や金額で判断しない。

そんな父親に連れられ何度もアーカムの遺跡調査に借り出された事があり超古代の遺産についてもいくつか知っている。

恋愛感情はわりと奔放で一夫一妻にはこだわらない、この辺りは父親の影響が濃いのかも…？

岬超寺 小雪

身長 140センチ

3サイズ 68 45 71

誕生日 7月1日 かに座

一人称 ボク

あだ名 雪 ゴッキー

武器 素手（ムエタイ・古式ムエタイ）

職業

小学校4年生 実家住まい

好きな食べ物 マシユマロ

好きな飲み物 特になし

趣味 空を見ること

特技 虎を乗りこなす（今のところメー才限定）

大切なもの 家族

苦手なもの どなり声

尊敬する人 時雨

本作品のヒロインの一人、現在は小学4年生で辰子や竜兵と同じクラス。

以前実の母親から虐待を受けており精神崩壊寸前で路上に倒れていたところを時雨に救われ以後岬越寺家の養子として迎えられる。母親は高槻巖によつて社会的に抹殺されており一度と日本の地は踏めない状況となつてゐる。

いまは天然ですんでいるが物語が進むにつれて電波になるかは今後の作者次第。

時雨がタイに修行に行つた際に一緒に付いていつておりそこで時雨以外の始めての友達「アパチャイ・ホパチャイ」と出会いその時アパチャイがやつていたムエタイに魅せられ時雨が居ないところで教わることとなる。その時は身体ができるいなかつた為、奇跡的に手加減が出来ていたアパチャイでも教えるのは危険とドクターが判断して帰国際はアパチャイの同行を禁止している。

しかししつかり基礎は教わつており時雨監督の下修行はしている、その為現在「岬越寺流肉体改造法」「2.0（女の子バージョン）」を遂行しており現在全身の30%の筋肉が桃色筋肉となつてゐる。

原作のように閉鎖的では無いが学校では基本は板垣兄弟としか遊ばない、家では時雨が居る時は一緒にお風呂に入つたり同じ布団で寝たりしているがまだ恋愛感情は芽生えていない。

辰子とは「たっちゃん」「コッキー」の間柄で岬越寺癒し系ユーチューバーとして愛されている。この辺はいつか書きたいと思つてます。

板垣  
亜巳

身長 162センチ

3サイズ 80 56 82

誕生日 10月7日 てんびん座

一人称 あたし

あだ名 亜巳ねえ 亜巳ちゃん

武器 素手（中国武術）針

職業 川神学園1 F在籍 岬越寺邸住まい

好きな食べ物 生玉子

好きな飲み物 ジャスミン茶

趣味 誰かの面倒を見る事（本人は否定）

特技 鍼（ハリ）灸 漢方

大切なもの 家族 仲間

苦手なもの 師匠（Hロモード時）

尊敬する人 岬越寺時雨 秋雨 馬剣星（真剣時）

本作品のヒロインの一人、外見はまだ高校生なので原作より少し幼くケバくない。

時雨とは小学校からの付き合いでクラスはずつと一緒に、中学一年生の時に岬超寺の家に引き取られる。

親に捨てられた過去がありその為か妹達には表にはあまりださないが過保護になってしまっている。

自分たちの生活費を稼ぐ時雨の為に少しでも力になるつと思い馬剣星に鍼（ハリ）、灸、漢方を教わる、そのついでとして中国拳法を教

わるがそちらの方でも頭角を現す。

時雨に対して恋心を抱いているがそれをあまり表に出すことはない、ツンデレとクーデレ足してつで割ったような感じ。

将来は時雨のサポートをする為に一緒に大学に行きたいと考えていてせめて大学の学費は自分でいくらか出したいと思つており何かしら稼ぐ手段を探している。

Aでまだ公開されていないヒロインが亜巳ねえじゃなかつた場合作者が何処に逃亡する可能性ができるかも…

板垣 辰子

身長 147センチ

3サイズ 73 49 72

血液型 A B型

誕生日 8月27日 おとめ座

一人称 わたし

あだ名 たっちゃん 辰 辰ねえ

武器 素手（空手・古流空手）

職業 小学校4年生 岬越寺邸住まい

好きな食べ物 メロン

好きな飲み物 メロンソーダ

趣味 寝ること

特技 前羽の構えで眠れること

大切なものの 眠りを妨げる全て

苦手なものの 板垣亜巳 岬越寺時雨 秋雨 逆鬼至緒

尊敬する人 本作品のヒロインの一人、現在は小学4年生で小雪や竜兵と同じく

ラス。

親に捨てられた過去を持つておるその時自分たちを育てようと頑張っていた亞巳を、そして自分たちを助けてくれた時雨を尊敬している。時雨に対してはそれ以前から遊んでいる時から懐いており背中におんぶされるところ秒で寝てしまつ。

昔から少しでも亞巳の力になろうと料理を担当しており岬越寺邸でも毎日時雨の手伝いをしており時雨がいないときは一人で料理を作つてゐる。

実は動の気の使い手であるがまだ精神が未熟なため暴走しがち(史上最強の弟子のバーサーカーモードみたいなもの)、その為情操教育の一環として同じ動の気の使い手である秋雨の知り合いで空手の達人「逆鬼至緒」に空手を教わるようになる。

同時に小雪と同じく「岬越寺流肉体改造法ver.2.0(女の子バージョン)」を遂行している。

時雨に対する感情はまだ「親愛」「感謝」が強く「愛情」には届いていないが亞巳は「時間の問題」と考えている。

原作ではお姉さんキャラでしたが妹キャラとなつてしまつました、辰子さんファンの皆様すいません。

作者はタカヒロファンの姉スキーなのでこの件に関しては少し迷いがありましたが亞巳さんと主人公を同年代にするという決断をもつてこの設定でいく事に決めました。

天使に対して姉の立場にはなるモノの大和とは引きません、あしからず。

身長

154センチ

血液型

A B型

誕生日

8月27日 おとめ座

一人称

俺  
竜 竜兵

あだ名

素手（空手・古流空手）

武器

小学校4年生 岬越寺邸住まい

職業

甘いもの

好きな食べ物

コロア

好きな飲み物

喧嘩

趣味

いかなるツッコミを受けても次の瞬間には普

通に戻っている

大切なもの

家族

苦手なもの

うるさい女 怒った姉

尊敬する人

板垣亜巳 岬越寺時雨 秋雨 逆鬼至緒

板垣兄弟の長男で岬超寺邸の数少ない男子

暴れ癖があり初めて時雨とあつた時にも殴りかかったがあつとう間に投げられて顔を覗き込んできた時雨に對して一目ぼれ、ホモの氣質がこの時に一気に開花してしまった。

男（時雨）に対しても性的な興味があるが亜巳や天使のツッコミにより時雨への実質な被害は未然に防がれている。

その性格上辰子と一緒に情操教育の一環として空手の達人「逆鬼至緒」に空手を教わるようになる。

逆鬼に対しでは愛情はあまり無いが時雨に匹敵するほどの憧れを持つており空手を鬻いて出してからは無用に暴れることは無くなつた（喧嘩を売られたらもひひと買つが）

板垣 いたがき 天使 えんじえい

|        |                      |
|--------|----------------------|
| 身長     | 132センチ               |
| 誕生日    | 5月1日 おうし座            |
| 一人称    | ウチ                   |
| あだ名    | 天 天ちゃん               |
| 武器     | ありとあらゆる武器（香坂流武器術）    |
| 職業     | 小学校3年生 岬越寺邸住まい       |
| 好きな食べ物 | なんでも食つ               |
| 好きな飲み物 | なんでも飲む               |
| 趣味     | ゲーム                  |
| 特技     | 度胸試し                 |
| 大切なもの  | 家族 ジーちゃん（香坂師匠）       |
| 苦手なもの  | 勉強                   |
| 尊敬する人  | 板垣亜巳 辰子 岬越寺時雨 秋雨 香坂老 |

本作のヒロインの一人で板垣兄弟の3女で末っ子、今は辰子達と一緒に小学校に通っているが同年代の友達は少ない。

周りが武道を始めて一人いじけていた所を香坂老に出会い香坂流を習い始める、本人曰く素手は性に会わないらしい。暴れん坊だが人懐っこい性格をしている。

香坂流を習う際は本格的な武器を使っているが日常生活ではその辺のもの（文房具、食器等）を代用しており重たい本（家庭の医学等）は竜兵ツッコミ専用と化している。

香坂老の影響で原作よりも遙かにモラルを持ち合わせており竜兵の下ネタに対して過剰に反応する耳年増もある。時雨に対してはまだ恋愛感情は抱いていないが少なくとも自分より弱いヤツは好きになれないと思っている。

身長 180センチ

一人称 私

あだ名 おじ様

武器 素手（岬越寺流柔術）

職業 柔術家 芸術家 ASE外部顧問 アーカム考

古学研究部門所属

好きな食べ物 あべかわもち

好きな飲み物 そば湯

趣味 俳句 将棋 暮

特技 芸術作品の修復

大切なもの 家族 仲間 歴史的建築物・芸術作品

苦手なもの ピーマン

尊敬する人 T・F・アーカム

主人公の父親で秋雨診療所の医師だが裏では特A級達人に指定されており「哲学する柔術家」と呼ばれている、またASEの外部顧問であり提携先のアーカムにも所属しており多彩な才能を持つ。

息子を鍛えており自分が培ってきた物を全て叩き込むため幼い頃から厳しい修行を課し時にはASEやアーカムの仕事に同行されることもある。

自身は陶芸や書道をたしなむ芸術家で評価も高く作り出す作品には高値が付けられる事が多くが本人には金銭に対する欲があまり無くいわく「芸術は売り物じゃない」

息子が小雪や板垣兄弟を連れてきたことにより仕事を増やすぞうと思つたが思いのほか父性が目覚めてしまい幼い頃に時雨にあまり父親らしいことをしてやれなかつた分を板垣兄弟や小雪に向かようと思つてゐる。

達人同士の知り合いで「逆鬼至緒」や「馬剣星」や「香坂八郎兵衛」

等と交流がありそれぞれに子供たちの武術の師を頼んでいる。また「百舌鳥創」や「スティーブ・H・フォスター」等とも知り合いでその関係がASEやアーカムに出入りしているうちにいくつかポストを任せられている。

上記のように一流どころの知り合いが多くその交友関係の広さは九鬼家や不死川家等の名家を上回る程である。

またアーカム関係で超古代の遺跡やオーパーツにも関心がありその手の情報が入ると好奇心を抑えられず直ぐに現地に向かつてしまふ。

以降脇役？の為情報少なめ

斑鳩 悟  
いかるが さとる

ASEの看板エージェント「ASEドライバー」で各種自動車・オートバイ・船舶・飛行機のみならず、潜水艇や建設機械、電車などに至るまでエンジンの付いているあらゆる乗り物と一体化し、初見であろうと完璧に乗りこなす事が出来る。

秋雨の息子時雨とは時々仕事を一緒にする仲で自分の能力を棚に上げて時雨の事を凄いと思っている。両親は他界しており今現在は高校入学を期に安アパートに一人暮らしを始め今まで管理を百舌鳥に任せていたASEの報酬も貰うようになるが百舌鳥の方針の為どんな高額の依頼料を貰つても一仕事1万円しか貰つていない（悟は普通に依頼料が1万円だと思つて）

現在川神学園に在籍しているがコレは情報漏洩を防ぐ為の手段として百舌鳥が考えた事だがこの配慮が後にバッヂリ裏目に出てる。

A S E日本支部長で悟の師匠。時雨の父親秋雨とは古い知り合いでその繋がりか秋雨をA S Eにとつては異例の外部顧問の座に就任せている。

とある事件により右目の視力を失つており悟の高校入学を期に一线を退き「デスクワークに専念しているがマシンを使った戦闘は達人級で、並外れた戦闘能力とどんな乗り物でも乗りこなす運転技術から「デスマシン」という異名を持つている。

A S Eドライバーの座は悟に譲つてはいるがまだまだ未熟と厳しく当たつてはいる、悟の報酬が安いのはその一環で曰く「高校生に多量の現ナマを持たせるのはイカン」（悟マジ涙目）

宇佐美 巨人

代行業「宇佐美代行センター」の社長で時雨の昔からの知り合い。若い頃は喧嘩屋として名を馳せたが今は引退して代行業に専念しており川神学園の臨時講師もその依頼の一つ。

裏の世界に精通していてA S Eや達人の事だけでなくアーカムの事にも通じており何かとヤバイ事には鼻が効くので今回のF組担任は正直貧乏クジを引かされたと思つてはいる。

現在28歳で何気におにーさんで通すには限界が来ている。

高槻 蔵

秋雨の友人で本人は「単身赴任中のサラリーマン」を自負しているが実際は世界最高クラスの傭兵＆諜報員でその実力はアメリカ合衆国の諜報機関や九鬼従者部隊が束になつても勝てなかつた程。武術に関しては秋雨と同じ特A級達人であり忍術を仕様する。高槻一族は乱涙（忍者）の出自で古くは役小角えんのおづねを祖に持つ熊野山系の修

験者の系譜にある。

子供好きだがまだ出てきていな妻との間には子供はない。

## 龍

タイで時雨に氣の扱い方を教えた氣法師でアーカムのS級エージェント「スプリガン」の一員。見た目は長髪、長身の中国人青年だが本名も年齢も不詳で謎の多い人物。

秋雨や巖の友人で彼らが言う龍の問題点というのは将来強くなる見込みのある敵には止めを刺さず、叩きのめすにとどめ、更に強くなつた敵と再び闘うことを、己の修行としている所でそこには善悪の判断はあまりなくよっぽどの事がないかぎり大抵の悪人ですら逃がしてしまいその尻拭いを秋雨や巖がやることがしばしば。

しかし自身は人質を取つたりするような人間は気にいらないと言つたりする所本人は悪人ではない。

自身を鍛錬のみならず教える事にも長けていて時雨の強さの一端を担つており他にも「スプリガン」の御神苗優を弟子に取つてゐる。

## パー・カッブ・ラムディ

タイで時雨に龍掌の手ほどきを受けた老人で通称「ドクター」。元スプリガンで「神の手を持つ男」と呼ばれ、かつては裏の世界でナンバーワンの殺し屋として恐れられた。医者になつた経緯は不明だが生命に対し強い倫理観を持つ。

龍掌を用いた心靈手術ができ、相手の患部を切開することなく腕を潜り込ませ、腫瘍や内臓器官のみを取り出す事が出来る他、龍に匹敵する武術と体術を誇る。また医術全般のエキスパートで関連の古文書を数多く所蔵しており、その古代文明の知識を頼つて優たちスプリガンがしばしばラムディが開いているタイの無医村の診療所を訪ねる。

タイの空港で腹をすかせていたアパチャイに飯をおじつてやりそれ以降その純粹さと特A級の力を悪用されないよう面倒を見るようになる。アパチャイが小雪にムエタイを教えていた事にいち早く気づき様子を伺っていたが問題ないと判断し、その後小雪に実践を積ませるために試合に出させたのもこの人。

### アパチャイ・ホパチャイ

タイで小雪にムエタイを教えた人物で裏ムエタイ界では「裏ムエタイ界の死神」の異名を持つムエタイ、古式ムエタイの特A級達人。

外見は身長2メートルを超える風貌から悲鳴を上げられることも多数あるが性格は純真で子供の様に無邪氣、食べることと子供や動物と遊ぶことが大好きで小雪とはすぐに仲良くなつた。

幼い頃から命懸けの戦いを経験してきたが故に全力攻撃がもはや条件反射になつてしまつてしまつており、手加減というものが非常に下手で当初時雨の修行には不参加が決定されていたが何故か小雪相手には奇跡的に手加減が発動していた。

まだムエタイの全てを伝授していないので小雪の身体がもう少し出来上がれば日本に行つてムエタイを教えたいと思っている。

ラムディに引き取られた後は昔飼っていたメーイオを取り取りに行き一緒に生活している為にラムディの家のエンゲル係数は限りなく高い、ドコからどうみても虎。

### 馬 剣星

時雨の紹介で亜巳に鍼(ハリ)、灸、漢方を教えることになつた特A級達人で「あらゆる中国拳法の達人」の異名を持つ。当初は漢方などを教える事をメインにしていたが亜巳の素質に気づき何気なく中国武術も教えるようになりメキメキと頭角を現す亜巳に師匠として入れ込んでいく。

教えている時はセクハラはしないがそれ以外の日常生活では「馬家

の人間は本能の赴くままに生きる！」とカメラに亞巳の肢体を写そうとするが時雨に全て阻止されている。

ついでという事で亞巳以外のファミリーにも内功を施しており秋雨が推奨する肉体改造計画に一枚噛んでいる。

## 逆鬼 至緒

辰子と竜兵の情操教育のために秋雨に呼ばれた「喧嘩百段」の異名を持つ空手、古流空手の特A級達人。

実は女子供に怖がられる外見を少し気にしておりそれをまつたく意に返さなかつた一人を気に入り空手を教える事となる。

辰子と同じ動の氣の使い手として色々指導する反面竜兵には少し違和感を感じている。

## 香坂 八郎兵衛

天使の師匠で秋雨に対武器術を教えた特A級達人。

子宝に恵まれなかつた為か幼い天使を溺愛しており天使の名前を笑う奴は「センスがないのう」といいながら軽く半殺しにするハツチヤけ老人。

まだまだ元気で当分死ぬ予定が無く、老人ネットワークを駆使し天使にとんでもない物をプレゼントする。

## 御神苗 優

アーカムに所属するトップエージェント「スプリガン」であり川神学園1Fに所属する高校生。成績は決して悪くは無いが立場上F組みに組み込まれている、アーカムの経営する学校に入らなかつたのは一種の情報攬乱の為。

臍等の一流どころに師事しておりその実力は時雨と同等でナイフや銃を使つた軍隊格闘技から素手の中国武術まで使いこなす。

入学前日にオーパーツ「メギドフレーム」の回収を行つておりそこで染井芳乃と出会つてゐる。時雨とは臍経由で出会つており今ところ戦績は3勝6敗2分と負け越してゐるが臍は優の潜在能力は決して時雨に劣るものではないと考へてゐる。

染井 芳乃

時雨たちと同じ川神学園1-Fに所属する高校生、その実態は「遺跡荒らしの芳乃」として悪名高いトレジヤーハンター。

口寄せで様々な靈と交信できる靈媒体質で川神に在住している理由は「靈地として安定しているから」との事。たくましい性格で、強い意志と行動力の持ち主。

行動原理は「金」で度々スプリガン等の組織と対立する事もあるが引き際を心得ている事もありあまり恨みらしい恨みは買つていないと本人は思つてゐる。

当初は身体の弱いお嬢様を装い遺跡めぐりの為学校を休む口實にしようと企んでいたがその目論見は初日に失敗してしまつが担任があれだつたり同じように休む人間が多数居た為（優、時雨、悟）特に気にしないことにした。優と休みが高確率で被る為一人は「テキ」いるという噂が立つてゐる。

~~~~~他設定~~~~~

A S E…国際的人材派遣会社でA l m i g h t y S uppor t E n t e r p r i s e、略して『A S E』（エース）と読む。「軍人からベーシックターまで常に一流を派遣する」をキャッチコピーとしており世界中から様々な分野のスペシャリストを集めている。依頼料金は高額だが任務遂行は正確かつ迅速である。登録メンバーになれるのは様々な分野で特殊技能を持った人間だけであり、気に食わない依頼は個人として拒否することもできる。世間一般的の認識では

少し特殊な人材派遣会社ごまりだが社会の上層階級や裏社会では高い評価を得ている。

アーカム…第一のロックフェラーと言われる程の世界的な巨大財閥。その真の目的は、超古代文明の遺産をあらゆる権力から守り、封印し、破壊する事である。超古代文明遺産の研究により、A・M・スミツ等多数のオーバーテクノロジーを実現させている。表向きでは幾つもの企業を経営しておりASEとも提携を結んでいるが裏では遺跡保護の為の私設部隊まであり優や隴達「スプリガン」はそのS級エージェントである。

特A級達人…武術を極め人間というカテゴリーから若干外れた存在（壁を超えた存在）。本来は国家単位での監視が必要だが監視を付けても碌な目に合わなかつた為に現在は半ば放置されており何人存在しているかも解らない。ただしその認定を受けた人物は例外なく近代兵器では到底追いつけない程の無類なき強さを誇る。世間一般ではその存在は川神院や武道四天王、橘兄弟のような存在に隠れておりあまり知られていないが、その道ではそれなりに有名らしい。

## 『武家の方々』

「それではこれから、決闘の儀を始めるヨ!!」

さあ、これからがお楽しみの時間だ。選民意識に囚われたアホを叩きのめしてしまえ!!

ん？展開がいきなり過ぎる？すまんこってす、コレには色々と深い事情がありまして…。いや切欠はすんごにつまんない事だつたんだけど引くに引けなくなつちやいませ。

それはクラスメイト達とも馴染んできたある授業風景での出来事。

いつも通り俺や亞巳はしつかりノートを取り、芳乃は座つてなにやら別の事で頭を捻つており心ここにあらず、優は相変わらず惰眠をむさぼり、悟は仕事で休みとF組りしいといえばらしー授業風景だった。

そこで優に気が付いた先生は白いチョークをそこそここの速度で投擲、しかし優に当たるはずも無く人差し指と中指でしつかりとチョークをキヤッチして盛り上がる俺達クラスメート。それはいつもの授業風景だったのだが少しまずかったのはそのそこそここの投擲を見せた先生というのが武家の出だつたといつ事だ。

この川神という街は江戸時代から栄えていて川神院という武術の総本山？なんて物もある事から土地柄上多くの武家が残つておりその血を継ぐ者も多く、武家や名家といったお家柄は中々馬鹿に出来た存在ではないのだ。武家の生まれの人間はその家の歴史を守る為に生まれたときから代々伝わる武を学び一般では太刀打ちできないような強さを誇る事になる。しかしその武家の出の教師が投げたチョークをF組の昼行灯が受け止めた、そんな噂が学校に広まつてしまつた。

まつたのだ。

内容は「へ～そりなんだ」で済むような内容なので俺や優は気にも留めなかつたのだがそこでマズイ連中の耳に入つてしまつた、そういう組である。S組は成績優秀者で固められた選民意識の高いクラスだ、そしてその中には当然川神出身の武家の間もいる、つまり……

「貴様か、新ハ先生のチョークを受け止めたといつF組の男は…」

彼の名前は武蔵柘榴《むさし》、なんでも1年S組の委員長さんだもうだ。

「ああ、そりだけど…」

「ふん、こんなヤツに俺でも避けれない新ハ先生のチョークが受け止められるはずもないか。テーマだったか、もしくは先生が眼鏡を掛けていなかつたかだな。どちらにしろお前如きが武家の出自の者の攻撃をかわせる筈が無い、今度から功名を上げるにしてもひとつマシな嘘を広めるのだな」

「あ～、なんだ。お前喧嘩売りにきたのか？」

「はつ～俺が、お前に？笑えんジョークだ、そんなものが流行つてゐるのか？」この掃き溜めでは

そう言つて取り巻きと仲良く声高々に笑う柘榴、ある意味すげーなコイツ。少なくとも武家の生まれで武を習つていれば相手の力量くらい解るだらう…

「どこで亞巳、そいつ殺せない」

「まあ待ちなよ芳乃、一いつ切さい手合には相手にしないのが常だ」

「ふん、なんだ女？残念だが俺はお前のような女には興味がない、おとなしくその辺の豚でも捕まえていろ」

「どうかな時雨、そいつバラせないよ」

「おやつは、お前が言われた事じゃないだろ[重口]」

「だから余計に腹が立つんだよ！」

「安心じる、やつはかりはしつかり虎の尾を踏んでるよ」

やつ、やつから頭に血管が浮き出てる「妖精」って名前の割には  
獰猛な虎の…な。

「…オイ、テメー今なんつった？」

「あん？」

「テメーは俺に用があつたんじゃなかつたのかよ？それがなんで芳乃  
を侮辱する事に繋がるんだ？」

「フッ、侮辱だと？侮辱をされたのは我々のほうや。武家の者が貴様  
のやつな下々の者に遅れを取る訳がない。其処にあるよつた尊が  
広まつてしまつたのだ、侮辱以外の何物でもあるまい」

「ああ、そつかよ。よく解つた、ならその喧嘩買つてもいい。」

やつて優は自分のワッペンを机に叩き付けた。

「貴様が決闘だと？面白い！衆人觀衆の下、身の程をプレミアムに解らせてやる！」

そうして柘榴も自分のワッペンを優のワッペンに叩き付けた、これにより優と柘榴の決闘が決まったのである。決闘とは川神学園のシステムの一つでお互いのワッペンを重ね合わせる事で発動する、ようは「タイマンしましょ」といったもので勝負事ならば肉体を使ったものからトランプ等のゲームで勝敗を決める事もある。

そして肉体勝負の場合に必要な教員たちの許可もあり今日の放課後グランドで決闘が行われる事になった。

「しつかしそいつもこいつも暇人ばかりよね、もう学校終わつたってのにこんなに集まつてゐじゃない」

「まあ今噂のF組の昼行灯とU組の武家の人間がやりあうんだからね、興味はそぞられるだろうさ」

「おー、優わかってるだらうけど……」

「安心しろよ、ちゃんと手加減はあるぞ。大事になるとワッヂがマズイからな」

「まあでもしつかり勝つ事は勝てよ、御神苗」

「あれ？ 宇佐美さんも見に来てたんだ」

「まあ決闘といえばトトカルチヨも開かれるし…勝てるときたに買つとかないとな、斑鳩」

「なんだ？珍しいな悟が賭け事なんて」

「いや、先生が勝ち馬に乗つとけつてさ。夜は時々に会話に慣れても流石に学校でまで会話になる訳にもいかないし。だから優、頼むぞ！俺の上食券の為にも…」

「へイへイ、わかりやしたよ」

そんな会話をしてこると反対側から取り巻きの三組の生徒を引かれ連れて柘榴がやってきた。

「諸君ー決闘だ!!!」

その一声に会場となつたグラウンドが一気に盛り上がる。

「よく逃げずに来たものだ、それだけは褒めてやる！」

「そりゃビーサ

「しかしーあまり調子に乗られても困るのでな、少しばかり痛い目にあってもらおう。何も怖いことなど無いこそ？何せお前が気づいた頃には既に勝負は終わっているのだからな。そりゃ「終わったか？」何？」

「なげー前口上は終わったか？って聞いたんだ、悪いが俺はお前ほど暇でもないんでな。そりゃと始めねーか？」

「キ、キサマ…許せんー武家の者に対する口の聞き方とこのものを教えてやるールー先生!!」

「わかつたヨ、それでは一人とも前へ出て名乗りを上げるネ…」

「一年S組、武藏柘榴！」

「一年F組、御神苗優だぜ！」

「それでは尋常に…はじめ!!」

「やべーフレニア」「遅せえ」「ボオ!!??」

柘榴の腹に開始と同時に一気に懷に踏み込んだ優の崩拳が突き刺さっている、といつか柘榴はいきなり両手を振り上げて何するつもりだったんだ？そんな事を考えていると柘榴がゆっくり前のめりに倒れた、衝撃が後に逃げずしつかり身体の中に打ち込む理想的な崩拳だ、流石だな優。

「…ハッ、しょ勝者、御神苗優！」

ようやくシヨックから抜け出せたのかルー先生が判定をくだした、周りはまだあまりの現実に追いついていないらしい。

「どんな武術をやつてるのかはしらねーが素手の芳乃のほうがまだ強いな」

「ちよつと、私をあんなのと一緒にしないでよ」

二人の会話が呼び水となつたのか会場が一気に沸きあがる。

「うおおおお、すげええええ!!」

「なんだ!? 今の見えたか!!?」

「キャーー!! 御神苗くーん!!

「俺の食券がーーー!!!」

様々な声が飛び交う中優は周りに手を振りながらこちらに帰ってきた、柘榴の方は取り巻きのS組の連中に引きずられていつたがままだ丈夫だろう。これで少しは大人しくなってくれればいいのだが：

その考えが杞憂で済んでくれればよかつたのだがまさかこの出来事があんな大事件を引き起こすなんて、この時の俺たちには想像も出来なかつた訳で…

『戦争の切欠なんて些細なもの』

「アレがスプリガンの力です力・・・正直驚きました、あの歳であれ程のクンフーだとハ」

「確かに、少し古く見ておったの。まさか武家の者ですら相手にならんとは……」

「いかが致しまス？」

「まあ今回は学園生活の範疇じやつたから特に問題はないじやろ、ちゃんと手加減もできるよ」**じゅし**

「しかし、他の生徒達が黙つてはいなうでしょうネ」

うむ、ちーとほっかし荒れるかの」

さて、あの決闘の後色々と学園が騒がしくなつてしまつた。F組の生徒がS組<sup>エフ・ジャー</sup>の生徒を一発KOしたという事実はこの学園では非常にショッキングな出来事だったのだろう。

今までS組と言えば学年のエリート、何をやらせても常にトップ！という価値観にヒビが入つてしまつたのだ。もちろんすぐに何かが変わる訳ではないのだが…その火種はジワジワとあらゆる形で燻つていた。

「クソオオオウウウ!!!!私があんな下民に負けただと?!プレミアムな武蔵家の長男たるこの私ガッ?!確かに油断はあったかもしかれん、だがそれでもひっくり返つてしまつような実力差では無かつたはずだ!やはりいきなりプレミアム柘榴フィーバーの様な大技ではなくモモバーンの様な小技から攻めるべきであったか!!」

そんな慟哭の声を放課後の屋上で上げる1年S組武藏柘榴、もぢりんグラウンドで部活をしている生徒にはまる聞こえである。

「しかしあの御神苗 優、武術の心得があつた」と隠していたとは…なんと卑怯な!おかげで無様にも負けてしまつた私は委員長の座を剥奪されてしまつたではないか!許すまじ、御神苗 優!」

そう、あの一戦以来柘榴は求心力を失い(もとからあんまりなかつたが)クラスメートから見放されてしまつて残つたのは取り巻きの枢<sup>じはそ</sup>と猫糞<sup>ねじはな</sup>だけとなつてしまつたのだ。

「おまけにこのフレミアムな私を差し置いてあの座に付くとは…」この恨み決して忘れはせんぞ、御神苗 優! F組共々必ず復讐してやるううううう!!!!

「つてなんか昨日騒いでたみたいだから『氣をつけてね、御神苗君』

「おひ、サンキューな」

「元壁に逆恨みじゃねーか」

「しつかし面倒な事になつたねえ」

「確かに、なんか今日通学して来る時視線がビリヤーに痛かつたよ。

なんか上級生にも見られてた気がするんだけど……」

「氣のせいじゃないわね、なんでもう組がF組に負けたつてのが上級生達にも影響があつたみたいよ。学年構わずS組がF組に対してメンチ切つてたわ」

「選民意識が強すぎるっての問題だなあ、どうするんだ優？」

「俺!? 今の事態つて俺の責任なのか!?」

「まああんたは今や時の人だからねえ、エレガント・クアットロだったかい?」

「凄い人気よね~、さつきみたいに今まで喋らなかつた女の子にも声掛けられるようになつて随分立派になられたわねイケメン四天王様?」

「すごいな、優。ルビガンテみたいだ」

「うれしかねーよんなもん、つづーかよくルビガンテがでてきたな悟」

「とにかくこれからは少し氣を付けないとな、小さないじめがどんな大事になるか判つたもんじゃねーぞ」

そんなことを話していると扉を勢いよく開けて噂の人物が入ってきた。

「ここに隠れていたか! 御神苗 優!」

「隠れてねーよ、普通に教室で飯食つてるだけだろ」

「いい訳なぞ聞く耳もたん…さあ決着をつけるぞ…」

「いや、決着なら綺麗さつぱりついてたよな? 前回

「あれは小手調べだ、下民が! だいたい私たちの会話に関係ないものが口を挟むな!」

「時雨、コイツの顎打ち碎いていいかい?」

「まつて亜巳、こいつのアッブルを口に放り込んだ方が確実だわ」

「お前は学校になんちゅーもん持ち込んでんだ! さつとしまえ!」

「そうだよ、芳乃。それに確かにそれって破片式じゃなかつたつけ? 俺たちも吹つ飛んじやうよ」

「なんでお前そんな事知つてんの?」

「前にバイトで追つかけてた車がそれバラ撒いてね、波戸<sup>は</sup>さん<sup>と</sup>さんがアドバイスくれなきゃ大変な事になつてたよ」

「ええい五月蠅い下民どもめが! とにかく逃げるのか、隠れるのかどつけだ御神苗 優!?!」

「どつちも同じよつなもんじゃねえか! しうがねーな、次で最後だぞ? 俺もそんなに暇じゃねーし。負けてから今のも本気じゃなかつた一つてのは無しだぞ?」

「フフフ当たり前だ、何せ次は私が最初からプレミアムに本気で戦うのだ! 武家の私が勝ち、下民の貴様が負ける。運命とはそうなつていいのだ!」

「わかつたわかつた、で次は何で戦うんだ? UNOか? 人生ゲームか?  
?」

「フツ、そのどちらでも負ける氣はせんが武家の生まれたる私の汚名  
を注ぐのであればやはりアレ以上のものはなかりつ!」

「なんのよアレって?」

「ズバリ… 戦だ!!」

「「「「「は!?」」」」」

「その話、聞かせてもらひうたぞ」

「学園長!? いつたいどこから?」

「氣付いてなかつたのか悟? このじーさんずつと廊下でスタンバつ  
てたぞ?」

「ほう、お主氣付いておつたか。可愛げがないのつ」

「そんな事より学園長! 今の話をお聞きになられたのでしたら私の言  
わんとする事はおわかりですね!」

「うむ、それではここに川神大戦の開戦を宣言する!!」

「「「「か、川神大戦!」」」」

「つてなんだい、それ?」

「ふむ川神大戦というのはじやな川神学園最大最高の勝負方法じゃ。丹沢山中でS軍とF軍に分かれて向かい合ひ、そして合図とともに大将首を狙つて全員で戦闘する。ただそれだけじゃ」

「オイオイ俺たち関係ないじゃんのかめちゃくちや巻き込まれちまつてねじやねーか！」

「フツ、武家の私にとって相応しい勝負方法だ。御神苗 優、ここまで来てまさか逃げるとは言わんだろうな？」

「人の話を聞いてくれ！」

「おもしれえ、この俺達に喧嘩売った事…後悔させてやんよ…」

「アンタも何盛り上がつてんのよ…」

こつして俺達は小さなこぎりをすり飛ばして川神大戦なんていう戦争、ここに狩り出される事となってしまった、全員で締め上げてテンションが落ち着いた優が素人相手に自己嫌悪に陥るのはこの30分後。

~~~~~

「今回の件はかなり強引ではありませんでしたか？」

「仕方が無いじゃん、あそこまで学園の雰囲気が怪しくなってしもうたんじやし」

「しかし武家や名家のプライドですか…」

「面倒くさこのつ…ああこいつた連中はプライドばかり高くて困つたもんじゅワイ」

「落とし所はどのようい？」

「そ、うじゅの、まあ今回の川神大戦で△組が無難に勝てば落ち着くじやろう。人を集めにせよ策を練るうにせよやはり△組が有利じゅるうで」

「しかし、相手はあのスプリガンですヨ？」

「古今東西、戦は数じゅよ。例え戦争のプロといえど単騎で出来る事などたかがしれどる」

この川神鉄心の読みは大きな間違いである、しかしソレを攻めるのは酷な事だろう。なぜなら彼は格闘のプロであつて戦争のプロではなかつたのだから…おまけにスプリガンの優にばかり目が行つていた事も過ちの一つだつた、なぜなら危険度でいえば同レベルの人間がまだまだF組にはいたのだから。

『戦は既に始まつていいのだよ！』

### 「川神大戦迫る!!!」

そういうふたポスターが廊下に張り出されている、川神大戦まで後1週間と期日が迫つており学校中を煽るようにあちこちにポスターが貼られている。

川神大戦なんて大掛かりな行事なのになぜここまで執拗に煽らなくてはいけないのかつて？そりや学生達が盛り上がりたくないからだ、そう盛り上がっていないので。

その理由は簡単、俺達1年F組にやる気が見えないからだ。

川神大戦は学園全部を巻き込む行事で1年S組は早速他の学年のS組に応援を要請し後1週間と迫つた今日までに骨法部、弓道部、相撲部等の有力な武道系の部活まで助つ人に取り込んでいた。

対して俺達1年F組はある宣言以降まったく勧誘には動いていない、当初は2年や3年のF組だったりS組を快く思わないクラスや部活から応援の申し出があつたが俺たちは丁重に断つた。そして日に日に巨大になつていくる組軍を前に応援の申し出は遂に無くなつた。学校の半分近くから構成されるS組軍VS1年F組、結果は火を見るより明らかで誰の目から見ても俺達にやる気が無いと思えただろう。

そんなつまんない勝負に燃えられるはずも無くS組軍のモチベーションはダダ下がりになつてしまい仕方なく学園長がある制度を投入した、序列制度である。これは今回の川神大戦で多大な成果を上げた者を順位付けするといった内容で上位20名には食券や上食券が配布される事となりこれらは両軍の勝敗に左右されないとなつていい。こういったモチベーション維持に学園側は四苦八苦している訳

だが俺達だつて別にやる気が無い訳ではない、今の状況にはちゃんとした理由があるのだ。

それは担任の宇佐美さんの一言から始まった。

「お前ら、川神大戦にはテレビの中継が来るつて知つてたか？」

「げ!? マジで?」

そつ、この川神大戦は学生同士のガチン「戦争」いつつ事でマスメディアが食いつくには十分なシロモノなのだつた。

「うーん、そつなると優や悟はまずいな…」

「私だつて嫌よ、」こんな事で顔がわれるなんて!」

「山本さんに大皿玉食ひつけまつな…」

「百舌鳥さんご殺される……」

「えらい悲壮感が漂つてるねえ、時雨なんとかならないかい? 正直芳乃達がいなけりや話になんないよ」

「うーん、そうだな。よつはテレビ中継がされなけりや問題は無いのかな?」

「ちよつと優ちゃん、アーカムに頼んでマスク!!!に圧力かけてもらつてよ」

「ざけんな、余計大事になるわ!」

「どうじよひか時雨、俺は今回マシンに乗れないだろ」から役に立たないけど優と芳乃は……」

「いや、そっちの方は何とかする、マスコミも……なんとかなるだろ」

「いつたいどうするんだい？」

「なーに簡単な事さ。マスコミなんてのは勝手な連中でな、自分たちの興味がある事なら相手が嫌がろうとも首を突っ込んでくるが興味の無い事になると伝えなきゃいけない事実にも関心を持たないもんなんだ」

「と、こいつ」と云?

「テレビで中継や取材するまでもないって感じにしてやればいい」

そうして俺が立てたプランは簡単な物で何処のクラスにも声を掛けないといった事だった。1クラス対学園の半数、確かに興味は引くが1クラスがただの落ちこぼれクラスなら結果は火を見るより明らかで傍から見ればただのイジメにしか見えないだろ?、そんなものを公共の電波で流せる訳がない。

2週間後、案の定テレビ局の中継の話は流れ他のマスコミの数も激減したそうだ。その結果が△軍のモチベーションの低下に拍車をかける事になり学園側が四苦八苦する羽目になつたみたいだが俺たちの知った事ではなかつた。

さて、俺達1年F組はただ勧誘に動いていなかつただけで何もしていなかつた訳ではない。当初は俺のプランに不安がつっていたクラス

メート達も開戦1週間前の今ではすっかりヤル気満々だ、元から氣に入らなかつたS組達をギャフンと言わせる！そういうた自信がクラスマート達から溢れていた。

川神大戦の会場がただつ広い場所なら確かに数の有利が効くだろう、しかし決戦場は丹沢山中という山奥でフィールドの6～7割が森、広い場所といつても中央の川が流れている川原だけで川に寸断された東西は山になっている。つまり戦う場所と方法を考えれば少人数でも十分戦える、おまけにこの川神大戦のルールは単純なだけに穴だらけでいくらでも付け入る隙があつた。

「さあー…ということで今日も楽しい楽しい講義のお時間だ、俺たちが教えられるのは今日で最後だから耳かっぽじつてよく聞けよ学生諸君！」

「今日は最後に皆の仕上がり具合を私達一人でチェックしようと思つてゐる。自分で言つのもなんだが、君達の仕上がり具合は私達の目から見ても中々のモノだ。楽しみにしていろよ

俺達F組は開戦前最後の日曜日の今日、とある県境の森の中で川神大戦前最後の仕上げに入つていた。特別講師一人の話を皆が真剣に聞いている、この仕上がり具合なら問題ないだろう。山の方では音の軽いエンジン音が響いてゐる…準備は万端だ、待つてろよS組！

『数を並べにむけの方法が一番だよ』特別講師』

「諸君…いよいよ戦いの時が来た!」

つこにこの日がやつてきた!につくきF組に私の手で天誅を下す時が!川神大戦を持ち出し徹底的に叩き潰すつもりだったが奴らは勝負を捨てたのかまったく動こうとせず逆にこちらの士気が下がってしまうというハブニングになってしまった。

学園長たちの尽力によりなんとかグダグダにならずに今日という日を迎えた!おのれ…F組め、なんと卑劣な。こちらはクラスメイトに頭を下げてなんとか大将になつたといつのに…許すまじ、御神苗 優!

「さて、我が軍の陣形はどうなつている

「2年S組が北東の森に、3年S組が北西の森、武道系の部活は中央に陣取つていろよ」

「ふむ、では我々も中央に移動するか」

「え?「レだけ攻め手がいるんだから俺たちは後方に陣取つていたほうがよくなないか?」

「馬鹿者…」の戦を始めたのは私達だぞ?このまま後ろで終わるまで動かずについたらソレ恥だ」

「そ、そつか…じゃあ」

「つむ、開始と同時に全軍前進だ！数で押しつぶす！」

そうしていふと前方で開始の合図となる花火が上がった。向こうの大将首はもちろにおみなえゆつだ、その首はかならず私が貰い受けるー。

「さあ 制圧前進！」

しかし川神大戦の火蓋は切つて落とされた。

「あ～かつたり～」

「しょうがねーよ、俺だつてこんなしょぼい川神大戦になるなんて思つてなかつたさ」「

こちらは北東の森を北から南に向かつて前進する2年D組である

「まあ数多く討ち取れば序列に入れる、そうすれば学園内で名前も売れるし食券も手に入る。気張つてこいつや」

「獲物の数は少ないから最悪見方同士で奪い合いになつちまつな…早く行こ～うぜ！」

そうして2年D組の生徒達は小走りに森の中を駆けていった、すると…

「あー見つけたぞ！」

「げ!?」

「もう、来やがったー皆構えろ！」

田の前には竹刀を装備したへっぴり腰の4人の1年F組の生徒がいた。

「へつそんなもんで戦う気かよ！」

「！」つやいいや、早速やつちまおつばー！」

「一番槍頂きいい 「ガサガサガサッ！」 イイイイイイイイ !!??」

「?!えいし」「グワッ！」 タアアアアアア !!!!」

そこには先程F組の生徒に突っ込んでいった十数人の2年S組の生徒達がロープでぶら下げられていたり縄で出来た網に2~3人程まとめて捕まっていた。さらに後方からも叫び声が聞こえる、どうやら同じように大勢の人間が罠に掛かってしまったようだ。

「せんぱーい、どうしたんっすか？ソレって猿用の罠ですよ？」

「ヤレヤレだぜ、まさかエリートを自負するS組様が獣用の罠にかかるつちまうなんてな。お~お~、向こうにじや猪用の罠に吹っ飛ばされてる奴もいるな」

「お~『』メとつとけ、『』メ」

「とつあえず額に肉つて書いとくか

「ヤ、ヤメロ!!」

さつきまでへっぴり腰で泣き顔だったF組の生徒が今ではふてぶてしくじりを眺めている、そのニヤけた顔は相手の神経を逆撫でするに十分なものだった。

「卑怯だぞお前たち!!」

「そりだそりだ! 正々堂々と戦え!」

「ハ? あんたら何言つてんの? これって戦だぜ?」

「相手を睨にはめて戦力を削る、常等手段でしょーが」

「おい、こんな奴らほつといて次に行こう。次のポイントはNE 8だ!」

「『ラジヤ』了解!!」

「お、おい待て!」

「降ろしていッカエ~!!」

その虚しい叫びは山にこだましたがそれに応える者は誰一人としていなかつた、この山に迷い込んだ者は皆同じ末路を辿る運命にあつた。

そのころ西の山では3年S組が南に向けて進軍していた。

「ハア、1年の不甲斐なさにも困ったもんだ」

「まつたくだ、F組なんぞに泥を塗られあつて

「やつさと終わらせよう、相手はたかが1年のF組だ

「やうね、やつさと終わらせましょくか」

やつこつて3年F組の進行を止めたのは染井芳乃であった。

「貴様は、染井芳乃！」

「あら、私つていつの間に有名人になつたのかしら？」

「貴様達は戦といつもの解つていない、戦とは戦う前から既に始まつてしるのだ。さぞまら1年F組の情報は既に我等の手にある」

「お前は1年F組の幹部的な立場にあるな、馬鹿が…のこと俺たちの前に現れやがつて！」

「女一人で俺たちを相手に出来るとか本氣で思つてしるのか？お前を倒せばF組女子は壊滅的なダメージを『えられぬ』

「痛い目みたくなかったら大人しくしな！」

そう言つて数歩後ろに下がつた芳乃に向かい勢いよく飛び掛つりとしたところで…

「パカッ」

「…………え？」

「バイバイ、お馬鹿さん達」

「サドサドサツー」という音を立てて落とし穴に落ちていった。

「痛たたた、おこせつせとどこでくれ！」

「つまつぱ、泥が口の中に…」

「うちの男子もやるもんね～、たつた1週間で大人が5～6人は入れる落とし穴を幾つも掘るなんて。これも特別講師のおかげかしら？」  
「何故だ…」こはなつきまでお前が立っていたはず！」

「ヒリーーって言う割には頭がおめでたいのね、私一人なら大丈夫でもそこには大の男が5人も6人も乗れば落ちるに決まってるでしょ。ソレベラの細工はできるわよ」

「まさかお前たちの辺の森一帯に…」

「そのまさかよ、さつきあなた達も言つてたでしょ？ 戦は戦つ前から始まつてゐつてね」

「染井さん…」いつも終わつたわ～！」

「ホント馬鹿よね～、少し弱弱しく見せたら見境無く突つ込んできたわよ～」

「落ちた時のあの顔」

「あ、それじゃあ口にも蓋をして次に行きましょう！」

「そうね、後方はどうなつてる？」

「流石に警戒してゐみたい、迂回してこちらに向かつてゐるわ」

「なら、6から9が使えるわね、それじゃあ先輩方や」「じがくへ  
大人しくしておこへくださいね」

「おこーー本氣かお」と「バタン」

上から木の板で塞ぎ、土をかぶせて田印の旗を立てておく、少し隙間を開けておいて空気の確保も忘れない。この辺りの気配りはさすが女の子だ、次のポイントに移動する姿はまるで山岳隊のようだが。

「本当に素人を一ヶ月でコロまで鍛え上げるなんて、優ちゃんのおじ様といい「サイレントウルフ静かなる狼」といい流石だわ。罠や隠密行動に特化しちゃってるけど」

そうして芳乃は優と時雨が特別講師の二人を連れて来た時の事を思い浮かべながら次の獲物が待つポイントへクラスの女子たちと向かった。

~~~~~

「それで、マスク<sup>マスク</sup>に対する手段はわかつたけど、何するの? ウチのクラスだけで戦つって言つても限度があるわよ?」

「なーに簡単な話だ、向こうは数に任せた人海戦術でくるだろ? だからこちには罠をはつてやればいい」

「罠?」

「そう、ちょっとこの川神大戦のルールを見てくれ」

そう言って時雨は一枚の紙を4人に見せた。

ルール1・尖った武器は禁止、武具はレプリカ、または峰打ちで戦う

ルール2・拳銃や爆弾の禁止、矢は先端に指定の処理が成されれば有効

ルール3・相手捕虜への尋問、拷問は御八度

ルール4・学校内の人間なら誰でも助つ人可能

ルール5・逆に学校外の人間の助つ人枠は50人まで

「何コレ？ ルールってまさかこれだけ？」

「うん、そう」

「何か問題があるのかい？ 芳乃」

「問題も何もコレ戦う人間の事しか記載してないじゃない」

「どうじうことだ優？」

「つまり六だらけってことだ、戦場となる丹沢山中に関しては一切触れられていない」

「といふことは？」

「道具持込放題の罷しけ放題だな」

「これなら一クラスで二〇〇人以上でも相手にじきるわね」

「ああ開戦まで一ヶ月だから俺と芳乃でしゃべりやつちまつが」

「馬鹿タレ、一ヶ月間に誰も来ないなんて保障はないんだ。下手したり騒ぎになるわ」

「じゅあビツするんだい？」

「Jの川神大戦はJ組対F組なんだぜ？ 向こうが人海戦術でくるなりJも総出で当たるまでだ。なあ？ 皆」

時雨が後ろを振り返るとクラスメート全員が時雨達の後ろに立っていた。

「水臭いぜ、御神苗」

「そりだそりだ、俺達はとっくに巻き込まれてんだからどうせなら一緒に楽しませようよ。」

「私達も何か手伝える事無い？ 染井さん」

「亞で学校中を驚かせてあげましょうよ。」

皆がそれぞれ声をかけていく、優や芳乃是今までこいつったクラスにかかる事はあまり無かったので今の状況に芳乃是少し戸惑っている、優は涙目になつて友達にからかわれており、悟は物知り顔で頷いていたが心境は優と似たようなものだった、亞巳はクラスの女子に囲まれて顔を赤くしており、そんな亞巳を眺めて可愛いもんだと時雨

「この状況を楽しんでいる。

この川神大戦が問題児の集まりとされるF組が一致団結する切欠となつた、時雨達はこの仲間たちと共に勝利を得る為に自分たちに出来る最大限の仕事をしようとして心に誓つたのだった。

~~~~~

「さて、先日言つた通り数の不利を覆す為に今日から農の勉強をしたいと思う。その為に今日は皆の特別講師となつていただく方に来てもらつてるので紹介する、高槻巖さんと御神苗隆さんだ！」

「今日から君たちに農の張り方と山での動き方を教えることになった高槻巖だ、単身赴任中のサラリーマンだがよろしく頼むよ」

「冒険家の御神苗隆だ！名前で解るだらうが優の親父をやつてるが、クラスメートなんて事は関係なくビシビシ扱いていくからそのつもりでな！」

「『よろしくおねがいします』

「ねえねえ優ちゃん、時雨」

「びーした芳乃？」

「優ちゃんのおじちゃんが冒険家で農に詳しきのは百歩譲つて置ことへとして、時雨が連れて来たあの怪しきサラリーマンは誰？」

「ん~「サイレントウルフ静かなる狼」って知ってるか？」

「ブツ!?」

「ん？ それって高槻おじさんのおだ名かなんかかい？」

「ああ、親父達は風ウイングって呼んでるけど黙に凄く詳しきてな、今回の講師にはつづつけだ」

「あ、あんたねえ…。静かなる狼サイレントウルフって言つたら世界最高峰の傭兵ジヤじゃない！ そんなのに一般高校生の黙の講師なんてやらせてんじゃないわよ…」

「あの人ガ艶が言つてた風ウイングか…あれじゃあ親父の影がつゝ「ガツンッ！」 いでつ！」

「誰の影が薄れるんだ、誰の。まつたく、珍しく泣きついてきたかと思つたが…」

「まあまあ、隆その辺にしておいつ。ハツキリ言つて黙に関しては君の方が腕は上だ、私は戦場となる山中での行動について重点的にやうかと思つ」

「もうだな、でもお前の黙も設置時間の短さや簡易性と二点では俺のよつ彼らに向こてるかもしれん。そつちの方も頼んだぞ」

「…確かあの一人つて今日始めて会つたのよね？ なんであんなにフレンドリーなの？」

「馬が合つたんだろう？ ビツチも突き抜けちゃつてる感があるからなあ」

「まあクラスの子達はあひらのむ一方に任せるとしてあたし達はビツチすんだい？ それに話はこひな時にビツヒニツしたんだい？」

「話にはAISEビルにある物を持ち込みに行ひてもらつてゐる。最初は俺が用意しようつがと思つたんだが自分の事だしなんとかするつて聞かなくてな、アイシが食費を削つてしまで金を圧迫つてしまふんだから相当な覚悟だ」

「なんだそりや？」

「とにかくトローリマスクが少ないのでひつてある程度本氣でいこむがほんの少しあるからな、話遊びせとへのは勿体無い」

「じゃああたし達がやる」とは…」

「うさ、おお暴れ」

## 『けつたぐつマシーン誕生秘話』

川神大戦が開始してまだ10分と経っていないが両サイドの森から悲鳴が聞こえた。

「ふむ、先輩方はすでに敵と接触したようだな。派手に暴れてるよつだが…下品な叫び声だ、さすがはF組といつたところか」

「それにしても随分と声が多くないか、柘榴さくろ？」

「まさかとは思つが…な、よし！」は両サイドへ援軍を「人の心配して

る場合かよ」ム…キサマは御神苗 優!!」

「お前たちの相手は俺達3人が引き受けさせてもいいぜ」

そういつ優を中心にして両サイドに並ぶように時間と重合が軍の前に立ちはだかる。

「キサマ…気は確かに？たつたの3人で私たち1年S組を含む各武道派クラブ総勢80名を相手にしようとしたのか、それは我等に対する冒涙と取つていいのだな？」

「普段のお前のF組に対する態度は冒涙じゃないってのかよ？」

「無駄だよ、優。それが解つてればここまで大事にはなつてない」

「そうだよ、だからそんな相手には身体に結果として教え込んでやらなきゃいけないのさ」

「フッハッハッハッハッハ!!!貴様たちが私たちに教えるだと？身の程知らずが！仕方が無い、私が貴様らを「待て、柘榴」ええいーもつきから私の台詞だじを遮るんぢやない！」

「いや、この戦お前が万が一にでもやられたらその場で終わっちゃうからやつぱつ後ろにいる。身の程を弁えさせるのはその後でもいいだろ」「柘じほや…わかつた、しかし御神苗 優だけは残しておけよ？流石に大将

首は自分の手で取らねば氣きが済まん」

「ああ、大船に乗ったつもりで待つていろ」

そうこうで柘榴は集団の後ろの方へ向かっていった。

「わで、待たう」「ズドンー」「おふう!!

ズザーーーー!!といい音を立てながら柘榴は交通事故にあったよつに横つ飛びに吹つ飛んでいく。

「遅いんだよ、この鈍間<sup>ノロタ</sup>が。待ちくたびれちゃつたじゃないかい」

「だ、そうだ。さつさと始めましょう、先輩方」

「さつきの鉄山靠<sup>てつざんのり</sup>タイミングバッヂリだったな、亜巴<sup>アバ</sup>って中国拳法やつてたのかよ?」

「針灸<sup>モノ</sup>のついでさね。さあ、さつさとはじめるよ!!」

そうして川神学園武道派クラブ + 1年J組とF組武道系トリオの戦いの火蓋が切つて落とされた!!

「向こうでは派手にやり始めたみたいだな…さて、俺も仕事をしないと」

俺は今回の愛車、ステイックボードのゴーペッシュビッグフットのエンジンをいた。いや「コイツは今回限りではない、俺が始めて自分の金で買った始めての愛車なんだ。初陣で見つとも無い真似は出来ないな。

当初は時雨が用意してくれる予定だつたがそこはあえて断つた。俺だって1年F組のクラスメートだ、あんなふうに言われたらかっこ悪いところなんて見せたくない。だからなけなしの貯金をはたいてコイツを買った、後悔はない。

乗り物に乗るつて事については学園長も当初は騎馬を予定していたらしいが市に断られたそうで泣く泣く諦めたそうだ、しかし時雨はそんな学園長に「レの仕様許可を申請して見事許可が通してきた。恐らく所詮おもちゃの域を出ないと判断したんだろうと時雨は言つていたがコイツはもう生まれ変わった、今では頼もしい粗棒だ。

「レーベルペッジ、お前に生命を吹き込んでやる!!」

~~~~~

「<sup>はつね</sup>初音ちょっとといいか?」

私が一人でASEビルの駐車場兼整備スペースでジープを弄つていると年下の仕事仲間がやつてきた。

「あら、珍しいわね。あんたが仕事でもないのに ASEビルにいるなんて」

本当に珍しい、仕事以外で斑鳩<sup>コイツ</sup>が ASEビルにいるなんて。明日は雪でも降るんじゃないから?

「ちょっとあるマシンを少しいじつて欲しいんだが…」

「ん? 依頼つて事?」

「いや、実はもう金が無くてな。出来ればお願ひつて事で…」

「ハア…あんたねえ、それつてあんたの私用になるんでしょ? だつたら流石にここでは不味いわよ、私だつてまだ仮採用なんだから下手な事するところちがクビになるわよ」

「コイツが私用でマシンの改造? 一ヶ月のエングル係数が日雇いのバイト代より低い「コイツが?」

ヤバッ、雪どころじゃなくて槍が降るかも…。

「そりが、まあ…そりだよなあ」

「うひ、そんな田で見ないでよー仕方ないじょ?」

まつたぐ、「マイシとわたりマシンに乗つてゐる時はムカつくくらいに落ち着いてゐるの」「うこう時ほせやけに年相応とこづか幼く見えちやうわね…。

そんな馬鹿な事を考へるとHレベーターの方から聞きなれた声が聞こえてきた。

「唔、やはり来てたか」

「田中鳩もす!」

「時雨から話は聞いたぞ、なんでも山の中で戦争!」<sup>ヒトをすみのり</sup>いこな

はあ? 山の中で戦争! ついで…仕事で散々やつてゐるくせにオフでまそん事しなくても…

「ハイ。で、俺も皆の力になりたくて。だから、マイシを自腹で買いました!」

そうして斑鳩が大きめのバッグから取り出したものは…「コレって

!?

「コレってステイックボードじゃない!こんなサスペンションもついてないようなモンで山ん中走ろつと思つてたの!」

「いや、だからその為の改造を初音に頼もつかと思つたんだが…」

イヤ、改造も何もこんな物ぢつこひつて言ひのよ…

「断られた、と。まあ初音君の対応は正しげ、そりこつた公私の分別

は出来てしかるべきだ」「だめ

「そうですね…」

「（ふむ、しかし今回の件は話題）とつては大切な事になるだらつ…仕方ない）おこ、あと」「話せさせてもうつたが、坊主…メイゼル博士?」

「？」

田舌鳥さんが何か言おつとしたといひで田舌鳥さんの後ろからまた声が聞こえてきた、あんな人ASEビルにいたかしり。

「あ、あなたは?」

「ふむ儂はメイゼルと言つてな、アーカムでしがない科学者をやつとする老いぼれじやよ。ASEビルには依頼があつて来たんじやが、田舌鳥君がこゝに来るとこつ話じやつたから足を運ばせてもらつたんじや」

「はあ…」

「友達の力になつたいと面と向かつて言い切るとは中々気持ちのいい青年じやわい、ワシの周りの若い連中もそれくらい素直だつたらいいんじやがどいつもこつも可愛げがなくての」

「あの、メンゼル博士?」

田舌鳥さんが氣後れするなんて珍しい…つてこつも初めて見るわね、そんなに偉い人なのかな?

「そのおもぢやで山の中を走り回りたいという事じやな?」

「あ、ハイ。出来れば川原も走れるようにしたいんですけど…」

「あんたねえ、それじやあボディ自体に手を入れなきやいけないじやない。おまけに市販のエンジンじゃ悪路を走りきるパワーなんてないわよ?」

「マイツ、普段私たちメカニックがどれだけ苦労してマシンを改造してゐるのか解つてゐるの? 後でシメとかないと。」

「うう、やつはわかれるとやつぱつ無茶っぽかつたかな」

「馬鹿やん、昔こいつに無茶をせんとどうする。その田舎鳥痴なぞ今までこの落ちつことるが世は無茶に服着せたよつの奴だつたんじやぞ？」

「え、田舎鳥痴やんが!?」

今の田舎鳥痴さんは全然イメージ出来ないわね…

「勘弁してください、博士」

「まあいいわい、じゃあ悟郎。金が無くてASEのヒージントに頼めんならアーカムがソイツを預かう。なーに一週間で形にしてやるわい」

「え？ アーカムって遺跡を研究したりするとこりじゃなかつた？ つていうかあるおじいさんがステイックボードの改造なんてできるの？」

「ホントですか!? ありがとうござります!!」

「博士、いいんですか？」

「別に構わんよ、この間もつむの若このにAM<sup>プレセント</sup>スースを贈つてやつたばっかりじや。コレへりこなら問題にもならんよ」

「む（こと）ひを持つていかれてしまつたな）…悟、お前がクラスメートの為に参加するなら俺も文句はいわん、だがASEドライバーの名に恥じるような真似は許さんぞ」

「ハイ！」

「へん、田舎鳥痴さんもまさかじやなかつたみたいだし改造くらいしてあげればよかつたかしり～まあこいつ、終わつたら悟に一度見せてもらおう。

そうして悟は身体能力のデータを取るとかでおじいさんに連れら

れて行つてしまつた。

「良かつたんですか田中島さん？」

「構わんさ、ガキの喧嘩には過ぎた物になるだらうが……流石に空は飛ばんだるう」

「……は？」

その後アーカムの技術の粋を集めて作られたステイックボードに私が驚愕し3日程寝込んだのはまた別の話…

## 『激戦！中央戦線!!』

「つたぐ、暑苦しいねえ！」

あたし達が戦い初めて最初こそあちらさんも戸惑いというか大人数で3人を相手にする事にためらいがあつたが今じゃ全員が血眼になつて襲い掛かつてくる。しかし気に食わないのは…

「なんでテープばかり」うちに来るんだい！」

そう、あたしが相手にしてこるのは全員相撲部の連中だ、どいつもこいつもマワシ姿で張り手やブチかましを狙つて突っ込んでくる。それらを化勁かけいで受け流しすれ違いぶ厚い脂肪の塊に漫透勁しんとうけいを通して意識を奪つていいく、しかし「ヨイツ等ときたら…

「まさかわっしが率いる相撲部が全員一人の女子おなじにやられてしまつとは」

「ああ、ここからが一人でも本気で来てればもう少しマシな戦いになつただろうねえ」

「我が相撲部がこの戦に真面目に取り組んでいないと申すかー女子といえど承知せんぞー！」

「じゃあ鼻の下伸ばしてこやけた面しながらあたしの身体を触るつなんて魂胆こころが!!」Hハだつた「コイツ等はなんだつたんだい？」

「フン、なんじゃそれは。お主あれか? 最近多い『じこしきかじょう』つむぎいつやつか?」

「あ、あ?」

「お主がなんと云おうと、わしら相撲部にそんなやましい気持ちなどかけらもあつやーせん!」

「……」

「じゃから例え張り手を出した時につかり胸を触つてしまつたり、

鰯折りをした時にたまたま胸に顔をうずめてしまってもそりゃ事故じゃ。仕方が無い、ああ仕方がないのつ

ブチツ

「……そつかい、とりあえずアンタが死にたいって事だけはわかったよ」

「ぬうお主はあれか、最近流行の“つんでれ”つちゅうやつじやな？ぬふふ、確かにつんつんしとるのう。だが安心せい！わしの身体はそんなモノすらたやすく受け入れられるようだ大きくなつとるじゃ！」

そう言つて脂肪の塊は両手を広げて仁王立ちをした、恐らく懐に入つたあたしを鰯折り改めセクハラで迎え撃つ氣か。周りがあたし達の傍に来ないのは邪魔になら無い様にしてるか関わりたくないかのどちらかだらか、まあどちらにしろコイツは殺す！

「お主はさつきから張り手を使つてある所を見ると隠れ相撲ファンのようじやの、じゃつたらこの戦が終わつたあかつきには相撲部のまねこじやあにしてやつて「黙りな」ん？」

「もう口を開くんじやないよ、豚が。冥土の土産に教えてやるよ、あたしがやつてるのは相撲じやなくて中国武術でね。今までやつてたのは浸透勁しじんとうけいつていう技さ、手加減して意識を奪うんであればそれでよかつたんだけどねえ……あんたにはとつておきをくれてやるよ」

「オオオオオオオオオオオオ……

特殊な呼吸法であたしの身体に空気を入れ横隔膜を振るわせる。イメージは拳銃、あたしは今からあの的に銃弾をぶち込む。あたしの気迫に気付いたのか顔を真っ青にしてるが今更遅い、

「コイツハアタシヲオコラセタ。

次の瞬間、雷のよつに打ち出された拳は脂肪にめり込み相撲部部長は蹴られたサッカーボールのよつに一直線に吹き飛んだ。

「聞こえてたら覚えておきな、あたしの身体を抱いていい男はこの世にたつた一人しかいないんだよ。そう、たつた一人しかね…」

そうしてあたしは戦場へ戻つていった、今のを見てすっかり戦意を喪失したのかしらないが関係ないね。アイツがまだ戦っているんだからあたしが休むわけにもいかないさね。

(ここから、中々…)

それは戦い始めてから少し経つてから氣付いた事だつた、俺に襲い掛かってきたこの骨法部は中々どうして鍛度が高い。最初骨法部と聞いたときは正直珍しいと思つた、骨法とは日本に昔から伝わる武術の一つだが空手や柔道の影に隠れてかなりマイナーな武術になってしまつてゐる。それがいかに川神学園とはいえ高校の部活に存在すると聞いたときは驚いたものだ。

(「いや指導者が良いみたいだな、最低限の基礎はできるみたいだし…やつきから視線を感じる、あの人人が指導してゐるのか?」)

そして視線を探りながら次々と骨法部員たちを締め落としている

く、幸い彼らが着ている胴着は俺が修行のときに使う柔術の胴着に似ているため制服や体操着より勝手が良く腕一本で締め落とす事ができる。

そして最後の一人を残して全員を一箇所に固めた、戦いの邪魔にならないように。

「素晴らしい動きだ。君は柔道…いや、柔術をやっているのかい？」

「あなたですか、さつきから俺の事を凝視してたのは。あんな熱い視線を送られたのは久しぶりですよ」

「いや、すまない。まさかこの学園に君のような男がいたとは思わなかつたね、ついつい見惚れてしまつた」

「『』覽の通り部員の皆さんには眠つていただきましたが… 実際は思つたほど簡単ではありませんでしたよ、基礎がしつかり出来いた。指導はあなたが？」

「本来なら不甲斐ないと嘆くところなのだろうが、君に褒められたとなると正直嬉しいよ。ウチはまだ創部3年目、つまり私が立ち上げてね。顧問の先生は飾り程度で私が部員達の指導をしてる」

「なるほど、あなたも武家の出とこつ事ですか？」

「いや、違うよ。ふむ、周りの場も硬直しすぎだようだし少し自分語りをしてもいいかな？」

「ええ、気になりますのでお願ひします」

「私は地方の地主の家に生まれた次男坊だ、まあ名家とまではいかなくともそれなりに対面を気にしなくてはいけない家だった。だが心配なんてしまいなかつたよ。兄が出来る人でね、親の期待を一身に受けても動じない人だった。

兄はなんでもこなし村の人間からの信望も厚く親にとつては最高の息子だつただろう、だからかは知らないが私への感心は周りが哀れむくらいに薄かつた。それこそ私が家出をしたのにも気が付かない程に、ね。」

「……」

「ああ気にしないでくれ、私はその事を悲しいとは思っていない。そ

うでなければあの出会いは無かつたのだ、寧ろ感謝したい程だよ

「あの出会い？」

「そう、私の生涯最初で最後の師との出会いさ。私は夜の山の中に入つてね、不思議と怖くなかった。今考えれば皆の中で孤独を感じるよりはマシだったのかもしない、そして何も考えずに森の中を歩いていたときに熊に遭遇してしまった。流石にその時は恐怖したよ、今まで周りにいなかつた存在だったしね。そんな時に助けてくれたのが…」

「骨法の師…」

「ああ、の方は、最近コイツに獲物を取られ続けていて困つてたところじゃつた、ありがとうの小僧」と声をかけて来てね、恥ずかしながら泣いてしまつたよ。私に哀れみや憐憫以外で声をかけてくれたのはの方が始めてだったから。それから私はの方に泣きつき熊を倒したこの骨法を教わったのだ」

(熊を倒せる達人…下手したら特A級か)

「最初の頃はの方も直ぐに飽きたと思ったのだろう、だが私は始めて人から何かを教わると言う事に陶酔してしまつてね。今まで枯れていた自分の人生に水を与えるように骨法を己が身に叩き込んでいった」

「なるほど、他の部員達の基礎が出来ていたのはそこから来た指導ですか」

「ああ、本当なら川神学園にの方を招く事ができたなら良かつたのだが。実はその生活は半年程で「師の失踪」という形で終わりを迎えてしまつてね、私は泣く泣くあの家に戻り一人で骨法に磨きをかけていたわけだ。幸い師が残してくれた骨法に関する書物があつたのでね」

「失踪…？」

「いや、書置きはあつたんだ。いかんともしがたい理由の為お前の傍を離れる、強くなつたら追いかけて来い」とね、故に私は己を磨くた

めにこの地に来て師の骨法を練磨する為に部を立ち上げたしだいだ

この人の師が特A級達人ならかなり面倒な厄介事に巻き込まれた可能性が高い、それにしても骨法の達人が残した書物か…超読みてえ!!

「先輩、その師が残した書物つてヤツなんですけど…」

「フフ、その顔を見れば解るよ。君みたいな武道家には是非にも読んで欲しい」ところなのだが…私も部の部長として部員たちの仇を取らねばならない、骨法部は家に見捨てられた私にとつて家族の様なものだ。故に私に勝つ事が出来たらお貸ししよう

「ありがとうございます」

「気が早いね、もう勝った氣でいるのかい?」

「いえ、そつちじやなくて…先輩の話を聞けてよかつたと思つたので」「ここまで話をしたのは君が始めてだ。部員達には内緒にしておいてくれよ、恥ずかしいからね」

そのとき部長の後ろにいた骨法部の部員の固まりが少しじくついに動いた事には気が付かなかつたみたいだ

「さて、それそろ始めようか

「ええ」

先輩は骨法独特の動きで横に流れるように動き出した、朧の動きに通ずるところがあるか…

「骨法部部長、安藤 防人」

「岬越寺流柔術 岬越寺 時雨」

「こや尋常に…勝負!!」

(これまで本当に今まで師がいなかつたってのか!?)

先輩の攻撃を捌きながらぼやく、間違いない弟弟子のレベルは超えて  
いる。準達人クラスってところか、それも上玉だ!

「私の攻撃をこれほど捌くとは…悔しさよりも喜びが勝るのは何がそ  
うさせるのか!」

そういうて先輩は次々と技を繰り出す、骨法なんて親父から話しか  
聞いてなかつたもんだからその独特的のリズムを崩せない。

「どうやら君の師は我が師と同じく武術の極みにいるお方のようだな  
！そんな君が羨ましい！」

「強くなつたら会いに行つていいんでしょう?ならさつさと会いに  
行つてくださいよ…俺がお墨付き出しますから!」

「そうか、ならば君を倒して土産話に持つて行くとしよう!」

先輩は手数で攻めてくる、おまけに手を引っ掛けでコパンの要領  
で打ち出される掌打は一発一発に威力があり速射砲のように打ち出  
されてくる。俺は即座に制空圏を広げる

「ムツー私の突きが完璧に!」

「俺の領域に入るものはすべからく撃墜させていただきます  
「だがつ!!」

「…ウチの親父、そいつた達人の情報に少し詳しいんで何かわかつ  
るのにはほぼ同時だった。

「…ウチの親父、そいつた達人の情報に少し詳しいんで何かわかつ

たら情報回しますね

「ソレが私の勝利への報酬かい？」

「いえ、これはさつきの話のお礼です。俺に勝つたら…仲見世通りで  
くすもち奢りますよ」

「そうか、ソレを聞いて負けられなくなってしまったな。あそこのく  
ずもちは大好物だ」

次の瞬間、先輩の徹しが通る一拍の前に俺の小手返しが決まった。  
先輩はその一撃に賭けていた為に受身は取れなかつた…

「……まいったな、無拍子とは」

「紙一重ですよ、少しでも遅ければ完璧に徹しが決まってました」

「自分で言うのもなんだが…アレほど完璧な徹しを打てた事は今まで  
一度も無かつたかもしれない」

「俺はあの体勢から何千何万と投げて投げられてきました…」

「…そうか、ならば随分とぶ厚い紙一重だったな。私もまだまだ修行  
が足りん…」

「大丈夫です、先輩はまだまだ強くなれますから。さつきも言いまし  
たけど俺のお墨付きです」

「そうか、それは心強い。……だけど今はもう動けそうにない…な、私  
達を負かしたんだ…負けるなよ」

そういうて先輩は目を閉じた、受身も間に合わずにモロに投げられ  
てしまつたからな。その先輩を介抱しようと一人の女性部員が固ま  
りの中から這い出でてきた、さつきの先輩の話を聞いていたのか目  
が真つ赤だ。先輩の頭を膝に乗せこちらに会釈をしてくれた、もう大  
丈夫だろう。

「負けませんよ、俺には骨法部のあなたたちのように強い絆で繋がつた味方がいま

すから

ええい！我が軍は何をやっている！左右の森からは相変わらず悲鳴しか聞こえてこないし中央もあれだけ人数がいたのに既に劣勢に立たされている…やはりここにはこの私、武蔵柘榴が前線に赴くしかあるまいな。しかし後方の援護部隊である弓道部は何をやっているのだ、一向に仕事をしたないではないか！

（15分前）

「主将、中央の部隊が戦闘に入りました」

双眼鏡を覗いていた2年の部員が報告にきた、まったく馬鹿らしい話だ。相手はたった一クラスなのに弓道部総出での援護射撃など本当に必要なのか？というか弓道部の一斉正射でカタがつくと思うんだが…

「じゃあさつさと仕事を終わらせるか、皆狙いは絞らなくていい。適

当にぶちまけや」

「でも主将、相手は3人しかないのでそうすると確實に味方に当たっちゃうんですけど…」

「ハア、3人？ちょっと双眼鏡貸せ」

双眼鏡で確認してみると確かにうちの軍がたった3人を取り囲んで戦っている、というかそのうちの一人って相手方の大将じゃね？

「あいつら何考えてんだ？つづ一かアレだけの人数がいて倒せてないのかよ！」

「これはうちがヘマをしていると見るのは早計か…1年S組のナントカって奴とF組の御神苗の決闘は部活に行く途中でチラツと見たがありやナントカが弱すぎたと思つたんだが…」

「どうやら御神苗が強かつたと見るべきか、そしてあの3人は同レベルと判断するべきだな。作戦は変更だ、1年から3年を3グループに分け三人に向かつて同時に射るぞ！グループ内で直接対象を狙う者と避ける動きを考えて射る者を分けておけ、万が一躰されたら以後警戒される恐れがある。この戦、ここで俺達が決めるぞ…」

部員達を鼓舞して俺も自前の強弓を持ち出す、うちは武家の中では最近落ち田な弓使いの家だ。なんでも他の弓の名家に嫁いで来た女にどうやら問題があつたらしく品格を地に落としてしまい同じ弓の武家であるつちも肩身が狭いなんて親父がぼやいていた。

まあそんな事はあつたが俺は家の名前など気にしていない、弓は好きだし気ままにやっていけばいいかと思っている。しかし腐つても武家の生まれだ、己の腕に誇りがある。最初はこの戦もやる気はなかつたが相手がアレなら文句はない、俺が今まで培ってきたものをぶつけるには格好の相手だ。

そう思い皆に隊列を組むように指示して構えを取ろうとした時だつた、視線の端のほうで隊列を整理していた大柄な副主将が錐揉みきりもしながら俺達の前に転がってきた。

「ふう、なんとか間に合つたか…それにしてもこの消音モードは凄いな。少し馬力は落ちるけど、ここまで近づいても気付かれなかつたか」

そう言つてゐるのは確かF組の斑鳩 恒とかいう奴だ、事前の情報では危険度は低いとなつていたはずだが…それにアイツが乗つてゐるアレは

「そんな玩具で『』まで来たのか?」

「『』は玩具なんかじゃありません、頼もしい相棒です」

「この男何者だ?」ひは30人近くいるのこまるで動じていない、まあこんな部員達があまりの事に動搖し浮き足立つてしまつてゐる。『』は会話を伸ばして落ち着ける時間を稼ぐか…

「ほら、しかしあつてたエンジン付きの乗り物を使つていいいのか?」「ちゃんと学園長には許可を取つてますよ」

「まったくあの御老体にも困つたもんだ、そのおかげで『』は作戦を遂行するのが困難になつちまつた。そいつでぶん殴つたのか?そりや副主将も吹つ飛ぶわ

「いえ、殴つたというよりはぶつけたというか…でも安心してください、女性もいるようなので『』チラを使いますから!」

そう言つて斑鳩はウエストポーチから黒い棒を取り出した…って  
オイオイ、マジかよ!?

「あ~君、俺の記憶が確かならそれはスタンロッドってヤツじゃないのか?」

「はい、『』なら大きな怪我もなく相手を鎮圧できます。知り合いか  
ら借りてきました」

「もしかしてそれも…」

「はい、女子生徒も参加することを考慮してスタンガンの使用は許可されてゐるよ!です」

それは女子が身を護る為の物であつて女を相手に使う為の物じや

ねーだろ絶対ー。つーかなんでコイツそんな笑顔なの!?

「さすがにうちの女子部員にそういうのを使うのは遠慮してもらいたいんだが」「じゃあうちのクラスメートをそのコトで狙うのはやめてもらえますか?」

「む、なるほど。君の役割は俺達を抑える事か」

「はい、そうすれば俺も人を傷つけずに済みますから」

「コイツ……30人近くを相手にソレが出来ないなんて微塵も考えちゃいないのか、副主将が吹っ飛ばされた現実を考えると馬鹿ではなくそれだけの腕があるって事か。

「わかった」

「…………主将!?」

「ただし、ソレは俺を倒せればの話だ。俺達は君が邪魔で君は俺達が邪魔、ならココは互い譲れないだろ? だが他の部員では恐らく束になつても君には勝てないかもしれん。だから君が俺一人に勝てば部員達には中央の援護をしないようにさせるので出来れば皆を傷つけないでやって欲しい」

ベストではないかも知れんがベターではあるか、彼の性格を考えれば……

「解りました」

「という訳だ、お前等。俺がコイツに負けたらコトから手を離し援護を放棄しろ、コレは主将命令だ。もしこの命令を破るものがいたら斑鳩君、見せしめに構わずやつちやつてくれ」「いいんですか?」

「俺は被害を最小限に食い止めたいたんだ、それをいたずらに被害を増やさうとする奴の面倒までは見きれん」

「了解しました」

「それでは始めるか」

そういうって俺は強弓を構える、ソレは射る為ではなく相手を倒すための構え。弓を使つからといって近距離戦闘ができない等と思われても困る、いちどり弓使いではなく弓術使いだ。

それに会わせる様に斑鳩君の気配が変わる、この威圧感・本物だな。その斑鳩君の変化に合わせて彼の乗っているステイックボードのエンジン音が大きく鳴った。

「エンジン音がまるで獣の呻き声だな」

「こいつ本当はじゃじゃ馬なんですよ」

どうやらひりひり副主将を吹き飛ばしたときは手加減していたみたいだな…

「やれやれ、とんだ貧乏クジだ」

「その割には顔が笑つてますけど…」

彼の言う事は自分でも解つていい、顔の筋肉が引きつり笑みというにはあまりにも獰猛なモノになつてているだろう。だがソレを抑えろといつには無理な話だ。

「田の前に上玉の獲物がいる、逸りたてるなつてのが無理な話だ」

「…ただ狩られるだけだなんて思わないでくださいね」

そういうて彼は猛加速をしてひりひり突っ込んできた、速い!?

「くつ、そんなもん何処で売つてんだ!?」

「知り合いのおじいさん頼んで少しいじつもらつたくらいですよ！」

弦で絡め取るとしても動きが速く複雑で捕らえきれない、平面的な動きじゃなく上体を複雑に動かし立体的な動きを可能にしているのか。常に上体を振つて的を絞らせない動きで、まるで遠距離武器に狙われるのに慣れているようだ。

それにあんな乗り物にのつて激しく動きながらでもスタンロッドを振るう動作も様になつてゐる、使つのに慣れてこよづだがいつたい何処で使つてんの！？

「まるで本物の獣だな！だが！！」

右手に隠していた矢を投擲して避けた彼の動きに合わせて強弓を横薙ぎに叩き付ける、彼のスタンロッドのコーチを考えてもいつの攻撃が当たる！

「まだだー、パーべッシュ、お前に魂があるのなら…心えろ!!」

そういって彼は俺が横薙ぎに払つた『』を飛び越えた、あんなものでこんなに高くジャンプできるのか！？

「バキイイ!!」「グハツ!!」

次の瞬間俺は後輪のタイヤで吹つ飛ばされた……なるほど、ひびの副主将をふつ飛ばしたのは……コレ…か

「『』主将!!」

皆が駆け寄つてくる・・・斑鳩君はじりじりと向つてくるようだが皆に襲い掛かる気配は無い

「やく…やくどねつ…だ、みん、な…『』を置け」  
「ありがとうござます」

彼は頭を下げた、さつきまでの威圧感はもう欠片も残っちゃいな  
い。

「さつきの君と、今の…きみ、どっちが…ほんとのきみな、んだろつ…な」

俺がさつきと彼は困ったように苦笑を浮かべ…

「どいつも俺です」  
「はつはつは…ちがいない」

そして俺は意識を手放した、面倒くさいイベントだと思っていた  
が中々どうして楽しめたもんだった。

どうやらこの森を抜け出せたのは俺達空手部の3人だけだつ  
たようだ…中央の戦いにはついていけないと判断して西サイドの森  
に増援とこう形で逃げてきた訳だがここも地獄だ。

弱弱しい悲鳴を上げ逃げ出したかと思い追いかけると穴に落ちる  
わ繩で吊るされるわデカイ看板が襲い掛かるわでどいやらこの森は  
ブービーとラップの巣窟と化してしまつだつた。

「へえ、まさかあの森を抜けてこれる奴がいるとはね」

森を抜け少し高めの崖に出た俺達を待っていたの俺達S軍を散々翻弄し続けてきたF組女子を率いていた魔女、染井芳乃であった。

「お前ら… ただで済むと思つてんのかあ!?」

仲間の怒声に染井の後ろにいた女子がビクつべ、口づややりやすくなつたな。

「馬鹿丸出しね、そんなんで一々怯えると思つてんの?」

「お前の後ろの奴らには効果的だつたみたいだがな」

「ん? ん~そつみたいね、でも関係ないわよ。この子達はあたしが守るんだもの」

「へつ、おめえみたいな小娘に何が出来るつてんだ。」  
「ちはあんな姑息な手を使われて気が立つてんだ、ちょっとくらい楽しませてもらつてもいいよな…」

確かに、いへり学園長が監視してこるとこつても森の中はもはや魔境と化していく。むきつとぐらにならばれないと…なら

「これからはお楽しみのお時間つて事だな、安心しろ痛ーのは最初だけだ」

「はあ、あんた等みたいな下種すに姑息だなんて言われたくないわね。時雨の言つとおりつちに付いててよかつたわ」

「ハッ…お前が付いてたからつてどうだつてんだ! オイ! コイツからやつひまおつぜー!」

俺達は一斉に飛び掛つた!

「何かじつてるのかは知らねえがこつちは格闘のプロだぜ! 女一人で男三人に勝てるわきやねーだらうが、アマチュアが!!」

そうして掴み掛った俺達を染井は難なく後方の川へ投げ飛ばした  
……へ？俺達3人は水しぶきを上げて顔面から川に叩き付けられていた。

「どうちがプロなんかしらね、アマチュアさん？」

「てえめえ、もう容赦しねえ！泣き喚いたつて許してやんねーぞ!!」

「あら、あなた達こそ私たちに向かつてあんな暴言吐いておいてその程度で許して貰えるとでも思つてゐるの？」

そういうつて染井は映画でみるようなスイッチを取り出した。

「へつ、今度はなんだよ。犬用の罠か？それとも猫用の罠か？どうせ動きを止める程度のもんだらうが！そんなもんいくらでも抜け出してやんよ…てめえはひん剥いて晒しもんにしてやんぜ…」

「そり…それが辞世の句ね」

そういうつて染井がスイッチを押した瞬間視界が真っ白になつて身体に電気が走つたような感覚に襲われた、…イ、イヤコレは實際になが…流れ、て…

「そいつは川に仕掛けた魚用トラップの電気ショックよ、あ…ぶつちやけ今やつたら違法だから氣をつけてね 本当は電圧を下げる動けなくなる程度の予定だつたんだけどあんたらみたいな奴らが相手なら下げる必要も無いわね。しばらく病院の天井の染みでも数えていなさい」

「芳乃ありがとう！」

「大したこと無いわよこの程度」

「これでこいつの方はあらかた片付いたわね」

「そうね、後は優ちゃん達が上手くやつてくれるとと思つナゾ…」

「それにしても川神学園(つかいじゅく)にもこんなゴミみたいな奴らがいたのね」

「私怖い…」

「学園長は武道系の部活には甘いからね…どうする芳乃？」

「安心して、さつきの会話はしつかり録音しておいたわ。コレを学園  
壁じゃなくてPTAにでも出せばなんとかなるでしょ」

「わっすが芳乃！御神苗君の嫁と言われるだけはあるわね！」

「ちよ、ちよっと！誰が誰の嫁なのよ！」

「え、あんた隠してたつもりなの？」

「よく一緒に学校休むし～」

「仲の良さそつない岬越寺くんや斑鳩君は苗字で呼んでるのに御神苗君

だけは名前に姓を付けだよね」

「た、たまたまよーたまたまー別に変な意味じゃないわよ!!」

「そんな顔赤くして否定できてると思つてゐの？」

そうして誤解？を抱えたまま終了の花火が上がるまで彼女達は  
ガールズトークを繰り広げる事となつた。

『川神大戦終了!』

「……………カンパ……………イ!!!」

あの後俺たちは勝利を納め、今は勝利者の特権であるバーベキューを始めたところだ。

川神大戦の開始が午前中で実質2時間と掛かっていないので真昼間からあれやこれやと騒いでいるところだ。

「ウンマー!!ウンマー!!」

「兄貴達が勝ち取った肉か…悪くねえな！」

「は～いしーちゃん、あ～ん」

「あ～辰ちゃんずる～い！ぼくも、ぼくも…はい、しーちゃん！」

そう言つて俺に肉を突き出してくる我が愛しの妹たち、実は勝利者用に用意されてたバーベキューがS軍の事を考慮していくあまりにも多かつた為に急遽うちの欠食児童達を呼び出したのである。

亞巳や俺の家族という事もあり周りは遠慮なく可愛がってくれている。

「しかし私達も加わってよかつたのかい？岬越寺君」

「まあいいじゃねーかアンディ、俺たちや自分の仕事を終わらせたんだ。昨日の敵は今日の友、せっかく御呼ばれしてんだからおいしく頂こうぜ」

「…安藤だ」

そして敗者の罰ゲームとして戦場となつた丹沢山中の後片付けを終えた骨法部と弓道部も誘つている(この二つの部活は最も人的被害が少なかつた事、ソレと割り振られた場所が弓道部が陣取つていたところと言つて仕事が早く終わった)、さすがに天が大喰らいだとし

てもこの量は捌けないだろ？

他にも弓道部や骨法部を通してS軍に参加していた部活やクリスにも声を掛けでもらつて、元々事の発端はS組(柘榴オノニー)との衝突なので学校全体を敵に回したい訳じやないしな。

「ングング…いいんですよ、先輩達はS組みたいに変な偏見もないでしょ？それと時雨でいいですよ、先輩」

「まあね、つつーかそんなもん持つてる方が疲れるし」

「確かに、ところが私は家を出てる身だし。ハツキリ言つて武家のプライドなど欠片もわからん」

「そりや氣楽でいいや」

「しーちゃん、ましゅまろり焼けた〜？」

「おう、ビスケットで挟んでやる」

「わ〜い」

「ハハハ、仲がいいな二人とも。兄弟で仲がいいのは羨ましいよ、いやホントに」

「だよな〜、ウチの妹なんてこの間俺のプラモ壊しやがってよ〜…」

「なに？矢場、お前妹がいたのか？」

「あれ？アンディには言つてなかつたつけ？多分小雪ちゃん達の一個上ぐらいだな」

「初耳だ…それと安藤だ」

「へ〜、じゃあ可愛い盛りじゃないですか？」

「ん〜でもよつとマーハーッぽいな、今からあれじや将来はアイドルの追つかけでもなつそつで怖いわ」

そんな会話を楽しんでいると向いの口から大きな声が聞こえてきた。

「だからソレはまだ焼けてないって言つてんでしょうー先にこいつの魚を食べなさいよー」

「ひむくーー食いたいもん食わせらーつーかお前が川で電気ショッ

クなんて使うからそんなに魚が山盛りなんだろ？」「

「別にいいでしょ、優ちゃんが食べれば！」

「俺に振るんじゃねー…だから勝手に俺の皿に乗せんなよ！」「

あんな事やつてつから夫婦疑惑が持ち上がるつてことがわかんな  
いのかね、あの二人は。

「まったく、うるさいねえアイツ等は」

「お、亜巳。お疲れさん」

「亜巳ちゃん、おつかれ～」

「はい、亜巳ねえの分だよ～」

「すまないねえ、辰。コラ!! 天！竜！あんまり行儀悪いマネするん  
じゃないよ！」

中央で戦った武道系部員達の手当てを買って出ていた亜巳が帰つ  
てきた、整体関係なら俺の出番だが打ち身や打撲等は針や漢方ができ  
る亜巳の方が適任だ。

「2～3日もすれば痛みも引くだらうと、結局殆どあたしが痛めつけ  
た奴らだったからね～」

「まあ明日は休校であさつては日曜日、問題はないな」

「いや、俺もウチの副主将も斑鳩君に吹っ飛ばされたし本当なら結構  
な怪我だぞ」

「それだけ肉が食えれば大丈夫だ」

副主将は病院送りなのにそれ以上に吹っ飛ばされたこの人は肉を  
食つてているという不思議

「まあとにかく今回の一件はやつて良かつたとおもうよ

「そうだな、学園に蔓延していたつまらん空気を一蹴できた」「  
ぶつちやけ迷惑じやありませんでした？」

「まあ、最初はメンドクセーとか思つてたけど斑鳩君との戦いは実りがあつたよ。今時あんなのと戦う機会なんて滅多にないからなあ」「確かに」、戦の場と並ぶ事で最初は期待し相手が少ないと聞いてがつかりしていただが… 実際蓋を開けてみれば今日以上に充実した戦いが出来た日はなかつた、感謝して「るよ時雨君」

「だつたらよかつたです、あれ？ そういえば悟は？」

「わっさ～、いつしょにお肉食べてた天ちゃんつれて何処かいつかやつたよ～」

小雪がそつこつと山の向こうからホンジン音と天のはしゃぐ声が聞こえてきた、肉食つた後にようやるわ。

「まあ大丈夫そうだねえ」

「子供乗せて一人乗りできんのかよ、アレ…。よく今俺肉食てるな」矢場さんが顔を青くさせている、元はおもちゃに毛の生えた程度の筈なんだがいつたい何やつたんだメンゼルジーもん。

「とにかく、今後S組の選民意識は少しは改善されるだらうわ」「そうだな、頭がいいのは解るがそれでテカイ態度取られても…って思つていたのは実は2～3年にも多かったのさ」

「本当は学園側がなんとかしないといけないと思つただけどねえ」

「そういうやさつき芳乃やクラスの女子たちが騒いでたけどアレどりなつたの？」

「ああ、空手部のアレかい？ フン、つまらない話さ。あんたは気にしなくていいよ」

「あ～、眞つでおくけど川神<sup>ウチ</sup>の部活が全般的にあんな感じつて訳でもないからな？」

「わかつてるよ、ただ学校とつ場所は陰の気が溜まりやすい場所でもあるからねえ」

「氷山の一角という事か… まあ今回のこと少しでも膽が出せたのな

らよしとあるか

そうして亞巳達が今後の学園生活を憂いでいると天と悟が帰ってきた。

「ぐれ兄イ、このステイックボードすっげえおもしれーゼ！ウチにも買つて!!」

「いやー天ちゃんは凄いな、同じ状況でもオウルなら5秒で吐いてるのに」

「お疲れさん、悪かったな悟。天、そいつでアレだけのスピードが出せるのは悟だけだ。それと買うとなるといぐら掛かるか予想もつかないから勘弁してくれ」

「えー、わかつた。悟！ 今度また乗つけてくれよな！」

「ああ構わないよ、次は機会があれば別の乗り物にも乗せてあげたいなあ」

悟も子供好きだし天と結構相性いいかもな、それにしてもあれで二人乗りするつてだけでも凄いのにあれだけ山道走り倒してもボディに傷一つ付いてないってことはやっぱリアレでてきてんだろうなあ… それと悟、お前の「別の乗り物」って定義が広すぎるんだからくすぐれも戦闘機や戦車なんかに乗ってくれるなよ？

「さあまだまだ肉も魚もてんこ盛りだ！ 旨遠慮せずにガンガン食おうぜ!!」

「おお～～～！！」

勝利者の宴はまだまだ終わらない・・・

「おーい、そつちの穴塞がつたか~」

「いや、もう少し掛かりそう」

「あいつら、いつたいどんだけ穴掘つてんだ!!」

「ひうりではまだまだ敗者の責務が続いていた、F組が今回の為に東と西の山に張り巡らせた罠の撤去である。一応罠の場所を記した地図は貰っているが結局は素人の彼等、時間はいくらあっても足りない。

「まだこいつちまうことよ、向こうの山はロープトラップ地獄で撤去に時間が掛かってるじゃんのかー一次被害が続出らじこわ」

「ハア…あの馬鹿さあくろに関わったばっかりに…」

「そういうやその馬鹿さあくろは?」

「F組の御神苗に顔面ワソパン貰つて一発KO、病院に運ばれたらしいだ」

「…俺、もう他のクラス馬鹿にするの辞めにするわ」

「そうだな…F組にも御神苗みたいな奴がいれば」

「S組ウチにも柘榴みたいな奴がいるからなあ…」

「「「ハア…」」

「ひうりひうり組の意識改革は成功しているようである、やひうりひうりかり一枚噛んでいる柘榴は大物なのかそれとも…

その後芳乃が例のレコーダーをPTAに提出し、空手部が無期限の部活動停止になったのはまた別の話。

そしてソレを退院後に聞いた件の三人が逆恨みで芳乃を闇討ちし、返り討ちにあって精神崩壊一歩手前まで追い込まれ女性不信となつたのは割りとビールもいい話。

「おまけ、さわやか3組」

「つてことがね、この間あつたんだよ」

「なるほど、それであんな電気ショックで痙攣した人やハンマーで殴られたような人達が葵門病院に運ばれて来たんですね」

「お前に一ちゃんすげーな」

今お話しをしてるのは最近仲良くなつたトーマヒジュンつて名前の男の子。学校だと僕は辰ちゃんや竜や天ちゃんどしか遊んだりしないから皆とはあんまり喋らないけどこの一人はそんな僕たちともお喋りしたいって話かけてきたんだ

「うん、しーちゃんとお父さんは人を壊すのも治すのも自由自在だ  
！つていつてたよ」

「ただの危ない人達じゃねーか！」

「むう、壊すのは感心しませんねえ」

「オーケイ、雪。なにやつてんだ？」

「あー、竜だー」

「こんにちは板垣君」

「おっす、板垣。今岬越寺からこの間あつた川神大戦つてヤツの話を

「聞いてたんだわ」

「ああ、アレの事が。つたく兄貴も水臭いぜ、どうせなら俺たちも呼んでくれればよかったですのによー。」

「イヤイヤ、高校生のガチ喧嘩に俺たち小学校4年生が入り込める訳ないだろ」「いいだろ」

「ああん？ 俺たちがあんな青じょうたんビートで負けるわけねーだろ！ 師匠もその辺の高校生相手なりどうとでもなるって言つてたしな！」

「へえ、師匠と言つ事は何か武術のたしなみがあるのですか？」

「うん、しーちゃんは柔術で、ぼくはムエタイをやってて、龍と辰ちやんは空手でしょ、天ひやんが武具術で亜ひやんが中国武術だよー」

「何処の多国籍軍!?」

「まあ兄貴やおじきや師匠には及ばないが俺たちだつてそこそこ戦えるぜー！」

「あの辰子さんがねえ…」

「うひつてテーマがお腹寝してるひやん田て向けてる、気持ちよさげーだなー

「でもやつぱり格闘技習つてるつていつも所詮は小学生、その辺の腕力自慢の高校生なんかでてきたら不味いだろ」

「俺たちは『達人』に教わつてんだぜー！ その辺の奴らと一緒にするんじゃねーよー！」

「達人ですか…」

「達人ねえ…なんだ、水の上走つたり濡れた和紙の上をぐるぐる滑つたり虎殺したりしてんのか？」

「メー オは殺しちゃダメー!!」

「ブロオツ!!」

「ああー準!?

僕はジユンの顎に打<sup>打</sup>テイー・ソーグ<sup>ち上</sup>・ラーンを入れて訴えかけた！

「メー オはちよつと大き<sup>い</sup>」<sup>い</sup>ネ「さんで虎じやないの！だから撃つたらダメー！」

「雪、もう聞こえてねえみてーだぞ」

「あれえ？」

さつ きまでもそこには立つてたジユンが寝てる？トーマは慌ててジユンをお世話してゐみたい。失礼しちゃうな、これからどれだけメーオが可愛いネ「せんか教えてあげようと思つてたのに」。あれ？でもどうやって説明すればいいんだろう…「そうだ！絵に描いたらみんなわかるかも！」

「そ、うだ！紙芝居にしよう！」

「また唐突だなオイ、どうした急に？まつ、いつもの事か

「準！大丈夫ですか、準！」

「ああ…ちつちやな天使が…俺を…」<sup>レジ</sup>が天国か…」

「ニニニニニ…」

今日も今日とて騒がしい4年3組の教室であった。

「雪、その口から血が滴つてゐる虎はなんだ？」  
「む～虎じやないよ、しーちゃん。メー オだよー。」ほんのお肉食べてると「うーーー。」

「そっか～よく描けてるな、Hライぞ～。でも友達に見せるのは止め  
とけな、トラウマになっちゃうから」「だ～か～ら～、トリじょなくしてネー！」

## 『今更の田のよう』

金を稼ぐつてのは大変な事さ、それはちゃんと解つてゐる。身体を売れば稼ぐ事も出来るだろつ、でもあたしは決してそんな事はしないと昔誓つた。でもあたしが稼ぎたい額は女子高生がバイトしてもそういう易々と稼げる金額でもない…だからと言つて

「なんで産業スパイみたいな真似事しなきやいけないんだい？芳乃」

「だーつて、亞巳つたらジャングルとか嫌がるじゃない？だから今回は都内を選んだのよ」

「そいつはありがたいねえ、帰らずの森に比べりや何処だつて天国だらうわ」

「…持ち帰つたソーマの写本の写真も原材料が存在しなければただの『ノリ』だつたわね」

「おまけに迎えに来た時雨にまじりびどく叱られちまつたしね、踏んだり蹴つたりわ」

「初めてよ、お尻百叩きなんてされたの…」「ありやどう考へたつてあたし達が悪かつたんだからしょうがない

「ア

芳乃と組んで仕事をするつてのは間違つてたかねえ？

芳乃とはクラスメートといつ垣根を越えた親友だ、お互いが普通の高校生の枠を超えてるとこうシンパシーもあり色々な事を相談できる良き理解者だとも思つてゐる。だから相談してみた、いつかは世話になつてる時雨のパートナーになりたいと、アイツが医者になると言うのなら同じ道に進みたいと、しかしソレをするには金が掛かるけど、時雨に言えれば医大の授業料すら払つてくれるだろうがそれじゃあパートナーになりえない。そうすると芳乃はあたしにバイトの話を持ちかけてきた、曰く「あたしのボディーガードになつて欲しい」

と。

優のヤツが芳乃の事を「遺跡荒らし」なんて言つていたから芳乃がトレジヤーハンターをやつている事は知つていたし彼女が荒事に強いことも知つていた、でもこと戦いの腕に関しては馬師父に鍛えられているあたしの方が強い事もわかつていた。

だから軽く引き受けた、そこからこの腐れ縁が始まつたんだ。

正直甘く見ていた。

遺跡荒らしだなんていうから最初はどこか古めかしい遺跡で宝探しをして、時々原住民みたいな奴らが槍でも投げてくんのかと思つていたら…向かう場所は現代科学なんて考えが吹つ飛び程のオーバーテクノロジー満載の古代遺跡で相手は原住民どころか最新装備をまとつた現役軍人が血眼になつて襲つてくるのだ。

オマケにギヤラは出たり出なかつたりと不定期で目標金額にはまだ遠い…

それでも芳乃<sup>このコ</sup>を放つておけないってのはこの子が保護欲を搔きたてるのかそれともあたしの面倒見が良すぎるのか、まあとにかく…

「あたしがいなけりゃあんた10回は死んでるよ、芳乃」「だから頼りになる里口つて好き」

あたし達は中々いいパートナーツて事なんだろ?ね。

「ところで、やけにこのビル警備が厳重だね」

「まあ日本の一製薬会社にしちゃ厳重すぎるのは確かね、でもそういうのも無理は無いかもしないわ」

「…今回の獲物つてのはそんなに凄いモンなのかい?」

「なんでも今「ココでは生物兵器の開発が行われているらしいの」

「それつてこの間優と時雨が倒したっていう狂戦士<sup>バサーカ</sup>みたいなやつかい

？」

「いえ、アレは優ちゃんの話ではじつちかつて言つと戦車みたいな兵器に近いものだつて言つてたから違うわ。」ここの進められているのは獣人<sup>ライカンスロープ</sup>の研究ね」

「ライカンスロープ？ それって確かスプリガンの…？」

「しつ！」

私たちが隠れている物陰の横を数人の科学者が通り過ぎていく

「サンプルと成長具合は良好とみていいのか？」

「細胞が成長しすぎるキライはあるが概ね良好と見ていいだろ？」

「今まで生物としての形を保つ事すら出来なかつたんだ、上出来だる」

「もう少し獣人の細胞を弄りたい所だが…」

「あれは貴重な研究材料だ、迂闊な事は出来んよ」

「はあ、どつかに獣人が捨てられてねーかな」

「ばーか、犬猫じやねーんだぞ」

「似たようなもんさ」

胸糞の悪くなる会話だねえ、軽く締めとくかい。

「ストップストップ亜巳ーあんな奴ら相手にしてもしょうがないわ、さつさと頂くもの頂いてずらかりましょ」

「… そうさね」

そうしてあたし達は間抜けな研究者たちの下から各種資料や例の体細胞をかっぱらつてきた、明日になればこれ等をアーカムに売り飛ばしに行くそうだ。組織に属する事を嫌う芳乃だがその辺の分別だけは最近付つつある、以前は全て闇ルートなんかで捌いていたらしきけど今はきな臭い物は全てアーカムに引き渡す（売る）ようになっている。

時雨の尻叩きは本当に百回やらないと終わらないからねえ。まつ「レが金になれば田標金額までもう少し、後は暴走する芳乃を抑えしていくようなスタンスで十分だろうね。

私たちが襲われたのはそんな事を考えて家路についた夜の事だった。

「一、二、三、雪、天、風呂で暴れるんじゃないよ」

家に帰つてみればあたしの帰りをわざわざ待つていてくれた妹達、そりやあ嬉しくて一緒に風呂にも入るさ。うちの風呂は最近家に住み着いた小雪のムエタイの師匠のアパチャイさんが裏庭に掘った露天風呂だ、小雪と嬉々として掘り出しきなり温泉が噴出したのには驚いたもんだがまあ今となつてはありがたい話さ。

しかし結構な住宅街での露天風呂だ、当初は覗きなんて馬鹿な真似をする奴（6割が馬剣星、2割がカメラを持った探偵みたいな声をした猿）もいたが軒並み時雨が撃退していつたから今ではすっかりいなくなつた、…そう思つていたんだけど

「一重の極み!!」

軽いネタ技が聞こえてきた、時雨は社会的に手加減しなくていい相手だとあの手の子供が喜びそうな技を練習する悪い癖があるからねえ

「しゃーちゃん、ソレ終わつたらこいつしおの風呂入りつよ~  
バ、馬鹿なこと言つてんじゃないよ、雪~」

「え~、亞巳ねえしーちゃんとお風呂に入るの嫌なの?」

「そういう問題じゃないんだよ!……ん?どうしたんだい、天」

「いや、なんか気配が変じゃね?今の覗き」

わう言えば確かに、普通覗きといふ行為はその性質上素人でも無意識に気配が希薄になるもんだが……こいつからは妙な殺氣も感じる。そんな事を考えていると向ひの方から…

「もんきゅくじんはかいじへ  
悶虜陣破壊地獄!!」

「ちよことちよこと、素人に一つ一か覗きにかける技にしては凶悪過ぎないかい?」

「けんせいのおじけやんかな~?」

「ちよつと確かめてくるからあんたちはココにいな!」

そういう残してあたしは身体にタオルを巻いて現場に向かった、そこにいるのが時雨で覗き魔が既に倒されているなら……まあこの格好でも問題ないね。チラッと見られるのと一緒に風呂に入るのとでは次元が違うんだよ!!そんな事を考えながら現場に着くと蹲うずくまる金髪と此方に背を向けている時雨がいた。

「時雨どうしたんだい?」

「どうしたもこう…ブッ!お前なんちゅ一格好で!?

「アンタしか見てないなら気にしないで、ソレよ」「オッホン、すまないね時雨だけでなくて」お、おじ様!?

時雨には見られてもこいけど流石におじ様相手では恥ずかしい、少し後の木陰に身を隠す事にした。

「ところで時雨、あの技を使つたみたいだが？」

「ああ、最初は金髪だったから外人の新手の覗きかと思つたんだがな

…」

その時蹲つていた覗きが身体を起こした… アイツは!?

「…どうやら人外の覗きだつたらしい」

「ふむ、ライカансスローブ 獣人か。珍しいな、しかし何故こんな所に?」

そんな二人の会話を他所にその獣人はあたしに向かつて襲い掛かつてくる!? しかしあたしと獣人の間に立ちはだかるのは勿論…

「理由はどうあれ、亞巳に手を出す奴は許しちゃ おけねーな」

「調度いい、捕まえるにしてもある程度弱らせないといけないだろう。しかも相手は獣人、あの技の練習台には持つてこいだね」

「なんだよ、さつきの完璧だつただろ?」

「いや、まだ甘い。新陳代謝が人間より優れており怪我の回復が早く、身体の造りが頑丈な獣人相手に立ち直りが30秒では人なら死んでいるだろ!」

「U G A A A A A A A A A A A A!!」

「せつかちだねえ君も、なら私が一つお手本を見せて上げよう」

そう言つておじ様はいつの間にか獣人の前に立つていた、そして…

「もんぎやくじんはかいじく 憲虐陣破壊地獄!!」

ヒュウウウウ…グシャッ!!!

「…お、5秒で起き上がつたぞ」

「今位のが人間相手への目安だ、さあやつてみなさい時雨」

以降達人による覗き（獣人）いじめがじばらぐ続きますのでその手の描写が苦手な方は！」注意を

「もんぎゃくじんはかいじへ  
『悶虐陣破壊地獄!!』

「まだだ！手首の返しが甘い！そんな事では落下の際に首の骨をヘシ折つてしまひやー・もう一度ー！」

「もんぎゃくじんはかいじへ  
『悶虐陣破壊地獄!!』

「手の関節への極めと脚の関節の極めへの力の加減を考えるんだ！無駄な力がまだ入ってる、もう一度ー！」

「もんぎゃくじんはかいじへ  
『悶虐陣破壊地獄!!』

「今のは投げまではよかつた、だが落とす角度がまずい。首へかけた圧力を考慮しないとせっかくの加減が台無しだ、もう一度ー！」

「もんぎゃくじんはかいじへ  
『悶虐陣破壊・・・!!』

「GYAAAAAAA!!!!!!」

夜の住宅街に先程とは質が違う叫び声が木靈したが出所が岬越寺邸だったので近隣住民にはスルーされる事となつた。

「しつかし、なんだつたんだコイツは？」

時雨が衰弱したのであるうグッタリした獣人をワイヤーで編んだロープで縛つていぐ、うちの何処にあんな物があつたんだろ？

「里口を狙おうとしていたが…心当たりは有るかい？」

そう言つておじ様と時雨がジト田で此方を見てくる…

「いや、その……わーかつたよ時雨、正直に言ひからそんな田で見ないでおくれよ!」

はあ、この一人に隠し事は無理さね。

「実は今日芳乃と二人である製薬会社に忍び込んだのさ、芳乃の話じゃそこでは獣<sup>ライカンスロープ</sup>人の研究をやつてたらしくてね。そこで資料と奴<sup>やつこ</sup>さんたちが大事にしてた獣人の体細胞をかっぽらつてきた訳さ、ああ勿論それはアーカム持つていくつもりだよ?」

「獣<sup>ライカンスロープ</sup>人の研究? また無茶な事を」

「しかしその結果が彼だと言つのなら中々馬鹿に出来た話では無いかも知れないね、パワー・スピード・タフネスどれをとっても人間以上だったよ」

ソレをおじ様が言つと何故か納得しないのは何故だろ?」

「とにかくコイツはアーカムに突き出さう、それと田口がこうして襲われたって事は芳乃も危ないかな?」

「そりいえばあいつ等 と つて言つてたね…」

そんな事を考へてると時雨のケータイが鳴った。

「おう、優かどうした? ……ああそれか、こつちは大丈夫だ親父と捕獲したよ。……何、逃がした? まあ帰る先なんて芳乃が知ってるだろ。それよりコイツを回収してくれないか、流石にペットとして飼うには無理がある。……ああ、よろしく~」

「やはり向こうにも現れたかね」

「ああ、芳乃が優に頼つてアーカムビルに駆け込んだらしい。もしか

したらジャンと関係が有るかもしれないから」の件は一任して欲しつつ「いや、

「そういう事なら問題ないようだね」

「一件落着つて事かい」

「いや、この件はまだ終わってないよ田口」

ああやつぱり逃げられないのかい…

「それで田口、他でもない話とこりののはもちろん君のアルバイトの事なんだが…」

あれからあの覗き（獣人）は時雨がアーカムに引渡し私たちは道場へとやってきた、もちろん私は辰達と一緒に服を着替えて来たがあの子達には席を外してもらつてこる。

「アルバイトをするなとは言わないよ、しかし流石に企業に潜入して資料を盗んでくるところのはねえ…」

「あー、その辺の事に関しては芳乃に一任してまして…ついていったあたしも悪いですけど」

「うん、以前帰らずの森から帰った時に今後危険な場所に行く時は私が時雨に連絡を入れるよ」と云つたはずだけビ？

「その辺りにつけても今回はあたしの認識不足でした。おじ様、時雨本当にごめんなさい」

そう言つてあたしは頭を下げる、誰がどう見たつてあたしが悪いんだからね。すると時雨が…

「あ～、親父その辺でいいんじゃないか？ 今回の件は恐らく芳乃がちやんと伝えてなかつたみたいだし」

と、フォローを入れてきた。マイツ、本当にあたしにまつと注意したいくせに…あたしが不利になるとこいつもフォローリ回头してくれる、例え自分の思いを殺しても…。だから、あたしは…

「ふむ、まあ里口も反省しているし今回の件に関してはもうここまでこじよう。ただ一つ聞いてもいいかい里口？ ビリしてそんなにお金が必要なんだい？」

やつぱり聞かれるか、ただ…

チラ…

マイツのいる前じゃあ…

「……は時雨、小雪達が心配しているかもしれないから少し見てきてくれるかな」

おじ様は暗に席を外すよつて時雨に伝え

「…わかつた。里口、風呂上りなんだから風邪引くなよ」

時雨はそれに答えて部屋から出て行った、まだ。マイツは解つてた筈だ、あたしが言いにくいのはマイツ本人に聞かれたく無いからだって事に。本当は聞きたいくせに、あたしを気遣つてまた自分の心を殺して席を外しやがった…

視界がぼやける…まったくなんて情けない奴なんだい、あたしは！

「…あたし、時雨の傍に…いたいんです」

「…今も頑るじゃないか、現状では満足できないかい？」

「満足なんて出来る訳無い!! だって…、あたしはいつもアイツに護られてる!! 拾われた時だって！ 高校に入った時だって！ そして今だって!! 今のあたしはアイツの寄生虫みたいなもんだ、とてもじやないけど隣に立つことなんてできやしない!!」

そう、時雨はいつもあたし達を護つとする。自分の身体を、心を犠牲にしてあたし達を優先する。そんな事、あたしは望んじやいないんだ！

「その為にお金が必要だと？」

「アイツの夢は医者になることだつて本人が言つてました…、だからそんなアイツの力になれるようアテアテあたしも勉強したいんです」

「…医大の学費かね？」

「はい、アイツの夢が医者になるとおりあたしの夢はその隣に立つこと。だからアテアテ時雨の手を借りる訳にはいかないんですけど、それじゃあ何時までもおんぶに抱つこいで隣になんて立てやしない」

「なるほど…ふう、これが若さと青春ヤシかな」

「おじ様？」

「そういう事なら仕方が無い、ただし今後は仕事の内容を芳乃君とよく打ち合わせてから行動を取るようにしなさい。それと事前に私がアーカムの方に連絡を入れておいてくれると何かと手伝つ事もできるだろ?」

「おじ様…でもそれじゃあ」

「わかっているさ、だが私は君の父親だ。親には子供の夢を応援する義務があるんだよ」

また視界がぼやけ出す…馬鹿だなああたしは、結局独りよがりで皆に心配をかけてただけじゃないか。

「あつがとう…父さん」

「話は終わったのか？」

道場を出て母屋の縁側に行くと座つて庭を眺めていた時雨がいたのでその横に腰を下ろす。

「ああ…あの子達は？」

「もう子供は寝る時間だ」

「それもそうだね…」

会話が途切れ静寂が訪れる……

「亜巳」

「なんだい？」

「…好きな女の子を護りたいって思つことは変な事か？」

心臓が止まるかと思つた…ダメだ否定の言葉しか思い浮かばない、あたしみたいな素直じゃないケバイ女の何処がいいんだとか、あたしなんかより可愛くて優しくて氣の利いた子なんていくらでもいるとか…でも、きっと無駄なんだ。ロイツはそんな事を全部ひつくるめて言の葉に想いを包んだんだ、だったらあたしもこの想いを偽る訳にはいかない。

「変な事じやないで…。でもね、女だって護られてばかりじや嫌なのや。ソレが本気で愛していふ男なら、尚更ね」

「そつか  
「やつれ

畠葉はソレツあつ……」一つの影が一つに重なるのを見ていたのは夜空に浮かぶ円と星達だけであった。

はずだった。

「あ～、しーちゃんと畠口ちゃんチューしてる…いこなあ～  
「しーー静かにこころひいてコシキ一、氣づかれちゃうだろ」  
「やつぱり畠口ねえもっこりやんの事好きだつたんだね、私たちと  
こっしょだ」「だ」  
「しつかしうーする、畠口ねえに先にわれちまつたぜ？」  
「だいじょーぶだよ、相手はしーちゃんだもん。ボク達が悲しむよつ  
なことには絶対しないこと思つよ～」  
「うん、私もそう思つな～」  
「…やつだよな、ぐれ兄いだもんな…」

畠口や時雨の知らないことじりじり一つの派閥が出来ていた、この派閥が後に膨れ上がり、「世界最強の花嫁部隊」と呼ばれるようになるかは…この世界の誰も、そして作者もまだわからなー。

「む…西口と時雨の事をカオス理論で計算してみると何度やつても6  
～7年後に大騒動と出るな、でもまあ恋はそれぐらい激しくないと  
ね」

失礼、一人感じてらっしゃる方がいました。

『南の島に連れてつて!』

「照りつける太陽、気持ちい潮風、それに見渡す限りの青い海。や一つ  
すが太平洋!」

「まあ東京湾とかと比べられてもな〜」

「悟の奴もコイツを操縦できてる満悦みたいだし、こうなると亞巳達  
を連れて来れなくてちょっと残念だつたな…」

という訳で俺たちは今、太平洋のど真ん中に浮いている船にいます。何故そんな所にいるのかといふと…

「なあお前等、今週末は暇じゃねーか?」

「どうしたんだ優、いきなり?」

「いや、ちょっと面白い仕事で南の島に行くことになつた。もしよ  
かつたら二人もどうかなつて思つて」

「それってアーカムの仕事なんだろ? 大丈夫か、悟も連れて行つて

「大丈夫、それに先方に悟の事伝えたら是非連れて来いつてさ

「ん~百舌鳥さんが良いつて言つたら行けるかも、急にASEの仕事  
割り振られたりしたら大変だから行くのなら先に連絡しどかな」と

「ああ、その辺は大丈夫みたいだぞ」

「どうしたことだ?」

「なんでもその先方が百舌鳥さんと知り合つてしまつてな、もつ既に百

「古鳥さんに許可を貰つてゐみたい」で古鳥さんも「是非連れて行つてやつてくれ」と言つてたらしい

「古鳥さんの知り合ひって事はその人も何か乗り物に乗る人なのかな？」

「ああ、今回の目的地は太平洋。つまりは船で行く事になるんだ、それも飛びつきのな。先方つてのはその船の船長だ」

「なるほど、一流は一流を知るつてやつか」

「じゃあ念のため俺の方からも古鳥さんに連絡入れておくよ、それにしても芳乃達にも声掛けなくていいの？」

「ああ、今回は潜入とかじゃなくて調査だからな。あいつ等が来ると仕事が進まねえ、つづーか亞巳と本格的に組み始めて余計にタチが悪くなつたつてのはどうこうことだ時雨？」

「いや、本人はセーブ役のつもりしこんだがな……でもそのおかげか、あの一人今まで以上に血く立ち回るようになつちゃつてお宝の回収率や他の遺跡の回収部隊の被害もアップしちまつたもんなあ」

「関心してんじやねーよ、そのせいで各國に手を付けられて変なあだ名まで付こりまつたんだぞ」

「変なあだ名つて？」

「……ダーティペア」

「まああいつ等連れて来たら万が一財宝があつた場合ネコババしそうだし、今回は留守番しどこへもらおうぜ」

「……いや、その願いも儘く散つたみたいだぞ……優」

「は？何言つてんのお前？」

俺達が話している船の甲板の上空を一機のハングライダーが飛んでいる。まったく、アーカムの船に無断進入するなんて無茶しやがつて。芳乃の奴はこっちに向かつてのん気に手を振つてゐるがあの速度だと…

「なつ!?

「キヤアアアアア!

ズシャー——!! つといい音を立てて驚いている優の横を芳乃が頭から滑つていった、亜巳? もちろんじつかりと速度を落として飛び降りてきたよ、俺の上に。

「まつたく、決まらないねえ芳乃は」

「…お前は決まつてゐと思つてゐのか亜巳? 俺押し倒されてんだけど」

「あら、じゃあ着地成功じゃないか。何言つてんだい?」

そんなやり取りをしていると向こうの方が騒がしくなってきた、まあやつてることは不法侵入だからな。俺は亜巳を抱え上げてそちらへ向かうことにした、ハア… 今回も面倒な仕事になつそうだ。

「で、おまえ何しに来たの?」

俺は壁に激突して蹲つている芳乃<sup>バカ</sup>に問いかける、つてかどうから情報が漏れたんだ?

「何しつつて、決まつてゐるじやない。優ちゃんに会つて…ね、ウフ」

「まお…

清々しい言ひ切りやがったな、「イツ。俺たちがそんなやり取りをしていろと周りを囲んでいた船員の間を縫つてこの船の持ち主がやつてきた。

「優、なんだこの女は」

「船長…」「イツは染井芳乃つていう世界にとても高い遺跡荒らしだ。いいつが絡んでくると下手な軍隊より始末が悪い」

「へえ…お前にそこまで言わせるとはたいしたもんだ、でそいつの嬢ちやんは？」

船長がそう言つて視線を向けた先には亞巳を抱えた時雨が…お前等少しば自重しろ、男所帶の船の中でそんなもん見せつけんな。何人か目が血走つてんだ。

「こいつは俺の家族の板垣亞巳です、船長」

「芳乃のお守りをやつてる板垣亞巳だ、よひしきくね」

「あ…お守りをやつてるんならもう少し抑えて欲しいもんだ、まあすんじまつた事はしようがねえしどりあえず…

「どりあえず船長、芳乃は簍巻き<sup>コイツ</sup>こでもしてさりとて海に放り込んだおつ。大丈夫、絶対死ないから」

「ちよつと優ちゃん酷くない!?おじさん…おじさんならかよわい乙女にそんな事しないわよね!」といふか亞巳もなんとか言つてよーつつーか何で既にそつちにいんのよー」

「あ~優、その辺にしといてやつてくんないかい?あたし達も幽靈島つてのが見てみたいのぞ」

「ひよつ!?おまえ等何でそんなことまで知つてんだ!?

俺達が海に出るつて話は確かに学校でしたが目的地の事は時雨達

にだつてこの船に乗つてから説明したんだぞ!?

「まあまあ、いいじゃないか優」

「船長…」こいつ甘やかしてつと口クなことになんねーぞ!」

「オレはこの嬢ちゃん達がアーカムの船に乗り込んできた度胸が氣に入つた。それに目的地は太平洋のど真ん中、どこへも逃げ隠れできやしねーからな」

「キヤーおじさん、もしかしていい人!?」

「そのかわり嬢ちゃん達、運航の邪魔だけはすんなよ  
「ありがとうございます、船長さん」

チツ、なるほど。芳乃が厚かましくて亜巳が礼儀正しくやつてんのか、なかなかイイコンビだなコイツ等。そんな事を考えていると時雨が「スマン」とアイコンタクトをしてきた、：まあ島についてたらコイツ等のお守りは時雨に任せればいいか。

「モーターグライダーで飛んできたのって芳乃と亜巳だったのか!?」  
「ハーハーイ、悟。快適な乗り心地だと思つたらあなたが繰船していたのね」

「こんなでかい船も乗りこなすのかい、相変わらずバケモンだね」

「いや、別におれ一人で動かしてる訳じゃないぞ。周りのスタッフの皆さんがいて初めて動くんだ、その監さん腕がいいからおかげでいつもよりいい繰船ができるよ」

「わかつてるじゃないか、悟。このままASEドライバーにしつくのはもつたとい、どうだアーカムにきてコイツで世界中の海を走り回らないか?」

「その提案はとても魅力的ですけど、俺にはASEドライバーにな

るつてこいつ夢がありますから」

「フッ…野暮なことを聞いてしまつたな、なら仕方がない。まあ船が必要になつたらいつでも声をかける、他の誰でもないお前が繩船するのであればいつでもコイツを貸してやる」

「ハイ、ありがとうございます！」

「ねえ優ちゃん、あそこで悟に引き抜きかけてる人つて何者？」

「ああ、あの人はスティーブン・H・フォスターって言ってな、アーカムの前会長の個人的な友人でもありアーカム財団海洋開発部特別顧問をやつてる人なんだよ。通称…」

「船長と呼んでくれ。それにしても優、この子が噂のお前の彼女だったのか。随分と可愛い子を捕まえたな」

「なつ!?」

「まあ若いうちはしようがないだろうがあんまり突き放してるとそのうち愛想つかされるぞ？でもこんな所まで会いに来るくらいだからまだまだ大丈夫か」

「べ、別にコイツとはそんなんじゃねーよ船長!!」

「そ、そうよ！何を言い出すのよ、この髭親父は…」

(アーカムの特別顧問捕まえて髭親父か、優も元からかなりフランクだしやつぱり似たもの同士だなコイツ等)

そんなことを考えている時だった、監視レーダーを見ていた乗組員が船長と悟に報告してきた。

「船長！3時の方角から巡洋艦が…！」

「何？」

「…巡洋艦ミサイル発射!？」

「ゲエ…マジかよ!？」

優が驚くのも無理はない、巡洋艦なら何処かの国の軍隊だ。その国軍の船が警告も無しにこきなつミサイルをぶち込んで来たのだ…海賊じゃあるまいし。

「惜はれのままだー 対空レーザー砲自動照準ー 四標ミサイル!!

「おいおい、「イッシュ調査船だろ?」

「ぶつ放せえ!」

「コノ……ドオン!! ガガアン!!!

赤い光線が飛んだかと思つと音速を越えるミサイルに直撃した、もうSFの世界だなコレは。

「」「ついおおおお!!」「

「敵ミサイル全弾撃墜!」

「なんだありやあ、いきなりぶつ放してきやがって?!」

「敵攻撃鑑判明! アメリカ海軍第七艦隊所属イージス巡洋艦『バレイフォージ』です! —

「なんだとお!?'」

「どこの無法国家じゃなくてよりに もよつてアメリカだと? なら原因は…

「…あんたいつの間に米軍なんかに喧嘩売つてたんだい? 時雨

「恨み買つてるとしたら俺じやなくて優だろ?」

「いや、芳乃達だな。またどつかで虚偽ヨケにしてきたのか?」

「こつちに話振らないでよ!」

「みんな結構余裕だな… といつか芳乃否定はしないんだな」

「まったく、最近の若い奴らは…」

艦長のつぶやきは喧騒響く操舵室に消えていった。

「対艦ミサイル消滅しました！迎撃された模様です」

「な……なんなんですかミスター・ラリー。あの船は!?」

「アーカム海洋開発部調査船『ロシナンテ』。あの有名なフォスター船長がアーカム技術部の粋を集めて建造した最新鋭船だよ、しかしまたかレーザー兵器まで搭載しているとはね」

「しかし警告も無しに対艦ミサイルを発射するなど……」

「大丈夫だ、責任は我々が取る。艦長……君は我々の指示に従っていればいい。でないと君の艦長としての能力を上層部に問わなければならぬ」

「クッ……」

恥々しい、上層部の命令とはいえ何故こんな男の言つ事を聞かねばならんのだ！

「艦長、何者なんですかあの男は？」

「ラリー・マーカスン、世界の兵器産業を牛耳る『トライデン特攻』の本部長だ。さすがのアメリカ海軍も奴らには頭が上がらないらしい」

クソ……兵器屋め、これではやつてることは海賊と変わらんではないか。なんとか被害は少なくせねばな……

『『バレイフォージ』対艦ミサイルを発射！同時に艦首を「ひかり」に向け

急速接近中です』

「フン…野郎、できるだけ近づいて短距離魚雷に賭けるつもりか。こっちを口の調査船だと思ってなめてやがるな…面舵一杯！通常動力停止！」

「『ビ』の世界の調査船にレーザー砲なんて搭載してんだい？」

「「「わあな（ね）」」

「悟!!

「了解！超電動推進に切り替えます!!」

「はあ？」

「超電動つてあんた…」

「いくぞロシナンテ、今お前に生命を吹き込んでやる！」

悟がそう言つとエンジンを切つて静かとなつた船内から静かに、しかし腹に響くような音がこだまする。おつたまげな海軍オイビども、コイツが俺が手塙にかけたロシナンテだ！――

シュイィイイイイイン……ドバアアアアア!!!

「うわっ！」 ググッ！

「キヤー！」 ガンッ！

「亞巳ー！」 ガシ！

「くつなんて加速だい！」

急激な加速によつて体に強烈なGが掛かる、おつとシートベルトをするように忠告するのを忘れていたから優達がすつ転んじましたな。亞巳つて嬢ちゃんは時雨がしつかり受け止めたが芳乃つて優の彼女は背面の壁まで転がつて行つちましたが…まあそこは優の不始末つて事でいいか。

「現在80ノットに加速中、巡航速度120ノットまで残り15秒!」

「魚雷は振り切ったみたいだな」

「おっそりしい船だな海上で時速200キロかよ…」

「フフン…コンピューター制御の高性能安定装置<sup>こうせいのうバランサー</sup>で安定しない海上でもコレだけの高速航行が可能だ、大抵の船なら旋回時に遠心力で引つくり返ってるぜ。ロシナンテにゃフル装備の原子力空母がまんま買えるだけの金額がかかってるんだ、一対一ならどんな戦艦相手でも負けねーよ」

「あの…船長」

「ん? どうした」

「悟君なんですが、実は…切つてるんです」

「は? 何を?」

「…高性能安定装置<sup>こうせいのうバランサー</sup>をです」

「…は?」

「悟君なんですが、実は…切つてるんです」

何を言つてるんだ副艦長<sup>コイツ</sup>は? サッキも優達に説明した通り高性能安定装置があるから旋回できるんだぞ?!

「いえ、実は悟君が通常航行の時からなにやら違和感があると言つていまして…試しにバルランサーを切つてみたところ彼も満足し船も問題なく安定していたので放置していましたが…」

「…今は?」

「モチロン切つたままです…」

「…旋回してたよな?」

「ええ…そりやもうバッヂリと…」

「そうか… そうか」

「田舎鳥よ…お前はいったいどんな化物を育てているんだ、いや流石は真の息子とこいつとか?」

「船長！敵艦を捕らえました、このまま相手の駆動系を狙いましょう！」

そんな俺がバカみたいな思考を無視に溺れている間も悟はしつかりと自分の仕事をしていた、イカンイカン。

「そ、そうだな！よし、全砲門敵艦エンジンに照準！発射と同時に全力離脱しろ悟！」

「「「了解!!!」」」

パシュウウウン……ズドン!!

そして悟は時速200キロのスピードで敵艦とすれ違ひ砲手の船員との絶妙なコンビネーションで敵艦にレーザーを叩き込む事に成功させた、自分でなく周りの者にも影響を与える…悟は既に超一流に足を踏み込んでやがるな、後継者には苦労してやらねーな百舌鳥のヤツ。

「やつたあ！」

「まだです！敵艦ミサイル発射！ハープーン4基！」

「ちい！肉を切らせて骨を絶ちに来たか、後方レーザー発射！全基打ち落とせ！」

ク…まさか奴らの狙いは…

パシュッパシュッ！…ズウン…

「船長！レーザーエネルギー・ダウン！これ以上打ち出せません！」

「チツ！！」

やはり！レーザーの特性を熟知してゐる奴があの船には乗っていた

か、なれば恐りへ相手は…

「一基迫つてこますー」のままだと直撃します！」

「うちの船が慌てて報告してくれる、万事休すか!?

「ええー!!」

「クツー時雨ー！」

「落ち着け亞巳、今コロシナント操縦してこるのは話だ…アイツに任せろ

時雨が落ち着いた声色で話している…そうだ今ロシナンテの舵を握っているのはASERドライバー斑鳩悟、なれば…

「超電動エンジンを停止させてください！早く！」

「なに言つてんだお前！」「どうしてださーーー！」「わっ!?」

「なんで船を止めるんだ！」

「だまつてろお前等ー！」

悟は動力計を操作していた船員を押しのけると動力を操作するレバーを握った、周りの船員が引き剥がそつとするが俺がそれを押し留める。悟に舵を握らせていた俺の判断に他の船員も渋々ながらも従つた、お前に命を預けたぞ…話。

「うよつと話ー！何考えてんのよー恐怖のあまりどうかしきやつたの!?」

「幽霊島に着く前にこっちが幽霊になるなんてシャレになんないねえ！」

芳乃と亞巳の言葉を頭の中からシャットアウトする、タイミングがズレたらこの艦が沈む…失敗は許されない！

( 3 · · · 2 · · · 1 · · · ココだ！ )

「今だ！」 ガツ！

動力レバーを全開に入れる…この船の動力がいま超電導になつて いるなら…

ブウウウウン!! バシュウウウ…

そして狙い通りミサイルは空へむかって飛んでいった…ふう助かつた。

「…………うおおおおおおおおおお!!!!!!」

「なになに、どうこうことコレ？」

「超電導推進の始動時に発生する強電磁界を最大開放してミサイルの電子機器を狂わせたんだ、しかしハープーンは目標を補足すると跳ね上がり上方から突入するようにセットされているから直前まで引き付ける必要があつたんだ」

「ハイ、以前ミニサイルで狙われた時に仲間がミサイルをかわすために電磁気を狂わせる仕掛けを使つたんです。だから今回もいけるんじゃないのかと…」

「一瞬でもタイミングがずれたら俺たちは海の藻屑だつた…この窮地にこんな機転が利くとは、百舌鳥の奴いつたいどんな育て方してんだ？」

「いや、なんかもうバズーカにしろミニサイルにしろ狙われてばっかり なんで俺」

「ASEドライバーって…」

「泣けてくるねえ…」

『言わないでくれ西口、芳乃。俺だつてたまには命懸けにならなによ  
うな仕事がしたいと思つてこむれ… 多分無理だろひだじ。』

「やられましたねえ、ミスター・ボーマン。しかしあの機転のよさと見  
事なタイミングはフォスター船長のソレではないな、あれが噂のAS  
Eドライバーですか？」

「どうやらいい仲間にめぐり合えたようだな… フツ 御神苗 優、この  
私が手塩に掛けて育てた教え子をこの老体でどこまで追い詰められ  
るか楽しみだ…」

## 『恩師との再会』

「問題の幽霊島は東経180度22分、北緯14度51分辺りの位置に出現する… 出現時間は約10時間。今までのパターン通りだと次の出現予定は明日明朝だ」

優がロシナンテ内の作戦室で今までの経緯から推測されたデータを示す、その顔はあるドレゼントを開ける前の子供のようだ。

「まあ本当に次ぎも出現すればの話だろ？」

「ふふん、過去にこの海域で飛行機や船が消えた事件もコイツのせいかもしけんぞ…」

「ハハハ… 船長、そんなまさか」

「いや、考えられないこともないねえ」

「そうね、例え不明確なものにしろ島ぐらいの巨大な代物が急に出現するんだもの」

「ああ、例えどんな事が起こってもおかしくはないな」

「開けてびっくり玉手箱つてか、今からわくわくすんなあ オイ」

時雨の言葉に優が笑つて頷いた、この二人中々似たもの同士である。

霧が立ち込める早朝、甲板に腰掛ける優達に船長が声をかけた。

「朝の早いガキ共だ、そんなに睨んでなくとも現れたら当番に報告せ  
せんぞ？」

せんそ?

なくひせな

「そうそう、今回逃したら次がいつあるかわかりませんしー

「ふふふ… おまえ等、世界中の神祕を見るつむりか？」

「ああ俺は欲張りだからね、生きてるうちは神秘を神

うのはもつたいねーじゃねーか

優らしにや優らしな

「ハハ、かみたれ！」

卷之三

卷之三

ピクツ  
:

その時、海を見ていた時雨と優が異変に感づいた。

一一一

「ん? どうしたんだい、時雨」

だ！」  
船長像町に分作一セの電二機器が不調になつたる方に

「……氣にするな……悟……」

スウウウウウウ

「ああ、多分……あれのせいだな……」

優と時雨が凝視する海上、そこに静かに現れたのは——幾つもの

ピリカ//シドが点在する森が<sup>おお</sup>覆い茂る大きな島だった

「ブカウ」……

空気を振動させ島にノイズがはしる

「し……島が歪んで見える……」  
「へへへ……やつとおいでなすつたぜ」  
「ああ、いつでなきゃ人生面白くないな」  
「各自、幽靈島に上陸準備!!」

やつして優達は船長の命令の元、小型のゴムボートに乗り一路幽靈島を田指した。

「いいんですか？ミスター・ラリー、彼一人で行かせて？」  
「大丈夫だよ、その為に彼を連れて来たのだからな<sup>ボーマン</sup>」  
「……ミスター・ラリー、そろそろ私達にも教えてください。あの島はいつたい何なのです？まさか海図には何も無い所にいきなり島が出 現するとは……」  
「それがわかつていれば我々も<sup>トライアント</sup>こんな所まで足を運ばんよ。実は今から20年前にもあの島はこの場所に出現してくるんだ」  
「なんですか？」  
「その時も米海軍が動き出し島に調査員を送っている、だが調査の途

中で何者かに襲われ誰一人として帰還せずに…島はまた忽然と消えてしまった

「どうやら全体的な大きさはエジプトのピラミッドよりも小さいが石一個の重さは数百トンを超えてるだらうな」

調査を始めて1時間、明らかになる内容はやはりこの遺跡を造った文明はかなり高度な物だったという事実を証明するモノばかりだった。

「ああ、こんな『カイロ』…宇宙ロケット用のクレーンでも持ち上げられっこねーぜ」

「しかもコレだけの巨石が隙間にカミソリ一枚入りそつに無いほど精密に積み上げられてる、コイツを作った連中ってのは相当高い文明を持つてたみたいだな」

ブウウウウン…

優と船長がピラミッドの外壁で調査をしながら会話をしているとまた空気を振るわせる音が聞こえ、島の景色とその場に居る優達にノイズが走った。

「しつかし妙な島ね…これって空間が安定しないんじゃないの？」

「まるで壊れたテレビだな…ノイズが走ってるみたいだ」

「この島が消える理由はこのピラミッド群にあるかもしれない、この周辺のエネルギー反応はちよつと異常すぎる…」

「島を丸ごと消しちまつしまのつか…恐らくトライデントの狙いはそ

の動力源の秘密か何かだろ」「

そうして優達がピラミッドを隈なく調査していると最下段の側面に何者かが爆発物で空けたような穴があつた。

「内部からは何も見つかりませんでした」

「しかし妙だな…」この爆発跡は間違いなく<sup>くま</sup> 4だぜ、しかも爆発してから数ヶ月も経つてないようだ  
「プラスチック爆弾

「ん? でもソレって計算合わぬないか、優?」この島が出現してからまだ1週間も経っていないんだろう?」

「船長!! こっちへ来て下さい! 憂いものがあります!!」

そう言つて船の乗組員が大慌てでやつて來た。優達が急いでそちらに向かうと…そこには一隻の駆逐艦が鎮座していた。

「これは…第一次世界大戦中の米海軍駆逐艦「エルドリッヂ」!? 「なんでこんなものがここに…」

「なんだと?! あの「エルドリッヂ」があそこに?! しかしあの船は大戦中の実験が終わつたあと無事戻つてきていたと…」

「ふふふ… そんなものは君達得意の隠蔽工作ででつち上げたんだろう。それだけじゃない、報告によるとあの島にはバニユーダトライアングルや世界中の様々な海域で消息を絶つた船舶や飛行機の残骸が所構わず散らばつているらしい。まさにあの島は地球上に発生したブラックホールの様なものだ…」

「ツ……!?」

「ま、その謎も時期に明らかになるさ。ボーマン君が無事に例のもの

を見つけて出し戻還せられればな

我々が調査を進めると更に驚くべきものが多い数出てきた、いやはや  
船長の船に副長として乗船して長いがまだまだ驚かされることで  
いっぽいだな。

「しつかしすげーや、エルドリッヂや日本の歎傍うねびの他にも確認された  
船舶6隻に飛行機十数機

「ああそれに時間の流れも狂ってるみたいだな」

「どうこうことです船長？」

「あっちの帆船を見てみる唔、どうみても16世紀ころに作られた物  
なのに腐食から見ても10年と経っていない。なのに奥の20世紀  
初頭の客船はボロボロだ」

「本当だ…」

確かに、あちらのジェット戦闘機は昨日落ちてきたかのように痛み  
具合があまり見られなかつたがそのプロペラ機なんぞ殆ど土に  
返つてしまつていてる。

そんな事を考えていた時だった。

「!?

「ん? どうした優」

「……何か来る!?

「米軍か!?

「いや…もつと、別な何かだ…」

ズズン…!!

御神苗君が何かを察知し身構えた前方から土煙が上がった。そこから出てきたのは……腕が6本ある石像!?といふか動いてるぞあれ!?

「カーリー像だ!!

「うわあ!? こっちからも来た!?」

後方に居た船員が声を上げる、びつぜり抜まれてしまつたよつだ!くつ、銃の扱いは苦手なのがそつも言つてられんか!

「撃てえ!!

タン、ツタン、タタン!! チュイン!キン!

弾丸が弾かれた!? 唯の右では無いと言つ!とか!!

「ダメだ!? 銃が効かない!!

「うわあああ!!」

「」のままではやられる…そう思つて情けなくも田を廻つて身を屈めた瞬間…

「スラッシュキック!!! ズガン!!

「いくぞ! ハーペッド!! バキイ!!

聞こえてきたのは奴らの武器が私の身を引き裂く音ではなく、元気な子供の声と石造が吹つ飛ばされる音だった。

「うわー」「ひつー」

「悟！お前は右側を！俺は反対から行く！」

「OKー優！」

「…おー、優はまだしもなんで悟はあんなおもちゃで戦えるんだ？」

船長の咳きは尤もだ、銃が効かない相手にさも平然と肉弾戦？を挑むとは…これが若さか。

「流石はASEドライバーにスプリガン…」

「つお前等！ぼさつとしてないで一人の援護に回れ!!」

「リョ、了解!!」

呆気に取られてしまつたが彼らだけに任せた訳にもいかない、俺はボーッと間抜け面を晒している部下に発破をかけ御神苗君達の援護に向かつた。

「いつたい何だつたんだ…こいつら」

「多分ガーディアンだ、この島への侵入者を防ぐ為の…」

「おい、優。どうやら仲間が来たみたいだ、続々とやってくるぞ…」

「ああ、このままじゃ船の方も危ねーなん? オイ悟、芳乃達はどういつた!?

「あれ? そういうえば…時雨もいないぞ!?

「あいつ等…いや、時雨が付いてるからなんとかなるだろうが…」

「優! 僕たちは先に船へと向かう、お前はあの子達を迎えて来い!」

「船長…了解、船で待つてくれ! 悟、後は頼んだ!」

「わかった、優も皆を頼む!」

そうして優は時雨達の探索へ向かつた、島はあるでこの先に起ころ事を予兆するかのように暗雲が立ち込めていた。

「ふん… [冗談じゃないわよ。いちいちあんた達の調査なんかに付か  
合つてらんな]っての」

私は優ちゃん達が調査に精を出すようだつたので「じゃりとあの  
場を抜け出してきた、それに気が付いたのかいつも通り亜巳も一緒に  
付いてきた。

「そうかい？なかなか興味深かつたよ？」

「あのねえ亜巳、あんなの調べたといひで一銭にもなんないのよ？ 結  
果なら後で聞けばいいじゃない！」

「なるほどねえ… それが御神苗に会つ口実になるつて話かい」

「… 最近そつち方向で突っ込んでくる事が多いけど何？ しーちゃんと  
上手くいってない訳？」

「あたしらを見てそんな事言えるのかい？」

「… 『ちやーさま』

まつたく、最近の亜巳つてば何かとそつち方面の話を振つてくれるん  
だから… しーちゃんと上手くいってるの解るけど、そんな余裕がま  
してると自分の所の妹辺りに足下すべられるわよ？ この間会つたあ  
の子達がしーちゃんに向ける視線が亜巳あんたと一緒にだつたって教えてあ  
げたらどんな顔するのかしらね、ククク…

ブウウウウウウン…

また島にノイズが走つた… おかしいわね、さつきより間隔が短く

なってないかしら?

「それ」「しても変な島だねえ」

「ええ、それにさつきより膨張が大きくなってるわ。さつむと用事を済ませちゃこましょ」「ひ

なんだか騒がしい感じがする…何もなければいいけど。

「…芳乃」

「ん? …アレは」

亜巳が示す方向を見ると、そこには一人の男性と見られるミイラがあつた…でも、コレも妙ね。

「だいたい死んでから2~3ヶ月つて所だね」

「さっきの爆発跡と大体同じくらいね、…ん? 何かしらコレ

その死体の横にあつたのは頑丈なアタッシュケース、その中から何かしらの古代語で書かれた石盤が出てきた!

「まあスゴイ…やっとお金になるような物が見つかったわ!」

「でも一体何なんだ」「コレ?」

「さあ…でも、このミイラが後生大事に抱えていたって事は口の装飾品では無いって感じね」

その会話の直後、死体の隣に鎮座していた船の壁が吹き飛んだ!?  
嘘、気配は感じなかつたわよ!?

ズウウウウン!!

そこから現れたのは一体のカーリー像だった。

「ちつ…なんだい」「イツは!?」

私達に向かつてきたカーリー像に向かつて亜巳が素手で構える、それにしてもなんでこの子銃持つたあたしより強いんだろう？そんな事を考えているとカーリー像の首輪が淡く光を持っているのが目にとまつた…あれは…?

「待つて、亜巳…あなたもやめなさい…」

「!? 何を言い出すんだい、芳乃！」

「こ」の子、首輪に御靈が宿っているわ。言葉は通じるはず… そうよね？ 安心して、私達はあなたの敵じゃないわ。ただ、この島を調査しに来ただけなのよ

「……」

「こ」いつは驚いたね…

よかつた動きが止まつた、どうやら素直な子みたいね。

「ね？ あなたはいい子ね、さあ… 私達に教えてちょうだい。この島の情報の全てをね…」

「ふん、サンダー・ボルトか… やつかいなモンが転がつてやがるぜ。それにしても芳乃<sup>アイツ</sup>等いつたいドコまで行きやがったんだ！」

私の目前を一人喚きながら優が駆けていく、随分と騒がしくなつたな…。

『もし島で奴と出くわしたらどうすればいい？』

『ボーマン君、君の任務はあくまでも20年前の調査の際に持ち帰れなかつたデータプレートを探しだし無事あの島から持ち出す事だ。そのデータプレートはある島のピラミッドの中から発掘された物で、異空間を彷徨するあの島の動力源の謎を探る唯一の手がかりだ。だが御神苗優が出しゃばつてきて本来の任務に支障をきたすような事があれば、その時は迷わず殺すがいい…』

(！？…ふん、左右に一人ついてきてるな。敵の特殊部隊か…しかしオレと同じ歩行速度で等間隔についてくるとは…相当やつかいな相手だぜ、だけどな…)

タタタタッタタン！（避けたか！中々動きがいいな…でも…）

射撃による牽制か…悪くない判断だ…

バシュ！ババ！（へッ予想通りだぜ！）

避ける先を見越しての銃での牽制、確かに理に適つてゐる。狙いも悪くは無い…

タツタタツ！ドンドンドン!!（一人めつけ！喰らえ!!）

だがそれはセオリーの中での事だ。

タタタタ！タン！タン！「逃がすか!!」

それではセオリーの外に居る私には通用しない!!

フウ……ビシイ!!

「馬鹿な！消えた!?」

ズダダダダダダッ!! 「うわあ！」

(なんだ!? 当たったと思つたら銃弾がすり抜けて向こうの木に着弾した!? そしてソイツが消えたと思つたら今度は横から新しい奴の気配が… 一体どうなつてんだ!?)

考え事に氣を取られすぎだな、だから足元が<sub>おろそ</sub>疎かになるのだ馬鹿者!!

ピンッ…「しまつ…」

ドドン!!!

「つおおひ…」「ドカン!!」「ぐつ！クソッ!!」

『ふふふ… その様子だとかなり困惑しているようだな。久しぶりだな優…かれこれ一年ぶりか』

「…そ、その声はまさか…ボーマン教官か!?」

『…ふん、違うな。現在はおまえ達が忌み嫌つ「トライデント」の行動部隊の小佐だよ。もっとも現時点での身分は米国軍<sub>アメリカ</sub>につきになつているがな』

「たしかに教官はアーカムから突然姿を消したと聞いていたが…まさか奴らに肩入れしてるとは… でも何でだ！スプリガンの中でもとびきり使命感が強かつたあんたが何故裏切つた!?」

『…ふふふ、そんな事はお前には関係なかつ…。私はお前を殺すために全力で戦うのみ!! 今のお前にこの私を倒せるかな?』

「クッ…」（気配は近い…ソノか？）

フフフ… そろそろ我慢が出来なくなる頃か…

ダッ… ザン！ 「な？」

『ほら… 熱くなるとこいつたスピーカーに引っかかる等といつ初步的なミスをする。私はお前に「戦いは冷静に行え」と何度も言ったな』

ズダダダダダン!!!

「うお… せういえば聞いたことがあるぞ、スプリガンの中に自分をもう一人自由に出現させる特殊能力をもつ人間がいると…」

ほう、気が付いたか… ならば！

(モード) タン… … フッ

「また消えた！まさか、コレがあの…」

それはフェイクだ、そして…

「上か！」 タンタンタン!! フッ…

「な？」

「… おまえの負けだよ優、今動けばお前の頸動脈を確実に切り裂く

上を回にして背後に回り込みナイフを頸動脈に当てる、せういえば優にコレを見せたのは初めてか。逆を言えばコレを使わなくては追い込めなかつたといつことだが…

「… 教官、まさかあんたがあの二重身の使い手だったとは知らなかつ  
ドップベルゲンガー

たぜ。初めて体験したが幻だけでなく氣配まで存在させて攻撃できるとはな……最後に教えてくれ、これほどの力を持つあんたがなんでアーカムを裏切ったんだ!?」

最後にか…そうだな、私は今その為に此処にいるのだ!

(や、やられむ…!?)

「そこまでだ!!」

「何!? クツッ！」

ズダンッ!! なんとー 私がここまで接近されて氣配を感じなかつた  
だと!?

「時雨!? お前今までどいつもこやがつた!」

「いや、ずっと芳乃達の側にいたんだが妙な氣配を感じてな。氣になつて来てみたら…どうやら面白こ細さんとやり合つてるな

田の前に立つていたのはもう一つの資料にあつた優と並ぶ要注意人物…

「君があの岬越寺秋雨の息子、岬越寺時雨か…」

「はあ…親父が有名ってのはなかなか面倒だな

「いや、君自身も有名だよ。特A級達人に最も近い男としてね

「いや、特A級達人なんてわりと『口』『口』いますからね?」

「その力が特殊能力を持ったスプリガントと同等とあれば警戒もする、

先ほどの投げも見事だった。まさかこの歳で投げられてしまつとは……もしそのまま極めに來ていたら腕の一本でも切り落とせたんだが、見極めもいいようだな。さうする？一人が「あんた達こんな時になにやつてんのよ！」ん？」

我々が会話をしていると一人の少女が割り込んできた、はて？ 調査資料の中に女子の情報は無かつたはずだが…

「芳乃！お前等ど」ほつき歩いてやがつた！

「今はそんな事言つてる場合ぢゃないわよ！ つづき「口寄せ」であるガーディアンに憑いてた御靈からこの島の秘密を全部聞いたわ！ この島の空間移動装置は暴走を始めているのよ！ 早くなんとかしないと… 今度この島が消える時には太平洋全域がその影響で異空間にもつて行かれるわ！」

「な、なんだつて!?」

「……」

消滅の危険性は聞かされていただがそこまで広域だったのか？

「この島は本来、来るべき大異変に備えて異空間に自由に行き来できるように改造された人工の避難島だつたのや。あの巨大なピラミッドは“地球”から巨大なエネルギーを呼び出しこの島を異空間に固定固定するためのものだつたみたいだねえ…」

「だけど、異変が早く始まつてしまつたため急いでしらえで作ったそのシステムを制御・安定させる前にこの島にいた人々は死に絶えたのよ。そしてこの島は今でも時間と空間の狭間をさまよつてゐるの」

「まさかその間ずっとピラミッドは…」

「ああ、エネルギーを集めてたみたいだね」

「もうこの島に蓄積された膨大なエネルギーは完全に許容量を越えてはじけ飛び寸前よ、次にこの島が異空間に消えるまでにピラミッドを破壊しないと長い間蓄積された太平洋一帯を飲み込んで異空間に弾

やとばすほどのエネルギーが一気に放出されちゃう!!

「じゃあ、ここにいる俺たちどういふか…」

「ええ、私たちの住む日本も別の空間で吹き飛ばされるわ!!」

どうやら何事でまんじゅー、コレも宿命か…

## 『次なる可能性』

「もう……しかしその情報は確かなのか？どうも信じられない

教官が疑問の声を上げる、確かにこきなり言われても信じられるような内容じゃねーが…

ブブゥウン!!

「…………!!」

その時今まで以上のノイズがこの場に走った、こりゃ芳乃の言つとおりマズイな。

「……わかった、とうあえず一時休戦にしよつ

「…………」

一時……か。

「しかし、私の乗っていた「パイレーフォージ」の装備ではあのペリヴィッドは破壊不可能だ。ロシナンテとの戦いで相当浪費したからな、一度この場から撤退して米<sub>アメリカ</sub>軍に爆撃してもらひつ暇もないよつだ…

「ちよつ、おじさん！もつと考えてよ！」

「流石にこのまま指をくわえてどこかに飛ばされるつてのもねえ…

「そうよ！冗談じゃないわよ！かよわい乙女がこんなへんぴな島で人生をまつとうしたくないわ！」

「いや、あてが無いこともないぜ」

「本当か、優？」

「さつすがスプリガン！頼りになるわ！」

「期待すんなよ、まだどうだかわからねーからな」

「少しでも希望があるならなんでもいいよ」

あんなモンに頼ったくはねーが、背中に腹は変えられねーか。

(?...アレは.....)

「...なるほど、サンダー・ボルトか.....」

「...こんな物まで飲み込んでいたのか、この島は...」

時雨はどうやら知っているみたいだな、といつつかロイツの知識の深さには毎度毎度驚かされるな。

「いつたいなんなんだい」の飛行機は?

「...第一次世界大戦末期、連合軍が東京に落とすはずだった原子爆弾を積んだB-1-29が輸送途中で消息不明になつたんだ」

「ああ...その機体名がこの「サンダー・ボルト」だ、このつに搭載された原爆を使ってこの島のピラミッドを破壊する...」

「しかしロイツはまだ使えるのかい?」

その言葉に教官が中の積荷を確認する。

「つむ、機体の痛み具合からしてここに落ちてから1、2年といつたところだろ? まだ半減期は迎えていないはずだ」

「教官...あなたは爆弾に関してかなりの専門家だ、このつの気圧信管を时限信管に変えることはできるか?」

「むう...原子爆弾なんぞ触つたこともないがこの際そんなことも言ってられんだろう?」

「じゃあ俺たちはそこからきてとーなもんを搜してくらあ  
「? どうしたのよ優ちゃん、さつきから不機嫌な顔しちゃって  
「わからんでもないがな…」

「どうこうことだい?」

「…本来ならあんなもんに助けられたくないんだよ、アレが東京に落ちたら俺たちは今頃この世にいなかつたかもしだぜ?」

まつたく……不甲斐ねえぜ。

『ダメだ! 優、何度も言つたらわかるんだ!』

ドン! ズサアッ!

『いいか? 戦いにおいて最も重要なのは鋭い洞察力と冷静な判断力…  
そして任務遂行のために私は私情を捨てる徹底した非情さだ。相変わらずお前は相手を追い込んだ時に優しさや甘さからスキができる…  
そんな事じゃお前だけでなくほかの仲間で犠牲になることがわからんか!』

『…』

『…優、お前は自らスプリガンになる事を志願したはずだ。確かに私は最強のスプリガンになる資質はもつてゐる、だから多少厳しくとも私の持つてゐる全てをお前に教え込むつもりだ』

『…ボーマン教育』

『私もこの通りもつ老体だ、この商売からの引退も近い。頑張れよ優! これからアーカムは若いお前が支えていくんだぞ!!』

「よし…セット完了だ、後はこいつが上手く爆発してくれるかだな…」  
「それじゃあ私たちも早く脱出しましょ、こんな島もう『つよ』  
「ところが、そう言つわけにはいかないんだ…お嬢さん、何処で拾つた  
のかは知らないがそのケースは実は私が搜していた物でね…」

フッ…

そういうと爺さんから気配が一つに分かれた…しまった！

「逃げろ！芳乃!!」  
「え？「ガツ！」キャラーッ!!」  
「芳乃お!!」  
「ず、随分変わった技をお持ちで…」

芳乃後ろにはもう一人のボーマンがナイフを構えていた、油断していたか…。

「このケースの中には、この島の動力の秘密が書かれているデータブ  
レートが入っているはずだ。私の任務はそのブレートを島から持ち  
出して「トライデント」に献上することでな。なに…素直にケースを  
渡せば手荒なことはしない、だが渡さなければお嬢ちゃんを殺しお  
前達も殺す！」  
「…芳乃、そのケースを渡してやれ」

ボーマンの物語に優が応えた、でも芳乃ヤシなら……

「ええー!! で、でも…」

ぱっら、やっぽり愚図った。

「あのねえ芳乃、掛かっているのはあなたの命なんだよ?」「……わかったわよ、渡すから離しなむよー。」

凄いな、あそこまで言つて逆ギレか。普段の西口の苦勞が垣間見えるな…

「まつたく、余計な物拾つてきて…

「そんな、しーひやんまでえ…」

「芳乃、時雨、西口、ロシナンントに戻つて船長に説明しろ。いざとなつたらお前たちだけでも脱出じろも」

「えつ!」

優…お前…

「あんた、あのケースを取り戻すつもりかい?」

「ショーゲナーだらー教官とは戦いたくなかったが俺もスプリガンだ、トライアンフに遺跡が悪用されるのを見逃すわけにはいかねえ…」

「ふん、やつ来ると思つて時限信管を一時間半後にセッティングしてある…勝負をつけるには十分な時間だ」

「ちよ、ちょっと止めなさいよあんた達…そんなことやつてる場合じやなこでしょー…」

「うるせーな! テメーはひとつとと消える!!」

「…モー! ばかちん…じゅあとつとと消えるわよ! あんたなんかこの…」

幽靈島と一緒に幽靈にでもなっちゃえばいいのよ…」

そう言つて芳乃はズカズカと歩いていった、それにしてもその言い方はマズインじやないか？ 優。

「あ、芳乃！ … ハア、行くよ時雨… 時雨？」

「… お前も行け亜巳」

「ツ 何言つてんだ!? 時雨!!」

「俺は立会人をさせてもりつよ… スプリガン対元スプリガン、そういう拌めるモノじやないしな。………… よろしいかな？ お一方」

「私は構わん、だが邪魔だけはしないよう」

「… けつ！ 勝手にしろ」

「はあ… まったく、さつわと帰つてくるんだよ…」

「あいよ~」

「お前も氣づいているだろ？ が私の着ているスーツはお前と同じ  
A・M スーツだ、それに持つてゐるナイフも高硬度の  
精神感応金属合金製だよ。装備的にはお前と対等だ、後は…」

フッ…（消えた!?)

ギン!! ガギギギン!

（後ろだと?! いつのま… ックー! のナイフ捌き… かわしきれねえ!?)

ズシャー！「ぐあ！」

「お前が私の一重鳥<sup>アツペルガング</sup>とナイフから逃れることが出来るかだな、いくら教え子だったといえど……容赦はぜんぞ!!」

ザザザザザザザザザザザザザッッ!!!

「船長、石像に囲まれました…どうします!?」

「決まってるだろ？、いうなつたら肉弾戦だ！ いけるな？ 悟」「ハイ！」

「正氣ですか船長!? それに悟君まで!?」

「諦めたうりそこで終わりです副長、少しでも可能性があるならそこには賭けるべきです」

「ふつ…流石はASEP<sup>アシード</sup>ライバーだ。それに優にだつて壊せたんだ、用はあきらめけやいかんという事だ」

殴り合いは久しぶりだが悟一人に任せられんしな、それに久々に暴れるのも悪くは無いか。そんな事を考えていた時だった、隣の林から今まで姿を見なかつた嬢ちゃん達が帰ってきたのは。

「やめなさい!!

「なつ、芳乃！ それに亞巳まで！ 無事だったのか!?」

「お陰様でねえ」

「一の人にあなた達の敵でないわ！ この島の物は何も持つていかな  
いから大人しく私達を船へ帰して…」

「…………」

ズシュウウウウウウ……

「コイツは驚いた…さつきまで俺達を囮んでいた石造たちが道を開けちまた。

「石像達が…」

「こんな簡単な事で止まつてくれたのか…」

「おじさん達大丈夫?」

「お蔭様でな、ところで優達はどうしたんだ?」

「フン…もう知らないわよ、あんなバカな奴ら!」

「?」

「悪い病氣が出ちまつてねえ、まあ船で説明するからやつせといこからズラかるよ

「時雨…優…」

優…何を言つたか知らねーが女の扱いはもう少し丁寧にしろよ、  
まったく。

「スパツ!

「くそおー」「ブン! フッ…

右肩を切り裂かれたか、傷は浅いがこう何度も喰らつちやマズイ  
な。オマケにこいつの攻撃はまったく当たらんがらねえ…

(今のは優が避けるのが少しでも遅かったら確実に頸動脈を切り裂かれていたな…ナイフの腕前なら番坂のじー様に引けをとらないか)

「ふん…それが今のお前の実力か?まだ私との戦いに迷いが生じているよつだな、そんな甘いことでよく今まで生き延びることができたものだ」フッ…  
「クッ…!?

また気配が分かれた!?…右!!

シャツ!!

「お前は戦いの非情さを解つていい、私は本気でお前を殺す!!」

身体を捻つてナイフ教官の右のナイフをかわし、左のナイフをこちらのナイフで捌こうとした時…

ズバッ!!!

グッ、後ろから背中を切られた…

「……それが私の任務だからな!!」

「なんだってえ!?ボーマンが!?…確かに奴がアーカムをやめたとは聞

いていたが、まさか「トライテント」の一員になつていたとは…それが本当ならかなりヤバイぜ。ボーマンのナイフさばきは世界でも5本の指に入る腕前だ、それに奴には「ドジペルゲンガー」重身がある…どう考へても優に勝ち田はねえ

「え、そんな…」

あのお嬢さん只者じやないことは思つたけどそんなに強いの!?

「…こや、やうとは限らなつよ」

「ど「うこ「う」とだ匪口?」

「もし御神苗に勝ち田のない戦いならあの場で時雨の奴が参戦してい  
たはずや、でもアイツは立会人としてあの場に残つた」

「とこ「う」とは…」

「……少なくとも勝負にはなるつて事わ」

やうよね…優ちやんなら、やつてくれるわよね。

ザパアン!!」「「「つあおおお!!??」」

島を渦巻くエネルギーが波を高くし船体に打ち付けられる、乗り物  
に弱い奴ならとっくにグロッキーね。

「船長ーもの凄いエネルギー反応です! エネルギーの塊が島を包み込  
み、さらに拡大しています!!」

「フフフ…島が消える前兆のようだな、そろそろ我々もケリをつけ  
とするか…」

「はあ…はあ…っはあ…」

「どうした優、逃げ回っているだけじゃ私には勝てないぞ？」

いや、満身創痍だが優の皿の色が変わった。……ついに攻略の糸口  
を掴んだか。

(…だんだん解つてきたぞ、一重身の正体が…)

シュン！ ボガッ!!

優がナイフをかわして蹴りで一重身をかき消す、今の蹴りはダメー  
ジを与えるものでなくかき消す事を目的とした蹴りだな。

(…こいつは違う…)

ザッ！ ブン!!

(…こいつも違う…本当の実体は…)

左サイドから襲ってきたボーマンを無視してさりに奥にいるボー  
マンに攻撃を仕掛けるように…

フウッ

「なに…!?」

見せかけて…

「そこだあ!!」

ドガツ !!

そのせりひに奥にいた実体のボーマンに蹴りを見舞った。

ドサツ !

「グッ !!

「教官、あんたの一重身ドツベルゲンガの正体がわかりましたよ… どうこう原理かわからないが、あんたは気配と実体を分離できるんだろ? つまり気配だけを残して実体は次の攻撃場所に移動できるんだ」

つまり、気配のない方が本体って事になる。直接対峙しながらよく気がついたな、優! それに……

「ふふふ…」この状況下でそいつを見破るとは大した洞察力だ。確かに私の二重身ドツベルゲンガは催眠術の一種にすぎん、所詮こけおどしだ。だが… お前に私のナイフが見極められるかな?」

シッシッシ!!

ボーマンは両手に構えたナイフを優に向かつて縦横無尽に振りかざすが…

(!!… 見える!? 教官のナイフに慣れてきたのか?)

実戦に勝る修行は無い、優も一つ強さの段階を上ったか。だとしたら、やはりボーマンさんの目的は…

ギンツ !!

「ぐわっ!!

ヒュン……カツ！

ボーマンのナイフの一本を優が弾いた、つづーか避けなかつたら俺に刺さつてたぞ？優。

「なつ!?

「教官…もう止めましょ。もう勝負は見えましたーこれ以上戦え  
ば、俺…教官を殺してしまいます!!」

「……」

フッ…

「なつ!? 「ガツ！」 ック！」

無言で二重身ドツベルゲンガを繰り出して残るナイフで襲い掛かるボーマンさんの攻撃を優が受け止める、優の成長だけが目的では無いと言う事か!?  
ならば…その先にあるものは…

「ふん、確かに相当腕を上げたようだが糲がるな！任務遂行の為には  
非情になれと何度も言わせる！そんな様子ではお前の為に犠牲になつ  
た人間が大勢いるだろつ!!」

「……!!」

フッ…

「(来る…?) 後ろ!!」

教官のナイフと俺のナイフが交錯する！クソ！教官を止めるには  
これしか方法が…！

「グザツ!!」

「なつ!?」

俺達に聞こえたのは確かに刃物が肉を突き刺す音だった、しかしソレは俺達の身体からではなく間に入った時雨の両腕から聞こえたものだった。

「……双方それまで、この勝負…御神苗優の勝ちとする」

「邪魔をするな若造！まだ勝負は終わっていいない！」

「優はあなたのドッペルゲンガーを見抜いた、それにナイフの腕前もこの戦いの中で成長を遂げてあなたを越えたようです。これ以上の幕引きはありません」

「優、戦場での決着は死を持つて決すると教えたはずだぞ！」

「ボーイマン教官…」

「ふざけるな!!!」

「!?」

「あなた達は人殺しの機械マシーンではなく人間だ、なら……もういいでしょうボーイマンさん、あなたが命を賭して伝えようとした事がちゃんと伝わったのは、さつきの優の目を見れば解った筈です…それに優に師匠殺しなんて十字架を背負わせないでやつてください」

「なつ!?」

時雨：ありがとう。

「……ボーマン教官、俺はあんたのおかげで成長する事ができた。でも

まだまだ至らなこといろいろなんて立派じある、だからまだ教えてほしい事が沢山あるんだ！頼む、どうか生きててくれ！」

「……失礼ですがボーマンやべ、貴方は敗者です。勝者の優の言い分を無視して安易に死を選ぶ事は出来ないと想いますが？」

「オイ時雨!!」

「いや優よ、彼の言つことは正しい。……わかつた一緒に帰路につくう、後の事は……それから考えまつ」

「ボーマン教官!!」

「あんたじ向やつてんかいー！やつねとあらかるよー！」

そんな時、畠山が森の向こうから走ってきてきた。

「畠山!?お前なんでこんなところ!?」

「あんたじが遅いから迎えてきたのさ、ほりとつとしなーって時雨、あんたその腕!?」

「なーに、事を穢便に済ませた代償だ。大した事ないよ

その話を聞いて畠山がコチラを睨んで来る、そりゃ教官ナイフ一本しか持つてねーんだもん俺も刺したって普通はバレるわな…やつからフォローバッカつしてもひつてゐたがじの件はやつめよりキツチリ頼むべ時雨。

俺達が走つて海岸線に着くとそこには小型のゴムボートに乗った芳乃がいた、「イツ等帰れって言つたの！」。

「そんな事はいいからそれとしなやーーーってそのおじさん連れてきて大丈夫なの!?」

「いいから急げ！皆巻き込まれるぞ！」

「あん、もひちゃん捕まつてなさいよ!!」

「船長！ガキ共を回収しました！」

「よしー悟、遠慮はいらねえ！限界まですつ飛ばせー！」

「了解！超電動推進全開!!」

ドバアアアアアアアア!!!

「優ちゃん、ところでの石版は？」

「…忘れてきた」

「ちよつ!?」

「優…」

「いいんです、ボーマン教官。これが俺の判断ですか？」「

「そうか…それでいい、お前はこれからも己の正しこと思想<sup>まつと</sup>を全うしてゆけ…」

「船長！後約一分で爆発します!!」

「速力140ノット！これ以上はスピードが上がりません！……まづい、このままじゃ間に合わない!?」

「ちよつと語ーなんとかしなさいよ!!」

「クッ…副長！両翼のメインウイングの展開を半開にしてください!!」

「なつ!?何を言い出すんだ!!今のままでモダ定性は限界なんだ、そんな事したら船が吹っ飛ぶぞ!!」

「大丈夫です!ロシナンテのポテンシャルならやれます…」コイツを信じてやつてやつてやれ!!」

「ロシナンテを作ったのは俺達だぞ…その俺たちがコイツを信じてやらなくてどうする!!副長…やれ!!」

「…了解!!」

ウイイイイイ… ガッガガガガガ!!!!

「ちよ、チヨット!凄い…振動よ!!」

「悟!!」

「ロシナンテ!お前に魂があるのなら…応えろ!!」

バシュウカウカウカウン!!!

「速力150ノット!!…信じられない、速度が上がって逆に船体が安定しました!!」

「時刻…きます!!」

「皆!何かに掴まれ!!」

!!!!!!  
!!!!!!  
!!!!!!  
!!!!!!  
!!!!!!  
!!!!!!

バシュウカウカウカウカウン!!!!

幽霊島は島を取り巻く暗雲とエネルギーと共に姿を消した、後に残つたのは空間転移で持つていかれた雲の隙間から差し込む日差しと穏やかな海だけだつた……

「あ……危ないとこひでしたね、ミスター・ラリー。しかしボーマン少佐には感謝しなければ……彼が事前に連絡を入れてくれなければ間違いなく我々もあの爆発とともに消滅してしまったよ」

「ああ……結局奴は任務失敗の責任を取つてあの島で最後の仕事を全うすると言つていたが……」

「どうかなされましたか？」

「……イヤ、なんでもない。」

（もしアレが心変わりするなら……いや、ありえんか。ヤツも所詮殺す事しかできん殺戮マシーンなのだから）

「ボーマン……」

「ステイー・ブカ……生き恥を晒してしまつているな私は……」

「……死しが教える事は確かに重く深いモノだ。だがな、師しが教えられる事は時折それ以上に重く深いモノがある。そしてソレは逆もまた叱りだ……」

「私が優に教わる……という事か？」

「ソレをお前に教えるのが優か他の誰だかは解らんさ、ただソレは生きていないと解らんことだ。俺もつこつき教えられた所だしな……」

「お前がか？」

「ああ…まつたく若じ奴らつてのは、時折じつりの予想を一つも一つも飛び越えてこきやがる。あこつ等せ可能性に満ち溢れているからな」

「可能性…か」

「まつたく…優ちゃんつてば本當にオマヌケさんなんだから、アレだけ苦労して用心なケースを忘れて来ちゃうなんて。私なんか、見てホーリー！」

「…お前なんだよその宝石は?!？」

「あれ？芳乃、あの島の物は何も持つていかないって口造達に言つてたんじゃ…？」

「もちろん、」「はあの島に打ち上げられた密船によつて持ち込まれた物なんだもん。嘘は言つてなこわよ、話

「詐欺だな、そりゃ」

「あら、こーじやない。」の子達もそれで納得してくれたんだし…ね

「」

「……（口ク）」

「……オイ、芳乃」

「なーに、優ちゃん？」

「…おひりさんは？」

「……（ジー）」

「ああ、この子？最初に声を掛けた子なんだけじ癪かれちゃつたみたいで…付つてきちゃつた」

「付いてきちゃつた じゃねーよ！犬猫じゅねーんだぞ…」

「な、なによお…じゅああのまま島に放置しきつて言つの？優ちゃんひどーい!!」

「まあまあ落ち着きなよ、御神苗。それで芳乃のナニーすんだい？」

「ん~ついのマンショングレード禁止だし…」

「コレをペシトとして扱つてもいいのか？」

「ウチも無理だぞ、下手すると好奇心旺盛な科学者にバラされる恐れがあるからな」「

「じゃあしーちゃんの所は？」

「いや、ウチも地蔵は間に合つてるんだが…」

「……（フルフル）」

「地蔵じゃなくて石像です、だつて」

「あ、これは失礼」

((((ペシト扱いはいいのに地蔵扱いはダメなのか…)))

「いいんじゃないかい、時雨。最近天が遊び相手がいなって言つてたし」

「ん~意思の疎通が取れればいいんだが…」

「なんかメンゼル爺さんに頼んでみるか？」

「アレも可能性の一つか…」

「イヤ、あれはどうなんだろ?…」

## 『じじいと少女』

「ふう…」

私はあれから岬越寺君の家で匿つて貰つて、アーカムを抜けトライデントに荷担しあめおめと逃げ延びてしまつた、所属は米国軍づきだつたのでトライデントとしても表だつて襲つてくることはないだろつ…。

老兵は死すべしと決意し時代を担う若者に全てを託すかと思つたのだが、その若者に命を拾われてしまつた。今ここにいるのはボーマンといつ軍人ではない、ただの抜け殻だ。

「あれ、ボーマンのじーちゃん。おはよっ!」

「あ、ああ。おはよつ天使ちゃん」

この子は板垣天使といつてこの岬越寺邸に住む女の子だ、こんな老人にも気をかけてくれるのはここに住む子供達の特徴の一つだ。

「いまからここで素振りするけどいい?」

「ああ構わんよ、私こそ此処にいていいかね?」

「ぜーんぜん、ウチの素振りなんかでよければいくらでも見てってく  
れよな!」

そういつて天使ちゃんは背中に担いでた日本刀を抜いて素振りを始めた、子供が持つにはかなりの業物に見えるが…

「素振り中すまないが……、ああ続けたままで構わないよ。それはなかなかの業物とお見受けするが?」

「しかし日本では刀は持ち歩けないだろ?」

「うん……だから……いつも……メンゼル……じーちゃんが、くれた!……誕生日……プレゼントの……ゴルフクラブ……持ち歩いてるよ!」

「メンゼル博士のプレゼント……？いや、まさか！」

そんな事を考えながら天使ちゃんの素振りを眺める、あの歳でここまで鍛えているのか。土台がしつかりしてるな、じっくり育てば後5年ほどで実力が開花するだろう……。そう言えば彼女の師はあの達人だつたな。なら……

「ああ～天使ちゃん、もう一つ聞いていいかな？」

「ん？ なに？」

「もし…君の師匠が自分を殺してくれと頼んだら…君はどうする？」

あの戦いで私は優に殺されてもいいと思っていた、しかしそれは優に師匠殺しという軽くはない十字架を背負わせる物でしかないと彼は言い切った。

私の考えは間違いであつたのだろうか？だが、戦い殺す事しかしらぬ老兵などこの先の時代を生きていい筈もない…

そんな事を考へてゐると先ほどまで聞こえていた素振りの音が聞こえないことに気がついた、顔を上げるとそこには……田から涙を流

した天使ちゃんがいた。

「ひっぐ…ウチ、が…ジー、ちやんをヒック…殺さなきゃ…グス、いけないの…か？」

私はなんて馬鹿者なんだ、こんな子供にあんな事を聞いてどうこうつもりだった!?

そんな事、考えるまでもないではないか! この涙がその答えだ…そして気づいてしまった。例えどれほど武芸を身につけても、例えどれほど兵士として育てても…私から見ればこの子も優も同じ子供だという事に。あの時優は涙を流さなかつた、しかし心では泣いていたのだろう。もし本当に手を掛けたとなれば、その心に刻まれる傷とはいかほどのものだったのか。この子の泣きじゅぐる姿を前に初めてその事に考えが至つた。まったく私は大馬鹿者だ…

「おう、ボーマン。ちとそこに戻らんか」

「刺さつとい、刺さつといのぞ八郎兵衛」

八郎兵衛がどこからともなく現れ眉間に日本刀を突きつけた(刺さつとい)

「うわ～～～ん!!!」

「ぬお?! それどいつもじゃないわい! ボーマン、お主も泣きやませるのを手伝わんか!」

「手伝つと言つたつて私には何にもできんぞ！」

「なんでもいいんじゃ氣を引ければ！ほゝれ天使、新作の河豚の針千本じゃぞ～」

と言つてハ郎兵衛は針まみれの球体を出すが西洋人の私にはまったくわからん！私に出来ることと言えば・・・

「ほゝら、天使ちゃん。おじーちゃん一人になつちやつたぞ！」

私がドッペルゲンガーで一人になると天使ちゃんは泣き止み目をまん丸に見開いてこちらを見ていた、やはり子供には怖い「スゲーーー!!」ん？

「じーちゃんどうやつて二人に分かれたの？つづーか氣配もあれば実体もあるし分身とかじやねーんだよな!?スッゲーゼ、ボーマンジーちゃん！」

先ほどまで泣いていた天使ちゃんは泣き止みこちらに尊敬の眼差しを送っていた。私が彼女を笑顔にしたのか……今まで多くの命を奪い、血に塗れる事しかしなかつたこの「<sup>ドッペルゲンガー</sup>重身」で…

「び、どうしたじーちゃん！腹いてーのか！」

私は泣いていた…殺すことしかできない己に終止符を打とうと思つていた私はたつた一つの笑顔に救われたのだ。

「い、いや…すまない。なんともないんだよ…」

「ほんとか？正露丸いらぬーか？」

「ああ、…大丈夫だよ。問題は解決したからね」

そう、問題は解決した…私にも人を笑顔にする事ができた。ならば今ここにいるのは抜け殻ではない、一人の年寄ボーマンとしてやれることがまだまだあるのかもしない…

「ボーマンよ、なにも戦うだけが人生じゃないわい。若い連中を育て見守りながら生きるのも悪いもんじやないぞい？」

「そのようだな…ああ、」のよくな気分も悪くはない…」

私に血縁の家族はいないが息子のような優がいれば可愛い孫として天使ちゃんを可愛がる事もできるだろう…恵まれているのだろうな、私は。

「ボーマンジーちゃん、その技教えてくれよー! 今度の新年会で一発芸として披露すればマジうけるだろうからさー!」

「私の「一<sup>ドッペルゲンガ</sup>重身」を一発芸に…フツハツハツハ!! そうかそうか、一発芸か!? …それなら教えてあげないとな、でもちょっと難しいぞ?」

「そのほうがやりがいがあるってモンよ!」

「そうかそうか、では…」

この日一人の老兵が一人の天使に救われた。  
本来あり得なかつたこの出会いが後に「相伝秘伝の宝庫」と言われる少女の誕生に繋がる事となる…

「あ、カーリー。じーちゃん正露丸いらねーって、代わりにお茶と羊羹でも…つてもう持ってきてんじゃん！さつすがカーリー！ 気が利いてんな！」

「……（ポツ）」

彼女？も新たな生き方を見つけたようである。

『作戦始動』

「クッ 来るなあ !!」

「何故だ! 何故鎌が效かない!」

「貴様等程度の糸魚では話はならん」

「後悔に！猶不當時に？」が、一いぢり、「後悔に！」

「ほう、獵犬部隊とな？面白そうだ、お前達よりは楽しめ』標的を確保

した  
弓を上せる

「…ツチ！ もハツし樂しませぬ！」

『引くぞ……』

「ファン！ 命拾いしたな…」

۱۰۷

「何を勘違いしてやがる」

二二九

「命拾いしたのはその猶大共だ、俺様に向かつて引き金を引いたお前達を

生かしておく訳ないだろ？

「フン、こんなものは只の前哨戦だ。待つていろ、**朧**!! 必ず貴様を倒して俺が世界最強になつてやる!!」

「チツ！遅かったか…エーベルバッハ軍曹、積み荷の方は？」

「既に持ち出されてしまっています」

「クソ！まさか達人クラスが出てくるとは…」

「それだけでは無いようです、積み荷を守っていた者は皆ナイフのような

刃物で喉を切り裂かれています」

「積み荷は陸軍の支援物資と聞いていたが…どうも焦臭くなつてきた  
な。

少将に報告だ、判断を仰いひ  
「了解しました」

~~~~~

「さて、本日晩に集まつてもらつたのは他でもない。遺跡に関する  
案件なのだが…」

「山本さん、集めるにしても集めすぎじゃねーか？アトランティスに  
でも乗り込むのかよ？」

優はチャカしてそう言つてるが確かにここにいるメンバーを見れば国落としでもするのかと思えるメンバーだった。

スプリガン側からは優、ジャン、隕、ティア。

ASE側からは百舌鳥さん、悟、オウル、波戸さん。

そして俺と親父、たつた10人と思うこと無かれ、各々が一人で1  
000人分活躍できる文字道理「一騎当千」がそろつてているのだ。

「まずは事の起こうじから説明しそう、先日ドイツ陸軍の補給部隊が何者かによつて襲われた。

積み荷はほとんどが無事だったがたつた一つのアタッシュケースが盗まれた」

「補給物資の中にアタッシュケース? 何が入つてたんですか、山本さん?」「…

「… 聖杯だ」

「はあ!? なんだつてそんなモンがそんなとこに!?

「実はその輸送にはネオナチが噛んでいたんだ、彼らは自らが発掘した聖杯を

安全に目的地に運ぶためにあらゆる手段を用いて偽装し輸送しようとしました。

「その本命が…」

「ドイツ陸軍を利用して運び出そうとして他にも団があつたんじゃないですか?」

「ああ、情報では同時に5つの団が陸路、海路、空路によって出発していた

らしいが襲われたのは本命の陸軍部隊だけだった

「なるほど、襲つた連中は力だけでなく情報収集にも長けてているという事だね」

「その通りだ秋雨、そしてその情報を提供したと思われる組織が以前より

「山本鳥達ASEが追跡している『キマイラ』とこの犯罪シンジゲートの可能性が

出てきたんだ」

「百舌鳥さん、キマイラって言つと以前…」

「ああ、米軍のネットワークに進入して『バラクーダ』をハッキングしてお前に

魚雷をぶち込んだ奴らだ」

「しかし今回はやけに情報がはえーな山本さん」

「ああ、その事なんだが実は…」

「私の元に一通の招待状が届きましたね」

「臘に招待状?」

「差出人はフォルトナという男でした」

「このフォルトナという男、実は『トライデント』のスポンサーの人でな。

武器商人の癖に強い素質のある子供を誘拐して育てるという質の悪い男なのだよ、そしてその男が今度20歳未満の格闘家を集めて大会を

開くそうだ。臘の元に届いたのはその招待状だな、宛名はお前と連名になつてたぞ優」

「げつマジかよ」

「もてもてじやねーか、お前」

「武器商人に興味もたれても嬉かねーよ」

「ああ、その手紙ならウチにも届いていたよ山本」

「何? 本当か秋雨」

「どうやら弟子を持つ達人の元には可能な限り招待状を出しているようだね、

同時に裏に開わる大富豪なんかも集めてパーティーを行うとか

「そんなタチの悪い男の招待に応じる馬鹿がいんのか?」

「まさかそれを釣るための…」

「ええ…聖杯トロフィーってところね」

「さしづめ聖杯戦争ってか? ティア、ちなみにその聖杯は…」

「恐らく本物ね、まだ未確認だけど聖杯には御靈が宿っているらしいわ。

ネオナチが動いているところ」とは…

「おいおいマジかよ…」

「…」

「ん? どうしたんだ時雨?」

「いや、確かに聖杯に釣られる奴もいるだろ? …だけしそれだけオナチや

ましてドイツの正規軍を相手にするつてのはどうも…な

「聖杯を奪つたのはトロフィー代わりの理由以外にも何かがある、と？」

「…中身かね」

「しかし御靈を入れる器がなければ話にならんだろう」

「百舌鳥、ネオナチは恐らくあの男のクローンの制作に成功しています」

「なに!? 本当か朧！」

「しかしそれなら余計にわかんねーゼ、いくらトライテントでも流石にクローンまで

用意はできねーだろ」

「それを調べるためにASEに動いてもらひつもりだ、頼めるか百舌

鳥

「ああ、ASEは正規の以来ならどんな仕事だつて受けれるさ。いけるなお前たち?」

「まかせといてくださいよ、百舌鳥さん!」

「フン、本来なら僕一人で十分なんだがね。…くれぐれも足をひっぱらないでくれよー人とも」

「あの…百舌鳥さん、なんで俺まで?」

「ああ、それには理由があつてね悟君。今回の大会会場となる場所はカストロが所有する私有地の

孤島でね。トライデントのスポンサーらしくガツチガチに最新武器で武装された要塞で

招待されていない不法侵入者は並の腕では近づく事すらできないんだ」

「という訳だ、お前は潜水艇を使い波戸とオウルを近くまで送り出した後に

近くに止めてある巡視艦に戻つてヘリで待機だ」

「俺たちはどーすんだ、山本さん?」

「お前と朧はせつかく招待状が来ているんだし正面から行つてくれ、

そちらに口を開きつけていた間にジャンとティアに聖杯を探つて  
むりつ」

「チ！俺は裏方かよ… へマすんじゃねーぞ御神苗」

「お前こそ、油断して獣人なんかになるんじゃねーぞ」

「ハア… ティアよろしく頼むぞ、お前達の足はフォスター特別顧問に  
要請してある」

「わかつたわ… フフフ、ステイーブ…」

「んで親父、俺たちも正面から乗り込むのか？」

「ああ、その事なんだがね。実は他のみんなにも招待状が届いていた  
みたいなんだよ」

「他のみんなって… オイ、まさか連れていく訳じゃねーだろ？な？」

「ふう、これだから馬鹿息子は… 最近亞凹とよく現場で遭遇するそう  
だね？ その話を聞く度に

他の子達が軽い疎外感を受けている事に気づかないかい？」

「うひ… いや、それは薄々気づいてはいたが、しそうがないだろ？危  
ないんだし」

「うむ、いつもなら私も進んで同行させよとは思わないが… 今回は  
大丈夫だろ？」「

「なんで？」

「保護者（師匠）同伴だからさ」

「…つまり俺たちの作戦つて」

“ 家族みんなで南の島でリゾート気分を味わつてから適当に暴れて

帰ろう”大作戦つてどこかなー